

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

I

1995年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1998.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原遺跡東部地区発掘調査報告 I

1998.3

本書であつかう長原遺跡北東部は、瓜破台地から河内平野に移行した位置にあたり、沖積層が厚く、古墳時代以前の調査がほとんど行われていない。

調査では段丘構成層のほか、縄文時代後・晩期から弥生時代にかけての遺構・遺物を確認した。古墳時代では氾濫によって埋没した櫓（しがらみ）があり、洪水の前に行われた低湿地の開発に係わるものと考えられる。調査地を含む一帯は、当時、扇状地と自然堤防に挟まれた低湿地であり、櫓の存在はその開発状況を明らかにする端緒となるだろう。飛鳥時代から平安時代後期には集落域となり、今後その広がりが明らかにされていくことと思われる。なお、地籍図からは城山古墳跡が推定されているが、本調査地ではそれに関連する一切の遺構・遺物は見つかっていない。

また、従来、主として台地上の地層で確立されてきた長原遺跡標準層序との対応関係については、より細分可能な状態であり、古墳時代以前の遺物も乏しかったため、暫定案を示したものの、その検証は将来の調査の進展に期したい。

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

I

1995年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1998.3

財団法人 大阪市文化財協会



柵検出状況（北西から）

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

I

1995年度大阪市長吉東部地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1998.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大阪市長原遺跡は、はるか数万年の昔から人が住み続けてきた場所であります。これまで、財団法人 大阪市文化財協会は10数年にわたってこの地を発掘調査し、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅵおよび『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅺとして、その成果の一部を披露してまいりました。

しかし、長原遺跡に埋もれた歴史は、まだまだその全貌を明らかにしたとはいえません。繰返し行われる発掘調査は、日々新たな発見を私たちにもたらしてくれます。本書からはじまった長原遺跡北東部での発掘調査報告は、私たちの祖先が営んできたさまざまな生活のようすを以前にまして明らかにしてくれるでしょう。私たちが住む街の下に広がるかつての河内の風景が、いっそう鮮やかに浮かびあがることに、本書が少しでも寄与することを願ってやみません。

最後に、発掘調査および本書の作成にあたり、ご協力をいただきました大阪市建設局および同長吉東部土地区画整理事務所に深謝の意を表します。

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐治 敬三

例 言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が、1995年10月～翌年3月に実施した、大阪市建設局長吉東部土地地区画整理事務所による平野区長吉六反1丁目の土地地区画整理事業に伴う発掘調査(NG95-57次、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。

一、発掘調査は、専門調査役(現調査部長)水島輝臣氏の指揮のもとに、調査課調査員(現調査部報告書作成室)清水和明が担当した。報告書の編集は清水が行った。本文の記載は第Ⅰ章第1節を大阪市教育委員会文化財保護課主査植木久と当協会総務課主任(現総務課課長代理)高井健司が、第Ⅲ章第4節の土器・土製品に関する範囲を調査課課長代理京嶋覚が、第Ⅲ章第7節1)を同課調査員(現調査部報告書作成室)久保和士が行い、それ以外は清水が行った。

なお、英文目次・要旨の作成は同課調査員岡村勝行と調査補助員Robert Condonが行った。

一、古墳時代の櫛(しがらみ)の樹種同定は川崎地質株式会社へ委託し、第Ⅲ章第7節2)に記載した。

一、遺物写真の撮影は徳永園治氏に委託した。

一、基準点測量は大阪市1級基準点を利用し、国土平面直角座標値(第Ⅵ系)に基づくものである。水準点は、大阪市土木局管理の「南-49(大阪市立長吉南小学校内)」水準点を基に長吉東部土地地区画整理事務所が設置したものを利用し、T.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。なお、本文中ではTPと略称した。

一、発掘調査と報告書作成の費用は大阪市建設局が負担した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、その他の資料はすべて当協会が管理・保管している。

一、発掘調査および報告書の作成には以下の調査補助員が参加した。

池田啓剛・大野智史・梶本洋子・後藤紀子・角田賢司・高島由紀子・秦英嗣・水野谷子・藁九重子・山口光範・渡辺愛彦(50音順)

凡 例

- 一、遺構名の表記は、従来どおり掘立柱建物にはSB、柱穴・小穴にはSP、土壌にはSK、溝にはSD、不明遺構にはSXの略号を用いるが、堰にあたる横(しがらみ)は大阪市文化財協会では通常SAと略される陸上の横(さく)と区別するため「横」と明記し、必要に応じて仮名を挿入した。土器埋納遺構は略号を用いない。また、遺構番号は調査区の層序に対応するように、第5層の掘立柱建物にはSB501、第11層の土壌にはSK1101のように表記した。遺物にはすべて通し番号を1から順に付したが、石器遺物に関しては、大阪市文化財協会が弥生時代以前の石器遺物に対して個別に与える登録番号も表2に記載した。
- 一、本調査では独自の地層番号を付けているが、長原遺跡標準層序[大阪市文化財協会1996a]との対応を表1に記載した。なお、長原遺跡標準層序は基本的にNGOO層と略称する。
- 一、本書で用いた器種名および土器編年については、古墳時代の須恵器は[田辺昭三1966・1981・1982]に、飛鳥・奈良時代の土器は[奈良国立文化財研究所1976・1978]に、平安時代の土器は[佐藤隆1992]に、平安時代後期以降の瓦器は[鈴木秀典1982]に従うものとする。
- 一、註はそれぞれの節末に、引用・参考文献ならびに索引は本書の巻末に付した。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	3
第Ⅱ章 立地と歴史の変遷	5
第1節 遺跡の立地	5
第2節 歴史の変遷	8
第Ⅲ章 調査の結果	12
第1節 層序と出土遺物	12
1) 調査地の層序	12
2) 出土遺物と長原遺跡標準層序との対比	15
3) 石器遺物	17
第2節 縄文時代の遺構と遺物	21
1) 第17層の遺構と遺物	21
2) 第16層の遺物	22
第3節 弥生時代の遺構と遺物	23
1) 第13層の遺構と遺物	23
2) 第11層の遺構と遺物	23
第4節 古墳時代の遺構と遺物	25
1) 第8～10層の遺構と遺物	25
2) 第7層の遺構と遺物	25
第5節 飛鳥～平安時代の遺構と遺物	38
1) 第6B層の遺物	38
2) 第6A層の遺構と遺物	41
3) 第5B層の遺構と遺物	52
4) 第5A層の遺構と遺物	55
5) 第4層の遺構と遺物	56
第6節 鎌倉時代以降の遺構と遺物	57
1) 第3層の遺構と遺物	57
第7節 動植物遺体の分析	59
1) 動物遺体の分析	59
2) 欄に使用された材の樹種同定	61
第Ⅳ章 長原遺跡北部周辺古墳時代中・後期の様相に関する予察	63
引用・参考文献	70
あとがき	
索引	
英文目次・要旨	

図 版 目 次

- 1 第8層以下の地層
 - 上：第8～18層堆積状況(北壁)
 - 下：第18層堆積状況(南西から)
- 2 第17層の遺構(1)
 - 上：第17A層上面検出遺構(北から)
 - 下：SP1703の埋土断面(南東から)
- 3 第17層の遺構(2)
 - 上：SK1701検出状況(東から)
 - 下：SK1701埋土断面(東から)
- 4 第11・13層の遺構(1)
 - 上：第11・13層検出遺構(北から)
 - 下：SP1301埋土断面(北東から)
- 5 第11・13層の遺構(2)
 - 上：第11・13層検出遺構(北から)
 - 下：SK1101埋土断面(南から)
- 6 第7層の遺構(1)
 - 上：第8層上面検出状況(南から)
 - 下：第6B～8層堆積状況(北壁)
- 7 第7層の遺構(2)
 - 上：欄検出状況(南東から)
 - 下：枕で固定された榎木(東から)
- 8 第7層の遺構(3)
 - 上：欄東部検出状況(北から)
 - 下：欄中央部検出状況(北東から)
- 9 第7層の遺構(4)
 - 上：盛土内部の敷物検出状況(北西から)
 - 下：盛土内部の敷物検出状況(西から)
- 10 第7層の遺構(5)
 - 上：欄と基底の踏込み痕(西から)
 - 下：欄東部の盛土・敷物の状況(南から)
- 11 欄周辺の遺物
 - 上：欄に流入した刀形木製品(101)出土状況
 - 下：草鞋状の編物(109)出土状況
- 12 第7層の遺構(6)
 - 上：欄周辺の踏込み痕検出状況
 - 下：同上完掘後
- 13 第6A層の遺構(1)
 - 上：第6A層下面検出遺構(南から)
 - 下：第0～6A層堆積状況(南壁)
- 14 第6A層の遺構(2)
 - 上：土器埋納遺構検出状況(南から)
 - 下：同上埋土断面(南から)
- 15 第6A層の遺構(3)
 - 上：南部遺構検出状況(北西から)
 - 下：同上(北東から)
- 16 第6A層の遺構(4)
 - 上：南部遺構掘削状況(南西から)
 - 下：SB601検出状況(北西から)
- 17 第6A層の遺構(5)
 - 上：第6A層下面検出遺構(北から)
 - 下：北部遺構掘削状況(南西から)
- 18 第6A層の遺構(6)
 - 上：埋土断面(南から)
 - 下：SK607埋土断面(南西から)
- 19 第5層の遺構
 - 上：第5層下面検出遺構(北から)
 - 下：SX501掘削状況(南西から)
- 20 石器遺物
- 21 第7層出土遺物(1)
- 22 第7層出土遺物(2)
- 23 第7層出土遺物(3)
- 24 第7層出土遺物(4)
- 25 第7層出土遺物(5)
- 26 第7層出土遺物(6)
- 27 第7層出土遺物(7)
- 28 第7層出土遺物(8)
- 29 第6B層出土遺物
- 30 第6A層出土遺物(1)
- 31 第6A層出土遺物(2)
- 32 第6A層出土遺物(3)
- 33 第5層出土遺物
- 34 第3～5層出土遺物
- 35 動物遺体・欄に使われた材組織(1)
- 36 欄に使われた材組織(2)
- 37 欄に使われた材組織(3)

挿 図 目 次

図1 長原遺跡と土地区画整理事業の対象範囲	1	図26 第6B層出土遺物実測図①	38
図2 長吉東部地区土地区画整理事業計画図	3	図27 第6B層出土遺物実測図②	40
図3 調査地周辺地形図	4	図28 第6B層出土遺物実測図③	41
図4 瓜破台地の埋没古地形	5	図29 第6A層下面および基底面検出遺構平面図	42
図5 長原遺跡周辺の地形環境	6	図30 南部遺構平面図	43
図6 調査地周辺遺跡分布図	9	図31 SB601平面図・断面図	44
図7 調査区西壁地層断面図	折込	図32 SB602平面図・断面図	45
図8 地層断面模式図	13	図33 SB603平面図・断面図	45
図9 石器遺物実測図①	17	図34 南部溝・土壕断面図	46
図10 石器遺物実測図②	18	図35 北部遺構平面図	47
図11 第17層上面・下面検出遺構平面図	21	図36 北部溝断面図	48
図12 第17層遺構断面図	22	図37 第6A層出土遺物実測図①	49
図13 第13層上面・第11層上面および下面検出遺構平面図	23	図38 第6A層出土遺物実測図②	50
図14 第13層・第11層遺構断面図	24	図39 第6A層出土遺物実測図③	51
図15 第13層・第11層出土遺物実測図	24	図40 土器埋納遺構平面図・断面図	52
図16 第7層内検出遺構平面図	25	図41 第5層下面検出遺構平面図	53
図17 堀平面図	26	図42 SB501平面図・断面図	54
図18 堀断面図	27	図43 第5B層出土遺物実測図	55
図19 第7層出土遺物実測図①	30	図44 SX301・401・501断面図	56
図20 第7層出土遺物実測図②	31	図45 第4層下面検出遺構平面図	56
図21 第7層出土遺物実測図③	32	図46 第5A層・第4層出土遺物実測図	56
図22 第7層出土遺物実測図④	34	図47 第3層下面検出遺構平面図	57
図23 第7層出土遺物実測図⑤	35	図48 第3層遺構断面図	58
図24 第7層出土遺物実測図⑥	36	図49 第3層出土遺物実測図	58
図25 第7層出土遺物実測図⑦	36	図50 プレバート作製フローチャート	62
		図51 調査地周辺の埋没古地形と古墳時代中後期の集落	64

表 目 次

表1 調査地層序表	14	表4 ウマ下顎骨計測値一覧表	59
表2 石器遺物観察表	19	表5 樹種鑑定結果一覧表	62
表3 動物遺体一覧表	59	表6 関連調査一覧表	65

写 真 目 次

写真1 第13層・第11層出土遺物	24	写真3 須志器大壺口縁部のヘラ記号	39
写真2 第6B層出土遺物	39		

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

長吉東部土地区画整理事業の対象地域である平野区長吉出戸・六反地区は、『大阪市文化財地図』に記載されている埋蔵文化財包蔵地「長原遺跡」に全域が包括されている(図1)。そのため上記事業における埋蔵文化財の取扱いについて、事業主体である大阪市、文化財保護の行政機関である大阪市教育委員会、調査担当機関である財団法人大阪市文化財協会の三者は事前協議を行い、協定を結んだ。その間の経緯は次のとおりである。



図1 長原遺跡と土地区画整理事業の対象範囲(大阪市文化財協会1995a『大阪市文化財地図』から引用)

協議は平成6年から始められ、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所(以下、区画整理事務所とする)、大阪市教育委員会文化財保護課(以下、文化財保護課とする)、および当協会で行った。まず、区画整理事務所から事業概要の説明があり、道路予定地において埋蔵文化財の発掘調査を行うことで合意した。文化財保護課および当協会は、長原遺跡の概要と、本事業に隣接する長吉瓜破地区土地区画整理事業での事例を含めた同遺跡における発掘調査の現状を説明した。そのうえでこれまでの調査実績に基づき、具体的な発掘調査の進め方について三者で協議し合意をみた。

発掘調査を実施するにあたっては、本事業における埋蔵文化財の取扱い全般を協定書で、各年度における具体的内容を年度ごとの契約書で定めることとした。

協定書は、『宅地開発事業と埋蔵文化財』([宅地開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する研究会編1986])に準拠して当該事業および遺跡の特性を考慮し、大阪市・大阪市教育委員会・財団法人大阪市文化財協会の三者で「長吉東部地区埋蔵文化財に関する協定書」として締結した。内容には目的・対象・保存措置に関すること、調査の依頼・計画・開始時期に関すること、費用負担・支払や年間契約に関すること、さらに重要遺構や出土品の取扱いに関することなどが盛り込まれた。また、保存措置の方法は記録保存を基本とするが、遺構の内容によっては計画を変更して遺構を現地保存する場合があること、費用には発掘作業費・整理保存費・報告書作成費・調査雑費などが含まれること、事業の円滑な進捗に配慮することが確認された。なお、細部については別に覚書を結んで定めることとした。

大阪市建設局と当協会は都市計画道路1号線北半部を調査対象とした平成7年度の契約を締結し、報告書作製は平成8年度以降、順次行うこととした。

こうした経過を経て、平成7年10月から当該事業における埋蔵文化財調査が始まった。

(植木・高井)

第2節 調査の経過

本報告書の対象となった調査地は、大阪市平野区長吉六反1丁目の北部にあたり、面積は400㎡である(図2・3)。周辺道路の標高はTP+9.8mであるが、調査地は盛土のため50cmほど高くなっていた。

長原遺跡は次章で述べるとおり、瓜破台地の東部および東北縁辺部に位置し、北東側ほど沖積層が厚く堆積している。そのため、調査深度の関係から、調査地の近辺では、段丘構成層までを含めた発掘調査が実施されることがなく、長原遺跡北東部での最初の本格的な発掘調査となった。そこで、今回の調査では、段丘構成層を含めた遺跡北東部における基本層序の確立と、各地層に属する主要な遺構・遺物の確認を主眼とした。

低位段丘構成層は、埋没古地形の復元的研究からTP+2m前後で検出されることが予測された[趙哲済ほか1994]。そこで、現地表面から8mの深度までを調査対象とし、調査区全体を鋼矢板で囲み、深度に合わせて2回の切梁を設置するように設計して、1995年10月2日から工事に着手した。

11月21日から重機掘削を行った。調査期間との兼ね合いから、現地表面から1.5mほど下に堆積する平安時代後半ごろの遺物包含層の上まで掘削した。

11月27日に調査区内の遺構検出を開始し、同時に水準点の移動を行った。12月5日に鎌倉時代以降の遺構(第3層関連)の調査を終了し、8日までに調査区北部のSX401・501の調査を終えた(第4～5A層関連)。13日から平安時代以前の調査に入り、包含層内と下面および基底面で多数の遺構を検出

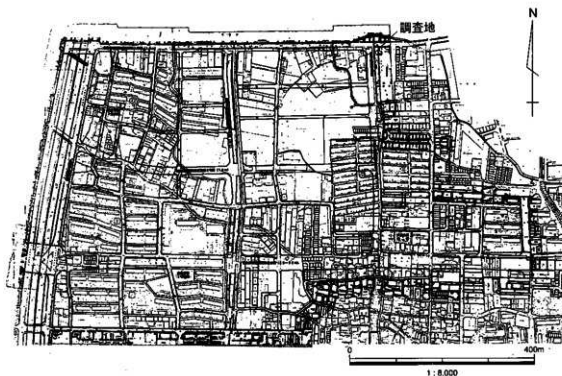


図2 長吉東部地区土地区画整理事業計画図(原図提供:大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所)

した(第6A・B層関連)。しかし、現地表面からの掘削深度が第1回目の切梁設置深度に達し、調査区の保全を考慮して年内中に切梁を設置するために、遺構検出の段階で調査を中断し、12月21日から切梁を設置した。遺構は飛鳥時代から平安時代にわたり、掘立柱建物・柱穴・土壇・溝・土器埋納遺構などがある。ほかに、調査区北端では地層内から飛鳥時代の土器が一括廃棄された状態で見つかった。

その下位には古墳時代後期中葉を下限とする厚さ2mに達する水成砂礫層があり、翌年1月19日から機械掘削を開始したが、途中で砂礫に埋没した構(しがらみ)が見つかったため、その範囲だけは人力による掘削を行った。2月2日に調査区の北端でトレンチを掘削し、下位の地層堆積状況を調べたところ、厚さ約1mの地層中に5枚の暗色帯が存在することが判明した。残りの調査期間を勘案して、断面で遺構の存在が明らかとなった2枚目の暗色帯(第11層)の下面まで、2月6日から再び機械掘削を行った。その際、構の調査は終了していなかったため、構の遺存状況のよい範囲だけを残り、調査を並行して行った。第11・13層で弥生時代と思われる遺構を確認し、さらに、第17層では縄文時代後期の遺構を調査することができた。その時点で2回目の切梁設置深度に達したため2月26日に切梁を設置したが、調査期間の関係で予定よりも設置範囲を縮小せざるをえなかった。その結果、以下の地層についてはトレンチによる断面の観察のみにとどまった。第17層の下位は厚い砂礫層(第18層)で、現地表面から深さ約7mまでを確認し、さらに、検土杖によって下位の地層を採取したところ、現地表下約8.5m(TP+1.8m)で不整合面を挟んで段丘層と推定される粘土層を確認し、2月29日に調査作業を終了した。

調査区の埋戻しおよび鋼矢板の解体などに1ヶ月間を要し、最終的に3月29日にすべての作業を終了した。

(清水)

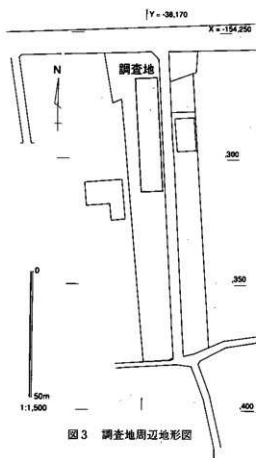


図3 調査地周辺地形図

第Ⅱ章 立地と歴史の変遷

第1節 遺跡の立地

長原遺跡は河内台地の北端部にあたる瓜破台地の東部およびその北東縁辺部に位置している。台地の北東部はなだらかに平野部に移行し、河内平野が展開している。

長原遺跡は北を平野川・長瀬川に、南を羽曳野丘陵・河内台地によって画された地域にあり、国府遺跡・船橋遺跡などと同様に平野を望む丘陵・台地の縁辺部に位置する遺跡の一つといえよう。遺跡の周辺では、古くから自然流路・河川が発達し、さらに、縄文時代に起こった海進現象などの大規模な自然現象は、各時代の人間活動に大きな影響を与え続けてきたと思われる。

低位段丘の段階では、沖積層中部海成粘土層基底の埋没古地形の復元から、瓜破台地付近にいくつかの谷筋が形成されていたことが明らかにされている[趙哲済ほか1994]。一つは、瓜破台地の中央部を南北に開析した狭く深い谷Aで、長原遺跡南西部を通して北北西へ向うものである。もう一つは、中央環状線の東側で遺跡南東部を通り遺跡北東部へ抜ける幅広く浅い谷Bで、両岸に小さな開析谷が数多く取付いていたようである(図4)。

また、長原遺跡の内外では、縄文時代の最大海進期に海岸線が遺跡周辺に達していたことを示す証拠がいくつか見つかっており、亀井遺跡(図4:1)ではTP+2m前後で含貝海成層が検出され、「河内湾の最高海面が、T.P.+2m(O.P.+3.3m)を越えるものであった」[那須孝悌・樽野博幸1980]と考えられている。大阪市内でも1994年に喜連東遺跡(図4:2)で上記の谷Aに堆積した海成層が[大阪市文化財協会1994]、また、本調査地の南西200mほどの地点で1996年に行われた長原遺跡の発掘調査(図4:3)でも海成層が確認され[大阪市文化財協会1996c]、谷Bの開口部付近に堆積したものと考えられよう。

縄文海進後になると河川の再形成に伴って沖積層が堆積し、河内平野が発達していく。旧大和川は奈良盆地から生駒山系と葛城山系の間を抜けて西流し、石川と合流したあと複数の流路に分かれ放射状に河内平野を北上している。河内平野は勾配が緩やかで、流路は安定せず、時

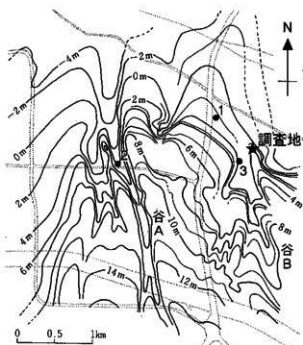


図4 瓜破台地の埋没古地形[趙哲済ほか1994]から引用)

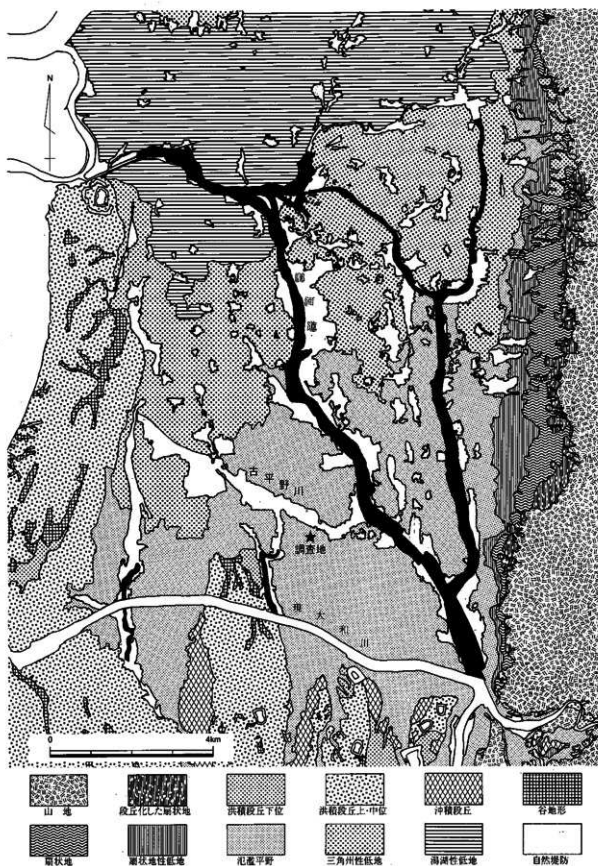


図5 長原道路周辺の地形環境

(国土地理院 1:25,000土地条件図「大阪東南部」、[大阪文化財センター1980b]第1図をもとに作成)

代によってその位置を変え、多様な地形環境を生み出すものとなった。そうした状況は古墳時代中期後半から後期にはしだいに安定化し、玉串川・長瀬川・平野川などの前身となる流路が固定化していくと考えられている[亀島重則・阪田育功1984a・b]。長原遺跡の北部を画している平野川は元来旧大和川の本流であったとも考えられ、弥生時代から古墳時代にかけてその位置を現在とはほぼ同じくしていったことが確認されている。旧大和川から長瀬川と分岐する付近(現在の八尾市植松町付近)で南に蛇行すると考えられている古平野川は、現在も自然堤防としてその痕跡が認められているが、時に大規模な氾濫現象を起し、遺跡の南部とはまた違った歴史的環境を生み出す要因ともなった(図5)。

さらに、前述の谷筋のように、羽曳野丘陵から北流し、古平野川へ合流する流路も存在していた。近世に廃絶された旧東除川は、瓜破台地の東斜面へ導水し水田開発を行うことを目的として、古代に台地東縁に開削された人工的な流路が前身となったと考えられている[木原克司1982・京嶋寛1990]。古墳時代以前の古東除川の流路については上記の谷Aとする考え[木原克司1982]と谷Bとする考え[趙哲済ほか1994]があるが、谷Aには古東除川を供給源とすると考えられる長原遺跡標準層序8C層が堆積せず、谷Bとする考えが有力である。いずれにしても、古代後半までには氾濫による堆積物によってほとんどが埋没してしまっている。

本調査地は低位段丘の段階では谷Bの開口部付近東側の微高地に位置し、第Ⅲ章第1節で記述する縄文時代後期に堆積した厚い砂礫層(第18層)は、海退現象に伴う激しい沖積作用に由来するものであろう。その後、古墳時代中期ごろまで谷地形が残りながらも大規模な氾濫現象はなく、調査地でも水漬きのシルトから粘土質の地層が暗色帯を挟みながら堆積している。しかし、古墳時代後期になって再び起った大規模な洪水現象は、遺跡南東部の調査では検出されておらず、供給源は平野川か谷Bの南東から開口部へ取付く谷筋と推測される。古墳時代中期から後期にかけて、付近一帯に幾筋かの流路が形成されたようで、同時期の堆積物と考えられる砂礫層が旧平野川に並行して亀井遺跡や城山遺跡でも検出されている。これを最後に大規模な水成堆積物は確認されず、調査地付近では一応安定した環境に移行したと考えられる。この古墳時代の洪水層については第Ⅳ章で再考する。

このように、長原遺跡の大部分が谷A・Bに地形的影響を受けているのに対し、遺跡北東部では東側からの河川による影響を強く受けているものと推測される。

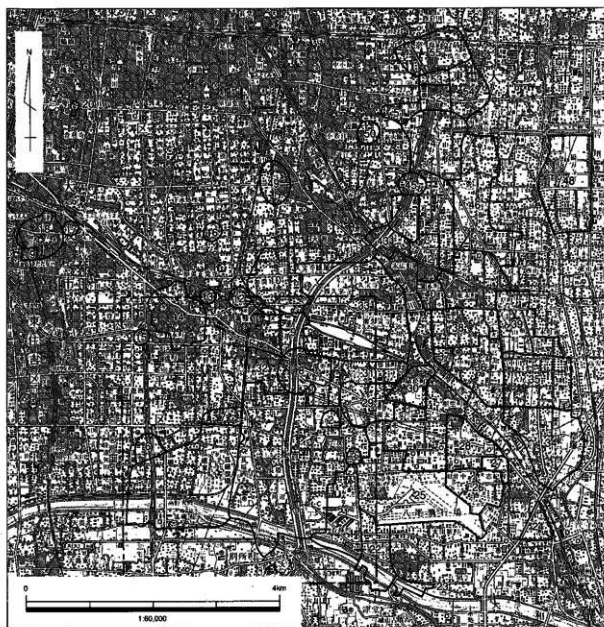
(清水)

第2節 歴史の変遷

河内平野における人類史は後期旧石器時代にさかのぼる。長原遺跡の南東に位置する国府台地には国府遺跡が存在し、近畿地方における旧石器時代研究の端緒となり、「国府型ナイフ形石器」とその製作技法である「瀬戸内技法」の認定が行われた。瓜破台地周辺でも、八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡で低位段丘構成層から沖積層下部層にかけて旧石器が出土している。特に、長原遺跡では後期旧石器時代の鍵層となる始良Tn火山灰(AT)に対比される平安神宮火山灰層[吉川周作ほか1986]の下位で多数の旧石器が出土し、歴史が後期旧石器時代前半にさかのぼることが明らかとなった点で重要である[大阪市文化財協会1996a]。さらに、大阪市内では中位段丘構成層に対しても人の存在を採す調査が行われている。その結果、長原遺跡および上町台地の付け根に位置する住吉区山之内遺跡で低位段丘構成層の基底面と中位段丘構成層の上部で何面にもわたる埋没古地表面を検出し、そこに大型動物の足跡化石を確認することができた[清水和明1992]。現在のところ、人間の活動に係わる痕跡は未確認であるが、将来にわたる課題といえよう。

縄文時代では、早期から前期初頭にさかのぼる栗津SZ式土器が出土した東住吉区勝山遺跡[松本百合子1991]や前期の遺物が出土した思智遺跡[瓜生堂遺跡調査会1980]、中期・後期の貝塚遺跡である中央区森の宮遺跡[森の宮遺跡調査会1972、大阪市文化財協会1996b]などが比較的古い時期の主要遺跡となるが、低地にまで集落が展開するようになるのは晩期以降、弥生時代前期にかけてのことと考えられる。長原遺跡では縄文時代初頭にあたる有茎尖頭器が10数点出土し[田島富慈美1993]、さらに有茎尖頭器の石器製作所とも推測される石器集中部[大阪市文化財協会1996a]も確認されたが、ほかに早～前期の遺構が検出された例はほとんどない。また、中期でも、その可能性のある住居址が検出された(註1)ほかは、わずかな土器片と石鏃が検出されるのみであり、やはり、安定して集落が形成されるのは晩期以降である。晩期の長原遺跡では長原式と命名された晩期最末の土器群をはじめ、多数の遺構が検出されている。周辺では八尾南遺跡で溝などの遺構と遺物が見つかった。しかし、以北の遺跡では、後～晩期の土器片は出土しているが2次的な堆積によるものが多く、河内潟に近づくため、環境上の制約を依然強く受けていたと考えられる。

長原遺跡では弥生時代に入ると水田経営が行われ、長原式土器と弥生時代畿内第Ⅰ様式中段階の土器が共存している[大阪市文化財協会1995a]。また、遺跡東部から北部に広がる中～後期の集落から竪穴式住居・方形周溝墓などが見つかった[京嶋寛1991、松本百合子・久保和士1993、櫻井久之1996]。以前と変わって平野部に集落が進出し、河川によって形成された自然堤防の周囲に広がる低湿地の微高地上の各所に遺跡が分布するようになる。そして、河内潟の汀線の後退に伴って、遺跡の分布範囲が拡大していく。弥生時代の拠点集落である瓜生堂遺跡[瓜生堂遺跡調査会1971]、山賀遺跡[大阪文化財センター1983・1984・1986]や亀井遺跡[大阪文化財センター1980bほか]、巨摩廃寺遺跡[大阪文化財センター1981]、思智遺跡[瓜生堂遺跡調査会1980]などが該当する。中期では上町台地東縁の桑津遺跡[田中清美1991・1995]、旧長瀬川・平野川流域の久宝寺遺跡[大阪文化財セ



- | | | | | |
|------------|-------------|----------|----------|-----------|
| 1 長原遺跡 | 13 平野寺前遺跡 | 25 木の本遺跡 | 37 龍華寺跡 | 49 衣指遺跡 |
| 2 城山古墳(推定) | 14 平野環濠都市遺跡 | 26 田井中遺跡 | 38 成法寺遺跡 | 50 小若江遺跡 |
| 3 六反古墳(推定) | 15 平野堂遺跡 | 27 志紀遺跡 | 39 小阪合遺跡 | 51 上小坂遺跡 |
| 4 大堀遺跡 | 16 加美北遺跡 | 28 老原遺跡 | 40 八尾寺内町 | 52 若江北遺跡 |
| 5 瓜破遺跡 | 17 杭全遺跡 | 29 太子堂遺跡 | 41 東郷遺跡 | 53 巨摩禪寺遺跡 |
| 6 瓜破北遺跡 | 18 桑津遺跡 | 30 植松遺跡 | 42 宮町遺跡 | 54 若江遺跡 |
| 7 喜連東遺跡 | 19 田辺院寺 | 31 跡部遺跡 | 43 佐堂遺跡 | 55 瓜生堂遺跡 |
| 8 亀井遺跡 | 20 お膳山古墳 | 32 竹岡遺跡 | 44 美園遺跡 | 56 岩田遺跡 |
| 9 亀井北遺跡 | 21 八尾南遺跡 | 33 久宝寺遺跡 | 45 友井東遺跡 | |
| 10 加美遺跡 | 22 太田遺跡 | 34 東弓削遺跡 | 46 荻振遺跡 | |
| 11 萩作庵寺 | 23 大正橋遺跡 | 35 中田遺跡 | 47 山賀遺跡 | |
| 12 長楽寺 | 24 弓削遺跡 | 36 矢作遺跡 | 48 福万寺遺跡 | |

図6 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院1:50,000地形図「大阪東南部」から引用)

ンター1987 a・b]、加美遺跡・亀井遺跡などが拠点的な集落として著名である。久宝寺遺跡では弥生時代前期から遺構が確認され、特に中期後半以降から後期にかかる掘立柱建物・竪穴式住居・井戸などの居住域と、水田などの生産域、墓域などが明らかにされている。加美遺跡では全長26mに達する大型の方形周溝墓が確認され、現在までに確認された近畿地方最大の弥生墳丘墓である[永島暉臣 ほか1985]。亀井遺跡では柱穴・井戸・土壇や、方形周溝墓・甕棺・木棺・土墳墓などの多様な墓も確認されている。また、集落全体を画する大溝も検出されており、河内平野の弥生集落の全貌を知る手がかりとなっている。後期に入ると友井東遺跡[大阪文化財センター1983・1984]がある。

古墳時代前期の長原遺跡では、各所で庄内式期の遺構が存在し、遺跡南東部で方形周溝墓が、北西部で住居址・方形周溝墓が見つかったりほか、本調査地の南西600m付近でも方形周溝墓が調査されている。周辺遺跡では、瓜破北遺跡[大阪市文化財協会1980]・八尾南遺跡[八尾南遺跡調査会1981]などで庄内式・布留式期の方形周溝墓が検出されているほか、特に加美遺跡で弥生時代終末から庄内式期にかけての方形周溝墓が密集した状態で多数検出されている[永島暉臣 1984]。舶載鏡を割って副葬した破鏡や碧玉製の管玉・鍬などの遺物が注目されるうえ、他地域から搬入された土器も多く、当該期の広範囲な人的交流を認めることができる。また、久宝寺遺跡からは庄内式期の準構造船の廃材を利用した用水施設が見つかったり[大阪文化財センター1987 b]。中期に入って塚ノ本古墳や一ヶ塚古墳などを端緒として長原古墳群が築造されはじめ、その消長から古市古墳群との関連が想定される。埴輪・初期須恵器を豊富に伴い、周辺で見つかったり集落からも韓式系土器が頻繁に出土していることから、朝鮮半島からの新しい文化の移入に係わりのあった集団の生活域・墓域であったと考えられ、木の本遺跡・八尾南遺跡・久宝寺遺跡でも初期須恵器や韓式系土器が顕著にみられる。また、長原遺跡北部でも長原古墳群内の一群が築かれ、さらに、亀井遺跡で確認された甲冑を含む武器具が副葬された古墳と河川を遮るように構築された頑強な堤の存在は、低地における治水集団の成長と畿内政権内の役割を示唆している[大阪文化財センター1980 b ほか]。さらに、上町台地の北端では5世紀後半に巨大な掘立柱建物の倉庫群が築かれ[大阪市文化財協会1992 a]、淀川および旧大和川水系につながる河内湖の水利を活かした大阪平野を重点的な開発地域ととらえることができる。

飛鳥時代以降になると、長原遺跡では前述のような台地上での用水路の開削に伴って広範囲での水田開発が認められている[京嶋寛1990]。その一方で、隣接する瓜破遺跡南東部では豪族居館とも考えられている大型の掘立柱建物が整然と並ぶ遺構群が出現し、水田開発の主体者と推測されている[南秀雄1987]。奈良時代では、遺跡中央部で集落が検出されており、後期難波宮と同范の重圓文軒丸瓦が出土し、都との強い関連性が指摘されている[大阪市文化財協会1992 b]。

奈良時代末期ごろに旧東除川を供給源とする大規模な氾濫が起り、長原ではその沈静を待って再び活発な人間活動が展開される。遅くとも平安時代後期には、遺跡の一部ないし全域にわたって条里制が施行され、それに沿って屋敷地と耕作地が展開している。

以上のように、河内平野はめまぐるしく変化する自然環境と、それに刻々と対応していった人間の歴史を内包している。その中に位置する長原遺跡は、旧石器時代から続く人間活動の痕跡が累積して

きた複合遺跡として重要な位置を占めている。さらに、発達した水成堆積物によって埋没した各時代の古地表面や、火山灰、暗色帯などの鍵層を地層中に含むことなど、遺跡の内外へ同時期の遺構を追跡しやすい利点ももっている。本調査地周辺は、従来あまり調査が行われてこなかった地域であるが、地理的環境も長原遺跡より北側に展開する亀井遺跡などと近く、今後の本格的な発掘調査の進展によって新たな成果を見出すことができるであろう。

(清水)

註)

- (1) [大阪市文化財協会1982a] pp.32-33に記載されたSB561が該当する。NG13層上面で検出され、直径約3.5 mのやや小型の円形住居址である。周溝内から凹基式石甕が出土し、縄文時代後期あるいは晩期と推定されているが、長原遺跡出土の石甕を総括した[菅栄太郎1995]の分類によればA-1形式に相当し、本遺跡での存続時期は縄文時代早～中期前葉(NG12/13層漸移帯～12B・C層)とされている。住居址の位置する付近ではNG9～12/13層漸移帯が細分しがたい状態であり、正確な検出面が不明なため時期決定が困難であるが、縄文時代中期にさかのぼる遺構である可能性を指摘しておく。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序と出土遺物

1) 調査地の層序(図7・8)

調査の結果、確認された地層は現地表下約8mにわたり、20層に大別される。これらのうち、第0層(現代盛土)から第18層の途中までは調査区の壁面で観察したが、第19・20層は検土杖によって採取したサンプルに基づいている。

第0層：現代の水田耕作後に行われた客土層である。

第1層：灰オリブ(5Y4/2)色含シルト極粗粒砂質細粒砂層で、現代の水田作土である。上面には第0層の客土に使用された機械によって受けた変形の痕跡が残る。

第2層：本層は以下の4層に細分されるが、すべて作土である。最上位の第2A層以外は基本的に砂を主体とする層である。本層は平面的な調査を行っておらず、地層断面の観察にとどまる。

第2A層：暗オリブ灰(5GY4/2)色含細礫細粒砂質シルト層である。調査区の北部を中心に分布する。

第2B層：暗オリブ灰(2.5GY4/1)色含細礫シルト質細粒砂層である。調査区の北部を中心に分布する。

第2C層：オリブ灰(2.5GY5/1)色シルト質細粒～極細粒砂層である。調査区の北部を中心に分布する。

第2D層：オリブ灰(5GY6/1)色含細礫シルト質細粒砂層である。調査区の北部を中心に分布する。

第3層：本層も層相からA～D層に細分されるが、A・B・D層はさらに2層に細分される。B層は調査区の西側に分布し、C層は東側にのみ分布する。D層はB層形成時に削平され、やはり西側にのみ分布する。また、B・D層の下面では遺構が検出されている。

第3A₁層：灰(7.5Y5/1)色含極粗粒砂細粒砂質シルト層である。

第3A₂層：灰オリブ(5Y5/2)色含極粗粒砂細粒砂質シルト層である。

第3B₁層：灰オリブ(5Y5/2)色極粗粒砂質極細粒砂層である。

第3B₂層：暗灰黄(2.5Y5/2)色含極粗粒砂シルト質極細粒砂層である。

第3C層：灰オリブ(5Y5/2)色極粗粒砂質シルト層である。

第3D₁層：灰オリブ(5Y5/3)色含極粗粒砂極細粒砂質シルト層である。

第3D₂層：灰オリブ(5Y5/3)色シルト混り極粗粒砂質極細粒砂層である。

第4層：灰オリブ(5Y5/3)色シルト質極細粒砂層である。本層は調査区北部の落込みSX401内

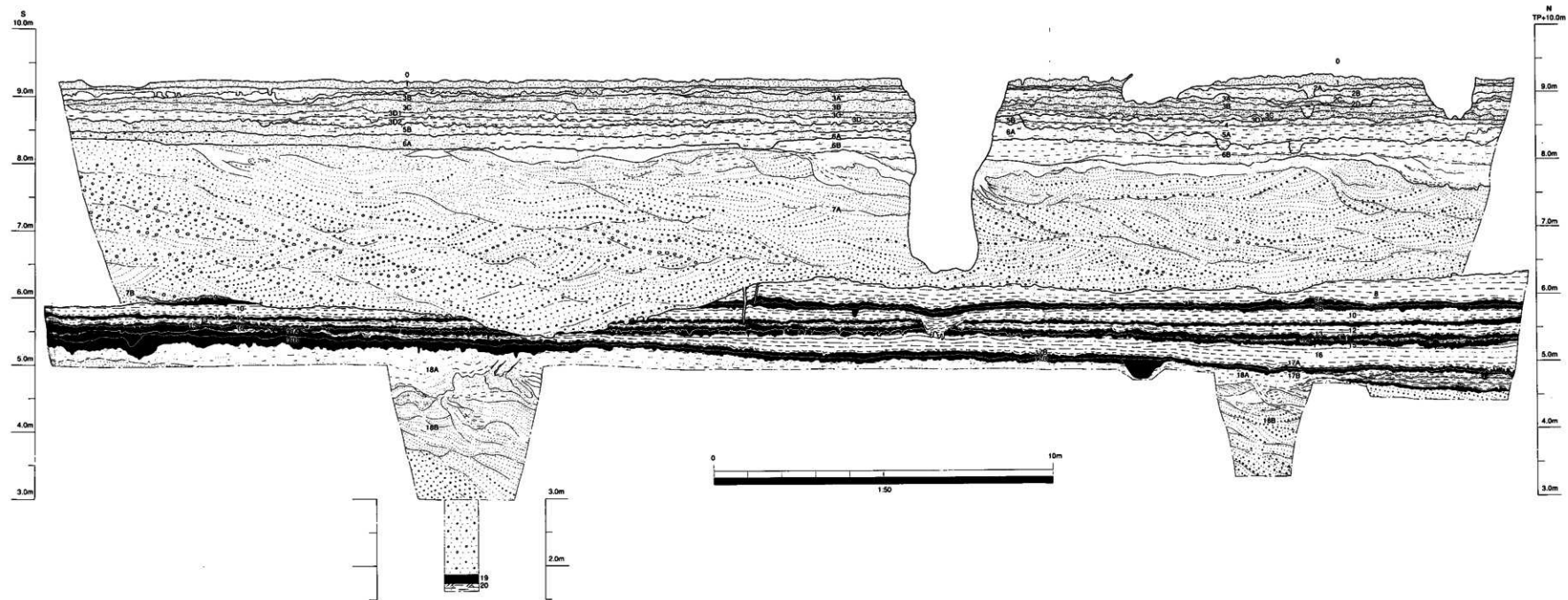


图7 调查区西带地质剖面图

にのみ確認された。

第5層：本層は調査区北部の落込みSX501内に堆積した5A層と、南部の5B層に分けられる。

第5A層：オリブ(5Y5/4)色極細粒砂質シルト層である。SX401内のみに堆積している。下位の第6層を母材とし、耕作によって攪拌されたものである。

第5B層：暗灰黄(2.5Y4/2)色含礫極粗粒砂シルト質中～細粒砂層である。調査区の南側ほど粒度が粗い。下面で遺構が検出される。

第6層：本層は調査区南部の6A層と、北部の6B層に分けられる。南部では6B層は6A層によって擾乱され、遺構内埋土としてのみ確認される。

第6A層：オリブ褐(2.5Y4/3)色含細礫シルト粗～細粒砂層である。調査区南部では細礫から極粗粒砂が顕著で、中部以北では細粒砂が主体となる。下面で多数の遺構が確認される。

第6B層：黄褐(2.5Y5/6)色含シルト細粒砂層である。

第7層：洪水層と考えられる。粒径の大きい砂層であるA層と小さいB層に細分される。両者は不整合状態で確認された。なお、本層が地震によって噴砂を起している現象を確認することができた。噴砂は、飛鳥時代の地層である6B層を貫いているため、それよりも後代の地震によるものと考えられるが、時期は未確認である。

第7A層：灰白(7.5Y7/2)色中礫～粗粒砂層である。地層内で櫓が構築されていた。

第7B層：オリブ黒(7.5Y3/1)色シルト質細粒砂層である。

第8層：暗緑灰(7.5GY3/1)色含炭化物極細粒砂混りシルト層である。水漬きの炭化物ラミナが発達している。

第9層：本層は色調の違いから2層に細分される。

第9A層：オリブ黒(10Y3/1)色シルト層である。

第9B層：オリブ黒(5GY2/1)色シルト層である。

第10層：本層は3層に細分される。水漬きの堆積物が連続的に堆積している。

第10A層：オリブ黒(5Y3/1)色粘土質シルト層である。上位の9B層の植物擾乱によって暗色化している。

第10B層：暗オリブ灰(2.5GY3/1)色細粒シルト層である。

第10C層：灰(7.5Y4/1)色粗粒シルト層である。

第11層：オリブ黒(5GY2/1)色シルト層である。上面には乾痕が認められる。上面と下面で遺構が検出された。

第12層：本層は3層に細分される。水漬きの堆積物が連続的に堆積している。

第12A層：暗緑灰(7.5GY3/1)色シルト層である。

第12B層：暗緑灰(7.5GY4/1)色粘土質シルト層である。

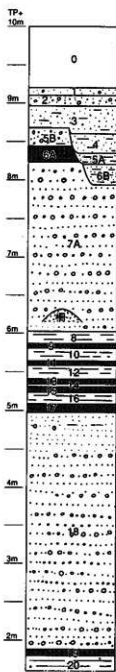


図8 地層断面模式図

第12C層：灰(10Y4/1)色粗粒シルト層である。

第13層：緑黒(7.5GY2/1)色シルト層である。上面で遺構が検出された。

第14層：オリーブ黒(10Y3/1)色含炭化物シルト層である。ラミナを認めるが、第13層によってかなり変形している。調査区北半に堆積し、第15層を覆うが、南半では第15層にアバットしている。

第15層：黒(10Y2/1)色粘土質シルト層である。

第16層：本層は粒径の違いから5層に細分される。水漬きの堆積物が連続的に堆積している。

第16A層：暗オリーブ灰(2.5GY4/1)色粘土質シルト層である。

第16B層：暗オリーブ灰(5GY3/1)色含炭化物シルト～中粒砂層である。

第16C層：暗緑灰(10GY4/1)色シルト層である。

第16D層：暗緑灰(7.5GY4/1)色含炭化物シルト層である。

第16E層：緑灰(7.5GY5/1)色粗粒シルト層である。

第17層：本層は3層に細分されるが、A層は北部にのみ堆積している。C層は下位の第18層上部が植物擾乱によって暗色化したものと考えられ、下面は漸移的である。A層の上面と下面で遺構が検出された。

第17A層：オリーブ黒(10Y3/2)色含中粒砂質シルト層である。

第17B層：オリーブ黒(10Y3/1)色含中粒砂質シルト層である。

第17C層：オリーブ黒(5Y3/1)色シルト質中粒砂～シルト層である。本層は未同定の火山灰層準であるが、中間型～多孔質型ガラスを多く含み、顕微鏡下での観察では長原標準層序の9Ciii層に降灰した火山灰の特徴と一致する。この火山灰は、[吉川周作ほか1986]のBB7火山灰層に対比される可能性が指摘されている[大阪市文化財協会1995a]。ほかに、若干の褐色透明の扁平型ガラスや高温型石英(β クォーツ)、褐色角閃石などの鉱物も含んでいるが、これらすべてが単一の火山灰起源のものであるかは定かではない。現在まで、長原遺跡における縄文時代後期ごろの降灰層準は長原9Ciii層下部のみで認められており、17C層がこれに対応するものと判定しておく。

第18層：大規模な洪水か、または河川の流路にあたと考えられる水成層で、粒径の違いから2層に細分されるが、大きな不整合は見られない。なお、B層から噴砂がはじまり、12層内に達しているため、弥生時代に起った地震によるものと考えられる。

第18A層：灰(5Y4/1)色含礫中粒シルト混り極細粒砂層である。調査区北部では下面が凹んだ場所があり、基底面に暗色化したシルトが認められる。

第18B層：灰(7.5Y5/1)色中礫混り細礫～極粗粒砂層である。下位の19層とは不整合面をなす。

第19層：オリーブ黒(7.5Y3/2)色粘土質シルト層である。下位の20層とは不整合面をなす。

第20層：オリーブ灰(2.5GY6/1)色粗粒砂質粘土層である。段丘構成層に相当すると思われる。

2) 出土遺物と長原遺跡標準層序との対比

長原遺跡では、すでに南部地域を中心とした標準層序が確立されており、本調査地の地層も、おおむねそれに対応するものである[大阪市文化財協会1995a]。遺物が検出されなかったため、明確な地

層対比が行いえない層準もあるが、各地層の内容と長原遺跡標準層序(以下NG層)との対応に関する試案を表1に記載する。

第1層から第3層の途中までは出土層準を確認できた遺物がない。ただし、第1層は現代客土に直接覆われる現代作土であり、第2層は層相からNG2層に比定され、近世作土と考えられる。第3層はA～D層に細分されるが、第3D層下面検出遺構である溝SD301・02からは終末期にあたるV期の瓦器のほか[鈴木秀典1982]、14・15世紀代の遺物が散見されることから、NG3層にあたる中世後半の作土と考えられる。

第4層からは出土遺物が少なく、遺物から地層の年代を決定することが困難である。第5A層からはⅠ～Ⅱ-3期ころの瓦器が出土し、平安時代後期に属する。第5B層も同時期の遺物を下限とするもので、平安Ⅳ期[佐藤隆1992]の遺物が主体である。こうした遺物の年代観からは第5層をNG4Biii層に比定しうる。第5B層の下面では掘立柱建物や柱穴が検出されており、第5A層は下面で検出された溝などの状況から作土であることはまちがいない、両者は同時期の隣接した居住地と耕地と考えることができる。

第6A層からの出土遺物には瓦器が含まれず、平安Ⅲ期までの土師器・須恵器のほか黒色土器(内黒・阿黒)を若干含む。下面で検出された北半の溝群や、南半の柱穴・土壇群から出土した遺物についても同様である。したがって、第6A層の形成時期はNG4C層に下限を対応させることができよう。また、奈良時代末葉から平安時代初頭ころの遺物も多く、NG6A層を分離できずに調査した可能性もある。調査区の北端で確認した第6B層の基底付近に形成された自然の凹みでは、飛鳥Ⅱ新～Ⅲ[奈良国立文化財研究所1976・1978]に属する土師器・須恵器が一括で出土した。また、調査区南部で第6A層の基底面で検出した柱穴の柱痕跡からは、飛鳥Ⅰの須恵器が完形で出土し、第6B層に属する遺構である。こうしたことから第6B層をNG6Bii～7Aii層に対応させることができる。

第7A層からは弥生時代畿内第Ⅲ様式[寺沢薫・森井貞雄1989]から古墳時代後期(TK10型式[田辺昭三1966・1981・1982])までの遺物が多量に出土し、堆積時期の下限を古墳時代後期中葉に求めることができる。遺物の時期からはMT15型式以前の遺物が確認されるNG7B層よりも上位の地層にあたり、NG7Aii層に相当することになるが、長原遺跡内の南部では、現在までに大規模な洪水層は確認されていない。

第8～10層ではごく少量の土器片が出土したもの、所屬時期が明確な資料はほとんどない。第8層および第10A層から土師器と思われる土器片が出土している。

第11層からは罫描直線文を施した壺の胴部と考えられる土器片が出土しており、弥生時代中期に属するものである。第13層からは畿内第Ⅰ様式の壺の破片1点が出土した。

第16層以下では縄文土器が出土した。いずれも細片で時期は不明だが、胎土は粗く多量の極粗粒砂を含むことから縄文土器と考えられる。第17層内でより多く見つかっている。

なお、第18層以下の地層から出土した遺物はない。

第8層以下を長原遺跡の標準層序に対応させると、第17層の下部ではNG9Ciii層で確認されている「未詳火山灰層」と共通する特徴を多くもつ火山ガラスが検出されているため、第17層をNG9Ciii層に

比定することは問題ないと考えられる。さらに、NG9C層からNG7層にいたるまでの間には、数枚の暗色帯が確認されており、本調査地の地層との対応を考える手がかりとなる。第13層から畿内第Ⅰ様式の土器片が出土していることを重視すれば、NG9A層に対応することになる。また、弥生時代中期の遺物はNG8B層に包含され、第11層から同時期の土器片が出土したことによって本層準をNG8B層に比定することも可能であろう。そうすると、やはり下位の暗色帯である第13層がNG9A層となる。しかし、どちらの遺物も地層の年代を決定するためには量が少なく、また、遺物自体も表面や割れ口が磨滅していることを考えると、ただちに本層準に所属する時期の遺物とも判断できず、下位の地層からの混入も考える必要がある。

そこで、現段階では第8～10層をNG7B層に対応させ、第11層をNG7Biii～8B層、第12層をNG8C層、第13層をNG9A層、第14～16層をNG9B層、第17層をNG9C層と推定し、将来の周辺域での調査の進展を待つこととする。

3) 石器遺物(図9・10・図版20)

本調査では石器遺物が33点出土した。すべて遊離資料で、古墳時代後期の地層である第7B層以降に堆積した地層から出土したものである(表2)。石材はサヌカイトであり、時期を特定できるような明確な道具類は出土していない。石器遺物の剥離面はあまり風化していないことから、弥生時代のものがほとんどであると考えられる。

遺物の内訳は細部調整のある剥片1点、剥片32点である。剥片については、その性格を論じること

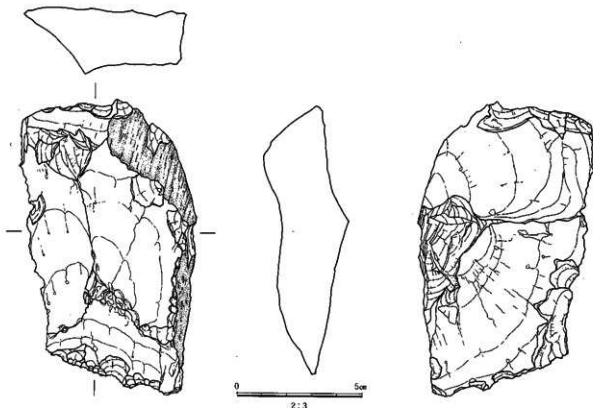


図9 石器遺物実測図①

は困難であるが、クサビに関連すると考えられるものがあり、それらを中心に、おもなものについて報告する。なお、用語については[大阪市文化財協会1996a]に準拠する。

18は大型の横形剥片で第6A層から出土した。背面には自然面が残っている。背面の図の左右に剥離面が並び、それよりも新しく上下両方から剥離された剥離面がある。いずれも大きな剥離面である。これらの剥離面と自然面がなす稜上には、随所に打痕が残り、一部はそこからはじまる小さな剥離面となっている。ほかの剥離面と風化状況は同一で、剥片形成時に係わる剥離面であろうが、いずれも打面との角度が悪く、剥片剥離を意図した加撃とはいいがたい。主要剥離面は自然面打面である。打面との角度は鋭角になり、打点からバルブにかけては階段状に潰れている。同じ打点から、打面となった自然面に向けて小さな剥離面が形成されているが、打撃角との関係で、主要剥離面と同時に形成されたものであろう。さらに、主要剥離面はバルブから垂直に延びる稜によって二分されている。

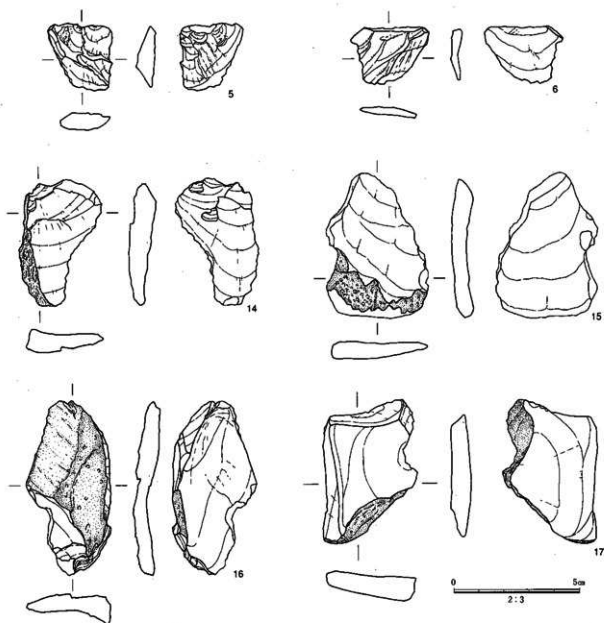


図10 石器遺物実測図②

表2 石器遺物観察表

遺物番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	登録番号	備 考
1	剥片	3.69	2.17	0.64	95AL505	打点割欠失
2	剥片	2.93	1.89	0.69	95AL120	
3	剥片	2.81	3.47	0.80	95AL375	背面は自然面
4	剥片	2.23	2.70	0.81	95AL300	クサビ剥片
5	剥片	2.54	2.55	0.76	95AL366	クサビ剥片
6	剥片	2.23	3.08	0.42	95AL374	有底剥片
7	剥片	2.88	3.24	0.72	95AL506	
8	剥片	3.45	2.49	0.40	95AL308	
9	剥片	3.28	3.13	0.76	95AL507	クサビ剥片
10	剥片	5.12	2.12	0.83	95AL475	
11	剥片	3.28	5.03	1.01	95AL388	背面下端に自然面
12	剥片	3.21	3.30	1.16	95AL306	有底剥片で底面は自然面
13	剥片	3.80	2.58	0.46	95AL473	クサビ剥片
14	剥片	4.80	3.26	0.93	95AL307	クサビ剥片?
15	剥片	5.66	4.14	0.96	95AL383	有底剥片で底面は自然面
16	剥片	6.89	3.35	1.38	95AL352	背面に自然面
17	剥片	5.59	3.76	0.96	95AL502	有底剥片
18	細部調整剥片	11.84	6.66	3.21	95AL118	使用痕

るが、バルブの状況から同時形成された剥離面であることが確認できる。主要剥離面の縁辺には背・主要剥離面を打面とした剥離面が見られる。主要剥離面の図の下縁では、主として主要剥離面から背面へ連続して直線状となる細部調整が施されている。そののちに背面からも小さな剥離が行われている。主要剥離面の先端部では、図の下側に背面から2面の剥離が行われている。主要剥離面の図の上縁では、背面から連続して直線状となる細部調整が行われたあと、逆方向に再び細部調整が行われている。以上のように、この剥片は縁辺に細部調整を施したものであり、刃部を形成して道具として使用されたものである。なお、特に図の下縁の刃部では剥離面が若干磨滅した状況を認めることができ、使用痕と考えられる。

16は第7A層から出土した。背面と主要剥離面の左側縁下に自然面が残る、礫の縁辺部にあたる剥片である。背面の左側縁には主要剥離面に先行する剥離面があるが、上部のものは石材の流離構造に沿った平坦な剥離面で、礫の分割に係わるものかもしれない。主要剥離面の右側縁は折れて欠失している。主要剥離面は剥離面打面との角度が垂直に近く、バルブは凹んでいる。

15は第7A層から出土した。背面下には自然面が残る、その上には上方からの先行する剥離面が見られる。主要剥離面は背面の剥離面と同方向の剥離面であるが、打面および周縁が欠失している。

17は第7A層から出土した。打面は自然面で、礫の表面にある自然の大きな凹凸を利用し、その山形に突出した部分を打点としている。剥片の背面先端部に平坦な剥離面が残る有底剥片である。石核

は板状の剥片であったと考えられる。背面中央にも先行して有底剥片が剥離された剥離面が残る。これらの有底剥片剥離は連続剥離ではなく、背面左側縁にある左方向からの剥離面は、背面中央の剥離面と主要剥離面形成の間に剥離されたものである。主要剥離面の先端はヒンジ・フラクチャーを起している。

14は第7A層から出土した。背面左側縁に自然面が残っている。背面の剥離面は主要剥離面とほぼ同一の打点から同一方向に剥離されたもので、打点付近は潰れ、中央付近で一部が階段状となっている。主要剥離面は打点部が潰れ、バルブには稜状となる強く屈曲したリングが発達しているが、その左側は先行する加撃によって生じた稜内の潜在割れから破砕している。また、背面左側縁の自然面の上部には、主要剥離面とほぼ同一打点で、同一方向の細長い剥離面がある。これらの剥離面は、同時または連続した剥離作業によって生じたものと考えられ、下方からの対向する方向の剥離面が認められないもののクサビから剥落した剥片と共通する特徴をもっている。

5は第7A層から出土した。打面は潰れて欠失している。背面には主要剥離面と同一方向の剥離面がある。リング、フィッシャーが発達しているが、それらの収束点が2箇所あり、剥離された剥片はツイン・バルブであったと思われる。この剥離面に切られて、背面下に、やはりフィッシャーの発達した剥離面が取込まれているが、さほど大きな剥離面であったとは考えがたい。なお、背面左側縁には自然面が取込まれている。主要剥離面はバルブが平坦で、バルブスカーが見られる。また、背面と同様にリング、フィッシャーが発達している。こうした状況からクサビから剥落した剥片であると考えられる。

6は第7A層から出土した。打面は折れて欠失している。背面先端部には底面となる平坦な剥離面が取込まれている。その上にはリングの発達した剥離面が見られる。主要剥離面右上には打面につながっていたとも考えられる平坦な剥離面が細長く残っている。剥片は薄く、目的的なものではなく調整剥片か、あるいはクサビから剥落した剥片の可能性も考えられる。

これらのほかに、実測図は掲載していないが、クサビに関連すると考えられる剥片に、4・9・13がある(図版20)。

4は線状打面で背面左側縁に自然面が残っている。また、右下には先行する平坦な剥離面の一部が取込まれ、それを切る上下から加撃された剥離面がある。主要剥離面は背面上の剥離面と同一打面・同一方向の剥離面である。

9は自然面打面である。背面には同一打面・同一方向の剥離面がある。主要剥離面とともに、打面との角度が垂直に近い。主要剥離面の左側は折れて欠失している。

13は自然面打面の石刃状剥片で、自然面は主要剥離面の右側縁にも続いている。背面には先端部左側に下方からの剥離面が取込まれており、右上方からの剥離面によって切られている。また、先端部右側には主要剥離面下方からの力による折れ面が認められる。また、主要剥離面の打撃角は垂直に近い。

(清水)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1) 第17層の遺構と遺物(図11・12、図版2・3)

第17A層の上面検出遺構には小穴が3基(SP1701~1703)、下面検出遺構には土壇SK1701がある(図11)。小穴は直径9~13cm、深さ4~14cmで、SP1701・1703のように底が尖っており、第18層のラミナ構造を変形させていることから、堀形を設けずに直接杭を打込んだ痕と考えられる(図12)。検出面からの深さが浅いため、第16層以上の地層内から打込まれていた可能性があるが、埋土は第17層の上位層のいずれとも一致しない。遺物は出土しなかった。この3基はほぼ210cmと240cmの間隔で直角に並ぶことから、簡易な構造の建築物の一部とも考えられるが、これら以外に小穴はなく、周辺からも同時期の遺構は検出されなかった。

SK1701は調査区の西端に位置し、西側は調査区外に続いているため、全体の規模・形状は不明である。確認した長さ152cm、幅110cm、深さ39cmである。第17A~B層の下面あるいは第17C層上面から掘込まれているが、断面の観察からは判定し難かった。埋土はほとんどが水漬きの堆積物で占められ、間に最大径27cmほどのシルトを主とする偽礫を含む。また、遺構の北側の壁はオーバーハング気味で、埋土は第18層へ漸移に変化している。これらの点は風倒木痕の特徴と一致するが、埋土内に多量の焼土粒・炭化物を含んでおり、焼けた粘土塊も1点観られたことから人為的な遺構と考えられる(図12)。遺物は出土しなかった。これらの遺構は、第17C層の下部にNG9Ciii層下部に対比される火山灰層準が認められたことから、縄文時代後期にさかのぼるものであろう。

第17層内からは調査区の南端付近で数点の土器片が出土した。文様を持たないため、時期の特定は困難であるが、地層の年代からやはり縄文時代後期ころのものであろう。胎土は暗褐色で河内産の土器と考えられる。細片のため図化しえたものはない。

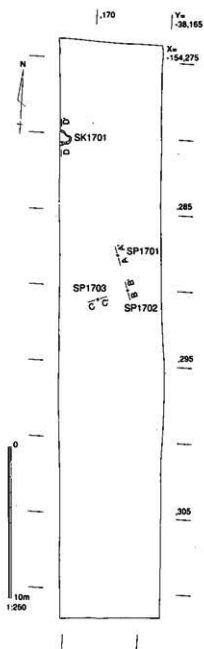


図11 第17層上面・下面検出遺構平面図

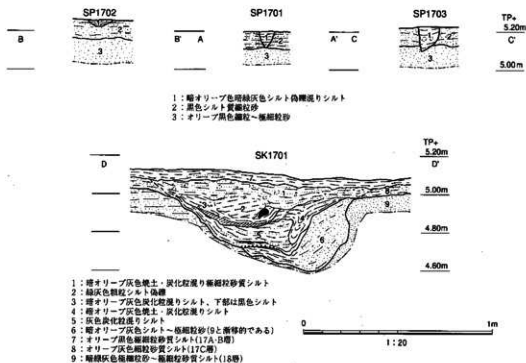


図12 第17層遺構断面図

2) 第16層の遺物

第16層に係わる遺構はない。第17層と同様に、調査区の南端付近から数点の土器片が出土したが、文様を持たず、時期の特定が困難である。胎土の特徴は第17層から出土した土器片と類似している。やはり、細片のため図化しえたものはない。

3) 小結

以上のように、本調査ではわずかとはいえ、縄文時代後期の遺構・遺物を見いだすことができた。従来、長原遺跡南部をはじめ、台地側での調査では同時期の遺物が見つかったが、以北の遺跡では原位置を残す資料に乏しい。本調査の結果は、河内湖の周辺で行われた活動を探る手がかりとなろう。

(清水)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1) 第13層の遺構と遺物(図13～15、図版4・5)

第13層の上面で直径41cm、深さ36cmの小穴SP1301が検出された(図13)。本層準に係わる遺構はこれのみである。柱痕跡はなく、埋土は第13・16層に由来する偽礫を含む埋戻し土である(図14)。遺物は出土しなかった。

第13層内からは畿内第Ⅰ様式の壺の破片19(図15、写真1)が出土しているが、表面や割れ口が磨滅しているため、本来この層準に帰属していたものとは断じがたく、下位の層準からの混入の可能性も考えておくべきであろう。したがって、現段階では弥生時代前期の遺構と想定しておくが、将来の調査で中期に下る可能性を残している。19は短い頸部に一条の低い貼付け突帯を持つ。胎土は暗褐色で河内産の土器と思われる。

2) 第11層の遺構と遺物(図13～15)

第11層に係わる遺構は上面と下面で検出されている(図13)。上面検出遺構には溝SD1101がある。ただし、調査時では、第Ⅰ章で記述したように第8層上面から第11層までを重機によって掘削したため、検出した面は第11層下面である。この溝は、西から南にやや張出しながら東に向って浅くなり、幅も狭くなっている。調査区内で検出した長さは6.5mで、幅と深さは調査区西端で約123cm、26cmである。下部には掘削時の堆積物が薄く溜まり、上部は水漬きの堆積物で構成されている(図14)。下面で検出された遺構は溝SD1102・土坑SK1101である。SD1102は北西-南東方向(N-33°-W)の溝で、北側は調査区北壁まで続き、さらに、調査区外に延びている。南端は南西方向に屈曲し、1.3mほど続いている。検出した長さ15.6m、幅62cm、深さ12cmである。埋土はすべて水漬きの堆積物である。SK1101は長さ約135cm、幅110cm、深さ22cmで、南北を長軸とする土坑である。埋土は偽礫を含む埋戻し土である。これらの遺構から出土した遺物はない。

第11層基底面からは胴部に櫛描直線文を施した壺の破片20

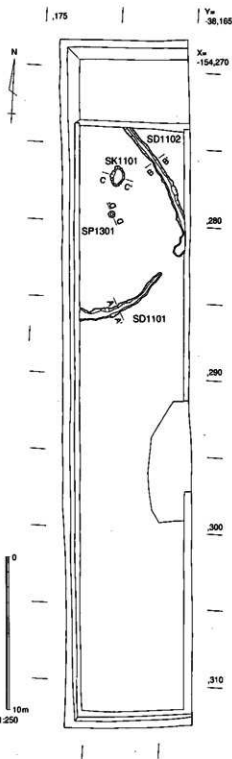


図13 第13層上面・第11層上面および下面検出遺構平面図

(図15、写真1)が出土している。このような土器の時期は弥生時代中期(畿内第Ⅱ～Ⅳ様式)に求められ、したがって、上記の遺構の時期も弥生時代中期以降に求められよう。

3)小結

縄文時代に比べ、弥生時代になると遺構の数も増え、当該地での開発が活発化してきた様相がうかがえる。第四章で考察したように、弥生時代中期ころには長原遺跡の北側に接する亀井遺跡東部・跡部遺跡・太子堂遺跡などの範囲で河川堆積物を母材とした微高地が成立し、本調査地周辺は一段低い地形となっていたと考えられる。調査地の南東1km付近の調査で見つかった中期の住居址・方形周溝墓をはじめ、亀井遺跡など、付近で展開していた集落も多いため、それらの集落群によってこの低地帯が利用されていたことが予想される。

(清水)

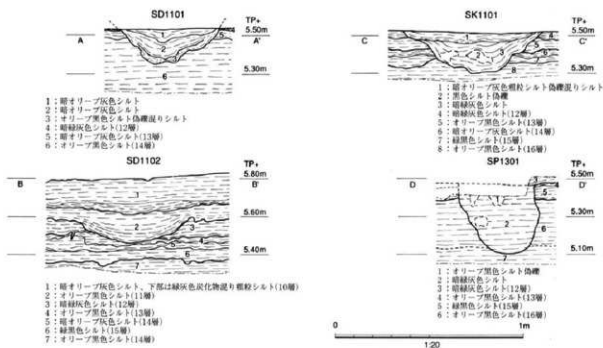


図14 第13層・第11層遺構断面図

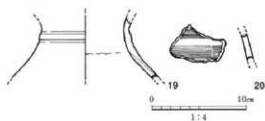


図15 第13層・第11層出土遺物実測図

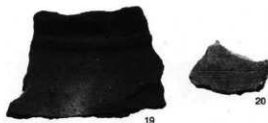


写真1 第13層・第11層出土遺物

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1) 第8～10層の遺構と遺物

第8～10層は弥生時代後期から古墳時代中期以前に堆積した地層と考えられるが、遺物に乏しく、明確な遺構も確認されなかった。ただし、第8層の上面で多数の足跡と考えられる凹みを検出した(図版12)。これらの多くは直径10cm、深さ5cm程度の大きさで、人間の足跡と判断されたものはない。第2項で記述する第7A層内に構築された櫓(しがらみ)の下流側付近に多く分布し、第7A層に由来すると考えられる細粒砂で埋没していることから、本来は櫓の築造に伴って第7A層基底付近から踏込まれたものと推定される。底面の状況からは、いかなる動物によってつけられたものか明らかにすることができなかったが、設置作業の際に使われた馬または牛などの家畜によってつけられたものとも考えられる。

また、第8層と第10層はラミナ構造をもつ自然堆積層であるが、第9層は上下2層準に分層され、両者ともにラミナ構造をもたない。断面の観察では踏込み痕、畦畔などを確認することはできなかったが、作土などの人為的に形成された地層である可能性は高く、周辺域に遺構が存在することが考えられる。

第8～10層で出土した遺物には土師器と思われる土器片などがあるが、細片のため図化しえなかった。

2) 第7層の遺構と遺物(図16～25、図版 6～11・21～28)

第7層は2層に細分されたが、どちらも水成層である。上部の第7A層は構成物が粗粒で、特に水流の激しい環境であったことがわかる。第7A層からは弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式)から古墳時代後期(TK10型式)までの遺物が出土している。

第7A層内の基底付近で、櫓(しがらみ)が検出された(図16)。櫓の両端は調査区外に続き、長さ約13m、幅約4mの範囲を調査することができた。西北西-東南東方向に長さ3m前後の横木を直列させながら数条に並べ、それに対して長さ1mほどの縦木を直交する方向に配したものである

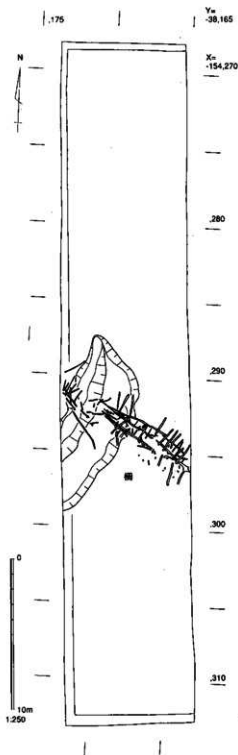


図16 第7層内検出遺構平面図

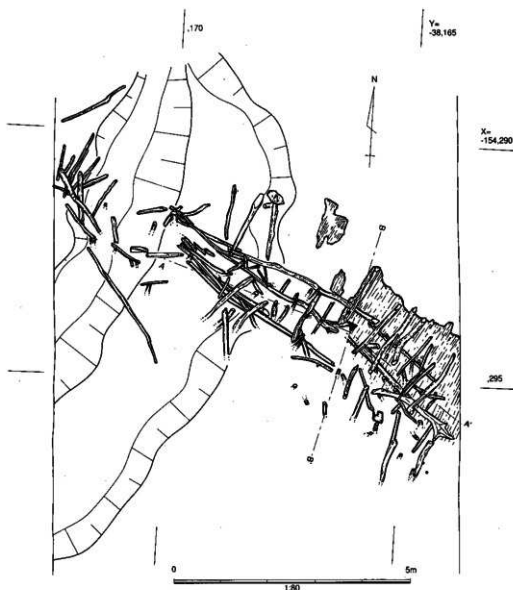


図17 第7A層内構平面図

(図17)。それぞれの要所には固定用の杭が打込まれていた。使用された材はすべて樹皮を残す自然木であるが、横木や縦木に使われた材の根元側には伐採時のものと思われる2面程度からなる切り口が見られ、また、杭として地中に打込まれたものは、その先端を尖らすように加工していた。図23-104は縦木に使用されていたもので、直径8cmの材の一端に2面の加工を施している。105は縦木を固定した杭として、直径9cm程度の材を使用したもので、先端は一部に樹皮を残したまま6面の加工を施している。その上部は1/3程度の範囲に3面の加工を施している。

槽の上部構造は第7A層の堆積過程で流失していた。さらに、調査区の西側では同層による削込みが激しく、基底部まで破壊されていた。一方、東側では本来の形状が比較的よく残っており、数段階にわたって構築された工程を明らかにすることができた(図18)。

①第8層の上面に厚さ10cmほど第7B・7A層が堆積していた段階で、それらを母材として厚さ約10cmの盛土をし、その上を植物の繊維を平行に敷き並べたもので覆う。この敷物に、編んだような痕

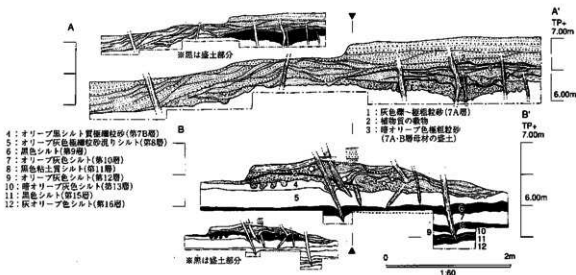


図18 横断面図

は見られない。盛土によって埋められた材が確認できるが、櫓の設置方向と無関係に置かれている。さらに、敷物の上から杭を打込む。この段階で置かれた横木・縦木はない。

②再び10cm程度の盛土をし、植物の敷物で覆う。さらに、敷物の上から杭を打込む。この段階では、まだ横木・縦木は置かれていない。

③細粒～中粒砂の自然堆積層が10～30cmほど溜まる。この段階で、初めて材の架設がはじまり、長軸方向に横木を置いて上記と同様の植物の繊維による敷物で覆う。細い杭を横木に接するように打込んで固定し、さらに横木を置き、その両側に直交する縦木を架設する。南側の縦木は、根元が第8層以下に達するまで急角度で打込まれ、さらにその端に杭を打込んで固定する頑丈な方法が認められるが、北側の縦木は横木に載せただけで地中に打込まず、杭を打つような固定方法もとられていなかった。これは、櫓の南側が上流にあたり、より大きな力の加わる側を頑丈にしたためであろう。北側の縦木で、①段階の基底からの比高は50～70cm程度である。南側の縦木は上部が流失しているが、本来はそれ以上に高かったものと推定される。

なお、①・②段階では第7B・7A層下面と盛土内に多数の踏込みが認められた。また、③段階にいたるまでの間には自然堆積層が狭く、③段階は①・②段階ののち、若干の時間が経過してからの作業と思われる。しかし、①・②段階は盛土による堤の構築、③段階は横木・縦木の架設であり、性格を異にすることから一連の作業ととらえる方が妥当であろう。

このような櫓の性格については、農業用と漁撈用の二者が考えられるが、下流側に梁漁を裏づける遺構が認められず、また、農業用と想定するにも、周囲の土地の利用状況は未確認であり、決め手に欠ける。仮に農業用とすると、水流は南東から北西に向いており、櫓はそれよりも西よりに水位を上昇させることを目的としているように考えられる。また、材に使用された樹種の同定結果からはコナラ・クヌギ節や、ニフトコ属？、サクラ属？などの樹木が利用されたことがわかり、集落の周辺に広がる落葉広葉樹林から採取してきたことがうかがえる。

櫓の構築年代は、盛土中に6世紀代に降ると思われる須恵器の細片を含み、また多量に含まれる極

粗粒砂や礫が第7A層に由来することから、同層と同じくTK10型式の須恵器の時期を下限とするものと考えられる。第7A層から出土した土器には完形に近い破片も含まれ、流水によって運ばれてきたことから、上流側にこれらの遺物を供給した包含層や遺構が存在することが知られる。以下に、その個別の遺物を紹介する(図19～25)。

(清水)

弥生土器

21～24は広口壺の口縁部である。21は端部を下方に垂下させてできる端面に櫛描縐状文を施し、22は刺突を約2cm間隔で施している。24は凹線を施したのち中央に竹管文を加えた円形浮文を貼付けている。23は端部を上下に拡張し、その面に2条の凹線を施す。口縁部内面には櫛描列点文を巡らす。26は広口壺の肩部から頸部で、櫛描直線文が3帯描かれている。

25は大型甕の口縁部で口縁端部は下方に垂下させて小さな刺突を施している。27は大型鉢の上半部と思われるが、小片のため口径は復元困難である。直線的に延びる体部で口縁部は外側に短く折り返す。内外面は磨減しており、調整痕や文様の有無は確認できない。

以上の21～27のうち26が畿内第Ⅲ様式のほかは第Ⅳ様式で、23以外は生駒西麓産の胎土である。

32は柱状部と裾部の境界が不明瞭で、下端付近に円孔が3個開けられている高杯脚部である。裾端部は丸く終わるが、磨減しているため欠損している可能性もある。杯部との接合は円板充填法と思われる。畿内第Ⅴ様式に属するものである。

28～31は畿内第Ⅴ様式の甕である。28は頸部から口縁部の破片で、体部外面には右上がりの平行タタキが施され、内面はナデ仕上げである。29～31は同様式の甕底部である。いわゆる「底部輪台技法」[都出比呂志1982]により成形された平底の底部で、外面は右上がりの平行タタキ、内面は29がハケ調整のほかはナデ調整と思われる。29・31の内底面には放射状に工具痕が残る。

土師器

33・36は二重口縁壺の口縁部である。33は口縁の屈曲部外面をタガ状に突出させ、その上の口縁部を強く外反させる。36は屈曲部に鋭い稜線を作り、口縁は直線的に延びる。端部は丸くおさめる。

34・37～40は壺の口縁部である。34は直線的に延び、端部は内面に肥厚させる。内外面ともヨコナデ調整で、外面には指の当たった痕が残る。胎土は精良である。37は直線的に開く口縁部で上端部に1条の凹線を巡らす。外面は3条/cmの粗いハケメが横方向に施されたのち、横または縦にヘラミガキされた痕跡がある。内面は5条/cmのハケ調整である。38は外反ぎみの口縁部で、端部は丸くおさめる。口縁部の外面は斜めあるいは横方向のハケメが部分的に残るが、おおむねナデや指が当たって消えている。内面は下半部に横方向のハケメが残り、上半部はヨコナデしており、ごく一部に残る体部はヘラケズリされている。微細な雲母や角閃石を多く含み、灰褐色を呈する生駒西麓産の胎土である。39は直線的な口縁部で端部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ調整で、体部の外面はナデ調整、内面はヘラケズリである。40は外反ぎみの短い口縁部の壺である。口縁端部は丸くおさめ、肩部はあまり張らない。頸部外面を強くヨコナデする。口縁部内外面はヨコナデ仕上げ、体部外面は平滑にナデ仕上げしているが、内面は強くヘラケズリされている。

35は小型丸底土器の上半部である。口縁部は短く直線的に延び、端部は薄くなってやや内傾ぎみにつまみ出す。外面調整は明瞭でないが、口縁部内面にはヨコナデ調整後にヘラミガキした形跡がある。体部内面はナデ調整で平滑に仕上げる。全体に薄く作られ、砂粒をほとんど含まない緻密な胎土で堅く焼き締まっている。41は完形の小型壺である。球形の体部に短い口縁部がつき、全体に器壁は厚い。外面には調整痕は残っていないが、ていねいに仕上げている。内面はヘラケズリである。胎土には雲母・石英の細粒を多く含む。43は扁球形の壺体部である。頸部がわずかに遺存しており、口縁部が直立して延びるものであることがわかる。体部外面の下半はヘラケズリした痕跡がある。内面は下半に工具による掻き取った痕があり、上半にはユビオサエが認められる。胎土はシャモットを含む精良なものである。42は直口壺の球形の体部である。外面はハケ調整でていねいに仕上げるが、底部はかすかに平底ぎみになっており、ハケメがほとんど消えている。内面は平滑にナデ仕上げされ、調整痕は残っていない。

これらの壺は庄内式ないし布留式に属するものと思われるが、41・42など5世紀以後に下る可能性をもつものもある。

44は直線的に大きく開く高杯杯部で、内面は斜放射状にヘラミガキが密に施される。口縁端部は上方に尖らせるようにヨコナデしている。典型的な庄内式の高杯である。45は平らな底部から直線的に開き、口縁端部を短く外方に屈曲させる高杯杯部である。口縁部内外面はヨコナデ調整、外面の下半部はユビオサエが顕著に残る。底部と体部との接合部と底部外面は最終の仕上げが省略され、余分な粘土が未処理のままである。脚柱状部と杯部の接合は挿入によるものと思われ、柱状部は強く絞られている。雲母の細片を多く含む精良な胎土である(註2)。5世紀末から6世紀代のものである。46は杯または碗形の高杯杯部である。口縁端部を外方につまみ出す。外面はナデ調整で指の圧痕が残る。内面は工具による横方向のナデである(註3)。6世紀前～中葉のものと思われる。

47～54は高杯・台付鉢などの脚部である。48・49は中膨らみぎみの柱状部から裾部へ広がる屈曲が顕著で、47・50・52は緩やかに裾部が開く。47・50は柱状部内面をヘラケズリし、3個の円形のスカシ孔を柱状部に穿つ。47は緩やかに大きく開く裾部で、脚端部は面を作り、布留式のものと思われる。裾部内面の調整には47～49・52がハケメを用いている。49は2個の小孔が1.3cmの間隔を開けて穿たれている。51は庄内式期前後の短い脚部で、脚端部は内湾ぎみである。53は庄内式の台付鉢の脚部で、円形のスカシ孔が3個穿たれ、脚端部は内湾ぎみである。生駒西麓産の胎土である。54は庄内式ないし布留式の小型器台の直線的に開く脚部で、4個の円形スカシ孔が穿たれている。

55は東海系のS字状口縁台付甕(以下、S字甕)B類である。口縁部は短く外反したのち外上方に拡張して延ばしたいわゆるS字状口縁であり、端部を外方にナデで短く屈曲させる。体部外面は斜め方向のハケメを施したのちに頸部からやや下方に横方向のハケメを施す。胎土は雲母を多数含み、灰白色を呈する。口縁部の形態や体部外面の横ハケメの位置から見て遼間5・6期[赤塚次郎1990]に相当する。56は底径6cmに復元できる筒状の脚台と思われる。外面は平滑に仕上げ、調整痕は残っていない。内面は粗雑にナデしている。脚端部は内面に折り返し、下端部が平坦になっており、S字甕の脚端部の処理に類似している。ただ、胎土は雲母や角閃石を多く含んで淡灰褐色を呈する生駒西麓産の

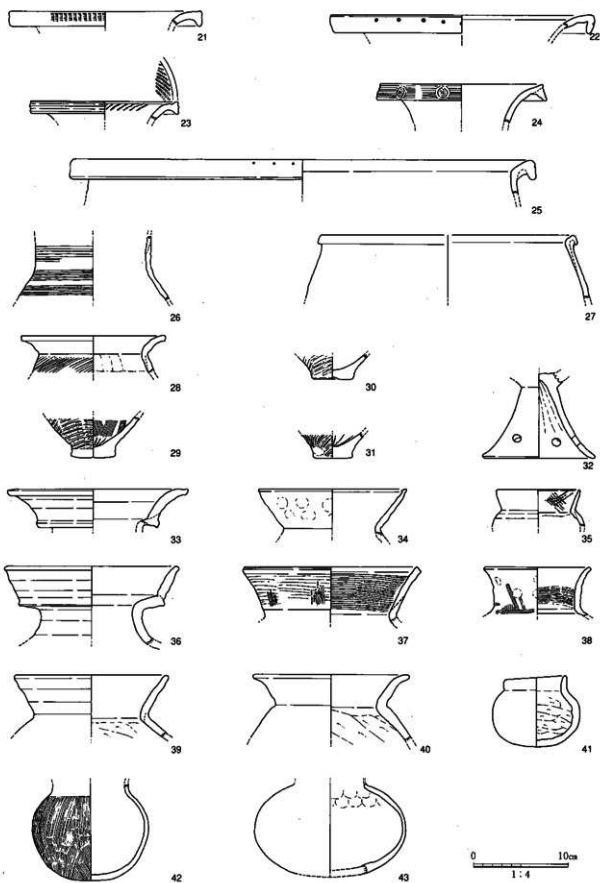


图19 第7层出土器物实测图①
 弥生土器：21~32、土师器：33~43

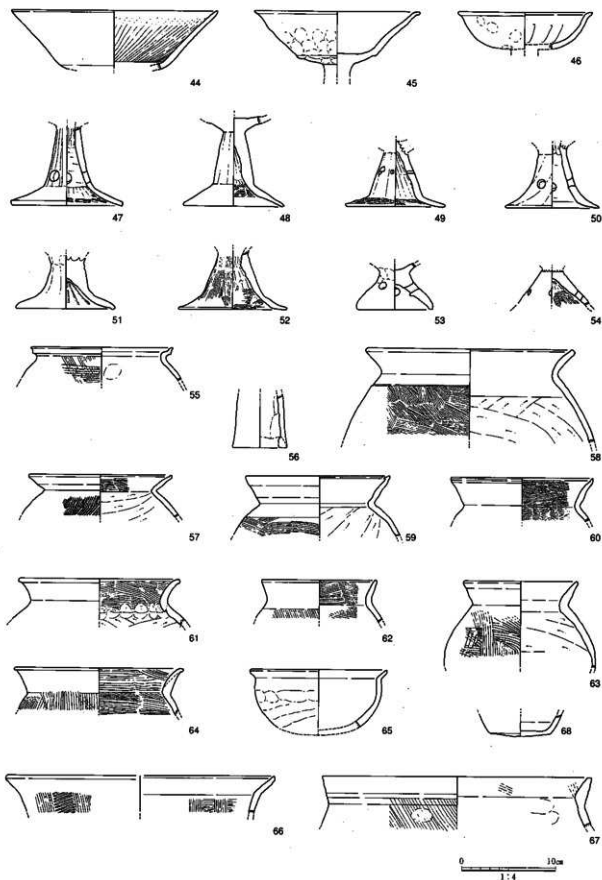


图20 第7层出土文物实图②
土師器：44~67、韓式系土器：68

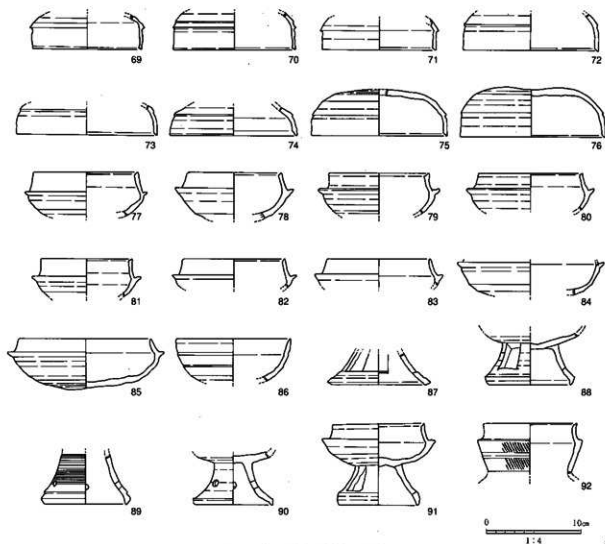


図21 第7層出土遺物実測図③
須恵器：69～92

胎土に類似し、復元される傾きがS字甕のそれに比べて直立きみであることなどの相違点もある。57は庄内式甕である。生駒西麓産の胎土で、雲母や角閃石が含まれる。口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部は上方にわずかにつまみ上げる。頸部内面はヘラケズリによって鋭い稜線をつくる。体部外面は細筋の平行タタキを右上がりに施し、内面は左から右へのヘラケズリである。口縁部の外面はヨコナデ、内面はハケメを横方向に施している。

59は布留式甕の上半部である。口縁部は比較的短く直線的に延び、端部は内面を肥厚させる。体部外面の肩部には横方向のハケメが施され、内面はヘラケズリである。布留式のやや古い時期のものと思われる。58・61・63は体部内面をヘラケズリする甕上半部である。58は口縁端部に面を作る大型甕である。外面に細かいハケメを施す。61は端部を丸くおさめる口縁部内面をハケメで調整しており、体部との接合痕を内面に明瞭に残す。63は短い口縁部の甕である。口縁部は内外面ヨコナデ調整で端部は丸くおさめる。体部は肩が張らず、外面は4条/cmの粗いハケメが縦横あるいは斜めに粗雑に施されている。胎土は1～2mmの砂粒を多量に含む。

60・62・64は口縁部および体部内面をハケメで調整する中・小型甕である。60はあまり開かない

口縁部の端部を上方につまみ上げる。遺存する体部の外面下端にハケメがわずかに見え、これ以下の体部外面はハケ調整であることがわかる。内面下端には左上に向う調整痕がわずかに確認でき、これ以下に上方に向けてのナデないしはヘラケズリが施されていたと思われる。胎土は砂粒の少ない精良なものである。62はあまり聞かない口縁部で、体部外面は縦方向のハケメ、内面はハケメののち下部はナデ調整している。64は口縁端部を外方につまみ出す。口縁部外面は二次的に焼けて赤く変色している。

65は小型の鉢である。体部から短い口縁部を「く」の字形に屈曲させる。体部外面はハケメ調整後にナデ調整しており、下半部には横方向に強いナデを施している。内面はヨコナデされ、平滑に仕上げられる(註4)。

66は庄内式期の大型鉢である。口縁部はわずかに外傾して端部は面を作る。体部外面は右上がりの平行タタキを施したのち縦方向のハケメで仕上げている。内面も縦横のハケメが施されている。胎土は雲母・角閃石を含む生駒西麓産である。細片であるため口径は推定である。

68は軟質の韓式系土器で、小型平底鉢の底部である。外面は磨減しており調整は不明である。内底面の一部にヘラケズリが施されている。67は土師器鍋の口縁部と思われる。口縁部は短く、あまり外反させない。端部は上端に面を作る。口縁部外面は粗雑なヨコナデ調整で煤が付着する。体部外面は粗いハケ調整、内面はナデ調整である。

須恵器

69～76は須恵器杯蓋である。69は天井部外面のヘラケズリが鋭い稜線付近まで及ぶもので、TK208型式までさかのぼるものと思われる。70・71は口縁端部の形状やヘラケズリの範囲が狭いことなどからTK23型式またはTK47型式、それ以外は口径が大きく稜線が鈍くなるMT15型式ないしはTK10型式に属するものであろう。77～85は須恵器杯身である。85は口径が13.7cmととっても大きく、短い立上りの端部は丸くおさめるなど、TK10型式に相当するものと考えられる。内底面には同心円文の当て具痕が残り、胎土には2～5mmの砂粒が多く含まれる。83は口縁端部が丸くおさめられ、焼成があまく瓦質に焼き上がっている。また、84は立上り部を欠くが、口径が大きいことからMT15型式かTK10型式であろう。それ以外はTK23型式またはTK47型式であろう。天井部外面または外底面のヘラケズリの方向は69が時計回り、75・76・78・84・85は逆時計回りである。

86は無蓋高杯の杯部である。口縁端部から1.4cm下の外面に凹線を巡らし、その下位にも段を作る。88・91は須恵器有蓋高杯で、脚部には長方形のスカシ孔が3方に開けられている。脚端部は下方につまみ出すようにヨコナデされている。91の口縁端部はわずかに凹んだ内傾する面をなす。受部には蓋の口縁部が灰白色の自然釉によって付着している。杯部外面のヘラケズリは逆時計回りである。87・89・90は須恵器高杯脚部である。87は長方形のスカシ孔が3方にある須恵器高杯脚部である。脚端部はやや厚くなり丸みを帯びつつも面を作る。89は外面にカキメを施したのち3方に円形の小さなスカシ孔を開ける。90は3方に円形のスカシ孔を開け、脚端部は小さく面を作る。88・89・91はTK23型式、87・90はそれに先行すると思われる。

92は有蓋壺の口縁部と思われる。口縁部外面には2段にわたって列点文が施され、その間に鈍く不

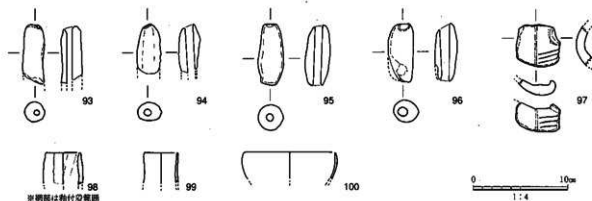


図22 第7層出土遺物実測図④
土錘：93～96、土製品：97、製塩土器：98～100

明瞭な稜線がある。杯身と同様の受部と立上がりが付き、口縁端部は内傾する面をなす。

土製品

97は段をなして厚みを増し、段に対して斜め方向に線刻を平行して施す土製品の破片である。現存する形状から奈良県橿向日遺跡で出土している異形の土器(註5)や人物などの形象埴輪の可能性があるが、いずれとも決しがたい。胎土は雲母・石英を多く含む。

製塩土器

製塩土器には薄手の丸底Ⅰ式[広瀬和雄1978]がある。このうち、98は厚さが5mmほどあってやや厚手である。外面には部分的に緑がかかった灰白色の自然釉がかかり、硬質に焼き上がる。99は薄手で外面に指掌文が残る。両者はいずれも内面は縦方向にナデている。ほかに内面を横方向にナデている薄手の破片もある。100は薄手で浅い碗形であることや胎土中に結晶片岩の細粒が含まれることから、紀伊地方のものと思われる。

土錘

いずれも管状土錘である。直径6～10mmの棒に粘土を巻付け、棒を抜くことで紐孔をなしている。雲母・石英・長石を多く含み、やや暗い褐色系の色調を呈するほぼ同質のものである。

93・94は一端が欠損しており、現存する長さは93が6.2cmで重量は35.27g、94は5.2cmで、23.47gである。95・96は完形であるが、96は一部表面が剥離している。95は6.4cmで43.23g、96は6.0cmで33.26gである。

ほか、流水によって槽(しがらみ)の上流側や槽の盛土中から刀形木製品・加工材・草鞋状の編物などのほか、先端が焼けている細い材が出土した。なお、動物遺体としてウマ歯・骨が出土しているが、詳細については第7節1)にまとめて記述する。(京嶋)

木器・木製品

刀形木製品は2点あり、どちらも刀の基部(茎)側が折れて欠失している。101は長さ45.8cm以上、幅3.6cm、厚さ1.3cmである。断面形が楕円形になるようにていねいに加工されている。一方、102は長さ55.9cm以上、幅5.7cm、厚さ1.6cmで、より大型である。断面形は長方形に近い。

加工材は2点あり、103は長さ29.0cm以上、幅5.4cm以上、厚さ2.0cmで全体の形状は不明であるが、

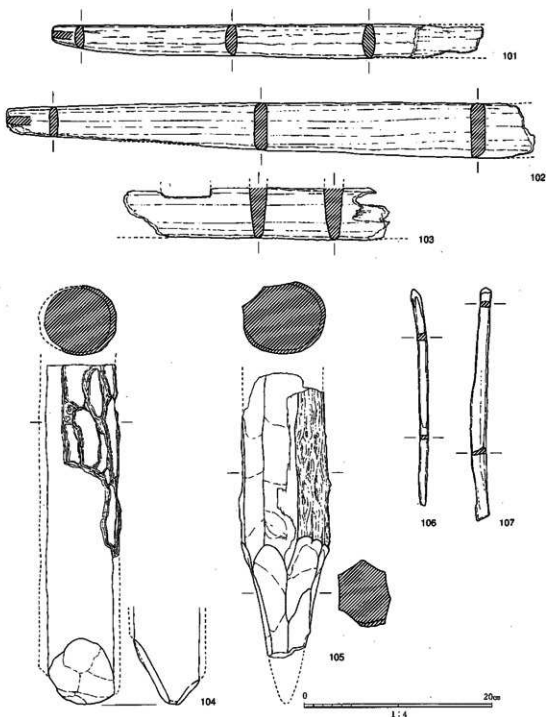


図23 第7層出土遺物実測図⑤
 刀形木製品：101・102、加工材：103、構材：104・105、焼け木：106・107

ほぞ穴とも考えられる削込みが認められる。断面の厚みは長辺の一方に向かって減じ、建築材に利用されるような板と考えるよりは、なんらかの木製品の一部と考えた方が妥当であるかもしれない。また、108は全体が焼けているうえに磨滅しているため詳細な加工状況が不明である。長さ24.4cm、幅23.2cm、厚さ5.1cmで、全体の形は四角形に近いが、4辺とも本来の形状を残してはいないと思われる。ただし、1辺に長さ5cm程度の削込みが施されていることと、向い合う1辺に向かって厚さが減じていることなどが加工の状況を示している。仮に板材とすると、厚さからみても相当大きなものと考え

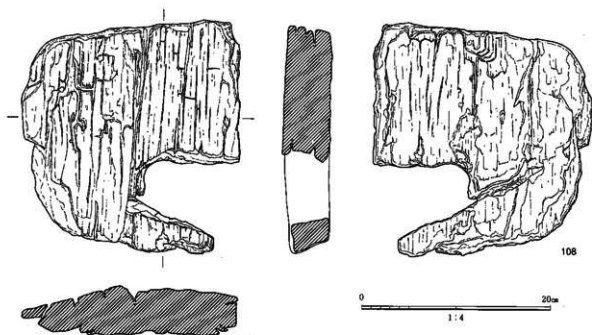


図24 第7層出土遺物実測図⑤

えられる。これのみ、櫓の盛土中から出土した。

106・107は先端が焼けている。木製品の加工時に生じる木くずのようなものであろうか。

109は植物質の繊維でできた編物で、草鞋と考えることがもっとも妥当であろう。一方の側縁が破損し、欠失している。現存長22.1cm、現存幅8.0cmである。5条が残存する縦方向の芯に対し横方向の繊維が交互に上下するように編まれている。側縁では横方向の繊維が芯で折り返し、欠失した方の側縁でも同様と考えられるため、全体では「∞」字状を繰返しながら編んだことが想定される。さらに、側縁の2個所には径1.5mm程度の繊維を2～3条に燃った紐が付着し、草鞋の乳と考えられる。図の下側のものは、一部が結節され、編物の本体にくくり付けられているようである。さらに上側の乳は環状に折り曲げられ、その中を幅6mmの带状の紐が貫いている状況が認められる。この带状の紐は両端が欠失しているが、本体の上端にくくり付けられた長さ1.5cmほどが残存した紐につながっていた可能性が高い。この紐は革ないし植物質の帯を芯に、幅1mmの繊維を巻き付けたもので、乳に用いられた燃紐とは明らかに異なる。こうした状況から全体像を想定すると、側縁の2個所に乳があることが

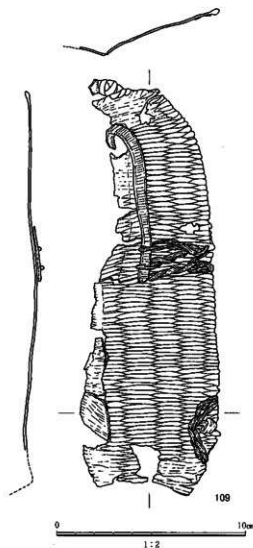


図25 第7層出土遺物実測図⑦

ら、欠失部を復元すれば4乳以上となろう。乳の環を貫く帯状の紐は、つま先からくるぶしを固定するための緒と考えられる。仮に、復元長が24cm前後とすると、乳の位置は図の下側にやや偏っており、下側をかかと側に、上側をつま先側に想定することができる。古代以前の草鞋には東京都町田市の多摩ニュータウン№949遺跡で出土した7世紀後半のものなどがあるが(註6)例は少なく、全体のかたちや作り方が明らかでない。本例が草鞋とすれば、その製作過程も一部が復元できる重要な資料である。

3) 小結

古墳時代の遺構としては槽(しがらみ)が特筆される。後期中葉を下限に、調査地が位置する低地部は洪水によって埋没してしまうが、その直前に行われていた一帯の開発状況を知るための手がかりとなろう。また、槽自体の構築方法も「敷築工法」と呼ぶべきものと考えられ、槽を作り、一帯を開発した集団の性格を理解する材料となる。これらの点については、第IV章で再考するものとする。遺物では草鞋と考えられる縄物出土し、古墳時代の履物の好例である。なお、調査では、弥生時代後期から古墳時代前半に係わる遺構が見つからなかった。槽を覆う砂礫層からは多くの弥生時代後期から古墳時代前期にいたる遺物が見つかったため、洪水の上流側には同時期の集落が展開していたと考えられるが、調査地の近辺では今後の発掘調査の進展を待たねばならない。

(清水)

註)

- (1) 以下、[寺沢薫・森井貞雄1989]に従う。
- (2) 船橋遺跡O-IV・V地点出土の高杯C₂類である[原口正三ほか1962]。
- (3) 杯としては八尾市志紀遺跡[大阪府教育委員会1995]に、高杯としては長原遺跡などに類例がある。
- (4) 船橋遺跡O-III・IV・V地点出土の鉢A類である。
- (5) 東田地区北溝(北部)中・下層出土品に類似したものがある[石野博信・関川尚功1976]。
- (6) [文化庁1995]の記載では古墳時代中期となっているが、調査担当者である東京都教育委員会先行調査室宇佐見義春氏から、7世紀後半のものと考えられることをご教示いただいた。

第5節 飛鳥～平安時代の遺構と遺物

1) 第6B層の遺物(図26～28、写真2・3、図版29)

第6B層に係わる遺構は検出されなかった。しかし、調査区の北端で第6B層が凹み、下部が暗色化した場所があり、そこに土師器の杯・小型杯・小型壺・小型高杯・小型甕・破碎した須恵器の大甕・杯身などが廃棄されていた。凹みを埋めた第6B層はシルト質極細粒砂で、水漬きによるラミナ構造が認められる。小型の土師器を含むことから、ここでなんらかの祭祀行為が行われたのか、またはそれに使用されたものが廃棄されたとも考えられる。これらの土器は、飛鳥Ⅱの新相の一括資料と考えられる。次項で述べるように、第6B層と同様に第7A層の直上位に認められた第6A層基底面では飛鳥Ⅰの柱穴が検出されている。上述の遺物はそれよりも新しい時期に属するもので、第7A層を形成した洪水(氾濫)が治まり、調査区の南半ではすでに居住域に変化していても、北端では、なお、水漬きの堆積物が形成されるような環境にあったことが知られる。

土師器の小型の杯110は浅いものである。底部から緩やかに立上がり、口縁部付近では内湾している。全体はナデ調整によって仕上げられているが、外面下部には粘土の継ぎ痕が残っている。小型の杯111は全体にユビオサエによって作られ、手づくね土器といえよう。口縁端部はやや尖っている。胴部は直線的で、底部は平底ぎみである。小型の高杯112の杯部は浅く、外面は底部から口縁まで緩やかに内湾している。杯部から脚底部にかけては緩やかに外反している。表面は磨滅して調整痕が不明瞭であるが、ナデ・ユビオサエによるものであろう。脚部内面の上部では絞り痕が残っている。ほぼ同型同大の小型高杯がもう1点出土している。小型の壺113は、胴部最大径が口径よりやや小さい。頸部から口縁にかけて外反し、さらに、口縁部はつまみ出すようにしている。頸部の立上りは短い。胴部は最大径がやや上部にあり、底部は丸い。内・外面ともにナデ調整で仕上げられている。小型の甕114は胴部最大径に比べて口径がかなり小さくなる。口縁部はやや外方に直線的に短く立上がり、口縁端部は内面から斜め上方の外面向けてはっきりとした面を作っている。頸部にかけて内外面ともにヨコナデ調整である。内面は胴部との境で強く屈曲し、厚さも変化する。胴部はやや肩が張り、最大径が上部にある。底部は平底ぎみである。外面はユビオサエで、内面はナデ調整である。

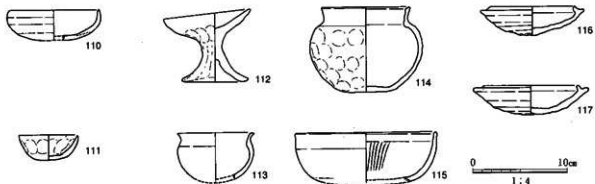


図26 第6B層出土遺物実測図①
土師器：110～115、須恵器：116・117



写真2 第6B層出土遺物

これらの小型土器のうち、高杯112と甕114は胎土がやや粗く、赤褐色を呈しているもので、在地の土器と思われる。また、杯111と壺113は精緻な胎土で灰白色を呈している。両者はそれぞれ一括して製作された可能性がある。115は杯Cで、口縁部をわずかに外方に曲げている。内面には放射状の暗文が残っている。ほかに、杯Cと考えられる破片が1個体以上出土している。

須恵器の杯身116は底部1/3程度がへら切り未調整部分である。117もほぼ同じ特徴をもっている。大甕118の口縁部は内傾した面をナデによって作り出し、口縁部外面に幅1.8cmの突帯が巡る。頸部は直線的である。頸部内面には、口縁から下へ約1cmの位置に鋸歯状の記号が鋭い工具の先端で描かれている(写真3)。胴部の調整は、外面が平行タタキののちカキメを施したもので、内面には車輪文の当て具痕が残る。内面の当て具痕からは、胴部の下1/4程度を上から下に、それ以上では下から上に向ってタタキを施した状況がうかがえる。119の口縁はつまみ上げてやや尖り、幅2.1cmの突帯が口縁部外面を巡っている。頸部は上方に向って緩く外反している。やはり、頸部内面に記号がへら描きされているが、鋸歯状に連続したのではなく、短い直線を平行に狭い間隔で描いたものである(写真3)。胴部の調整は、外面が平行タタキののちカキメを施したもので、内面には同心円文の当て具痕が残っている。上部1/2ほどは横方向に弱くナデしており、下部でも一部にナデ調整を施している。118と同様に、胴部のタタキは下1/4程度が上から下に、それ以上では下から上に向って施されている。



写真3 須恵器大甕口縁部のへら記号

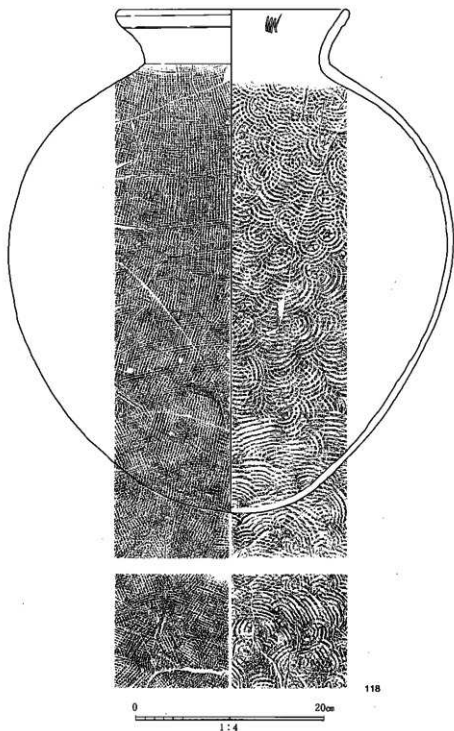


図27 第6B層出土遺物実測図③

これらの土器は、出土状況から一括資料と認められるものである。須恵器杯身は飛鳥Ⅱでも新しい段階といえよう。土師器の小型甕は胴径に比して口縁部径が小さく、平安時代の甕に似た形態であるが、[大阪文化財センター1983(『亀井』その1)]のNR6001出土例のように、7世紀でもこのような小型品がみられる。同遺跡では、小型壺でも113と類似した形態の土師器が出土している[大阪文化財センター1983(『亀井』その1)]。こうしたことから、これらの資料を飛鳥Ⅱの新相に属するものと考えておく。

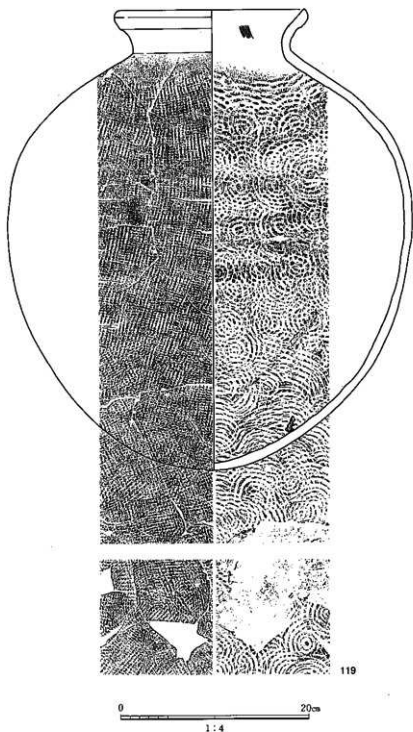


図28 第6B層出土遺物実測図③

2) 第6A層の遺構と遺物(図29～40、図版13・18・30～32)

第6A層の下面では、本調査でもっとも多くの遺構が検出された(図29)。第6A層は平安Ⅲ期の遺物を下限とし、奈良～飛鳥時代の遺物も多く含んでいる。したがって、奈良～飛鳥時代の遺物を含むあいでも、必ずしも遺構の時期に直結したものとはいえない。埋土の違いから基底面検出遺構と判断されたものの中には、遺物からみても飛鳥Ⅰの遺構というものもあるが、下面検出遺構では、遺物からだけでは判断しきれないものが多い。いずれにしても、飛鳥Ⅰ～平安Ⅲ期にはおさまる

時期であり、多くは奈良時代末から平安時代前半に属するものであろう。

遺構の種類には、柱穴・土壌・溝がある。調査区の南半では43基の柱穴のほか、土壌・溝が検出された(図30)。柱穴からは、調査区の中央付近と南端で3棟の掘立柱建物が復元される。

SB601は2間×2間以上の総柱建物である。桁行は3.24m、梁行は3.12m以上で、さらに東側に柱が続く可能性もある。柱間は桁行で1.62m、梁行で1.56mである。柱穴は長径40~80cm、深さ15~25cmでかなりばらつきがある。柱痕跡から推定される柱の直径は約16cmである。また、東西棟と考えると建物の方位はN-87°-88°-Eとなる。遺物は柱穴SP601~606(図31)で土師器・須恵器の細片が出土している。古代の遺物と思われるが、時期を決定するものはない。ただし、柱間がSB602・603に比べて短く柱穴も大型で、長方形を意識していると考えられ、奈良時代におさまると考えることも可能である。

SB602は2間×2間の掘立柱建物で、桁行4.10m、梁行5.25mとなる東西棟である(図32)。柱間は桁行で2.05m、梁行で2.63mである。SB603とともに、柱穴の大きさはSB601に比べてかなり小さく、長径30~60cmで、深さは15~25cmである。柱痕跡から推定される柱の直径は12cmである。南西角の柱穴は小規模の土壌SK604(図32)によって壊され、検出されていない。建物の方位はN-88°-Eである。遺物は柱穴SP607~611で土師器・須恵器・内黒の黒色土器の細片が出土している。SP608では土師器碗(130)が出土した。SP609からは飛鳥時代の須恵器杯蓋が出土しているが混入である。ほかに建物の時期を決定する資料はない。ただし、柱穴がSB601より小型で柱間が広がっているため、SB601とは異なる時期の建物であろう。調査区北半の溝群が平安時代中期ころであり、その時期まで降る可能性も考えられる。また、SK604からは土師器細片が出土している。

SB603(図32)は2間以上×3間以上で、建物の東・南柱列は調査区外に延びていると考えられる。柱間は桁行で1.75m、梁行で2.50m前後で、不確定な要素が多いが、一応東西棟の一部が検出されたものと考えておく。建物の方位はN-88°-Eである。柱痕跡から推定される柱の直径は12cmである。遺物は柱穴SP612~615で土師器・須恵器の細片が出土している。SP615では飛鳥時代の須恵器杯身が出土している。

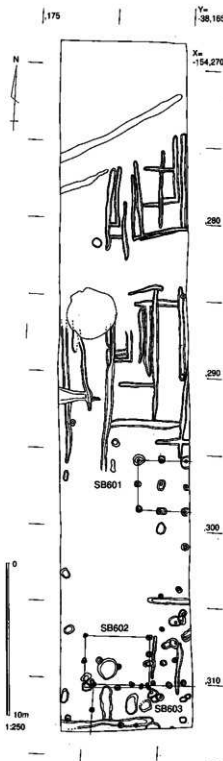


図29
第6A層下面および基底面検出遺構平面図

が混入である。ほかに時期を決定しうるものはない。しかし、SB602と同様の理由から、やはり平安時代の遺構と考えられる。

建物として組み合う柱が見つからないが、第6A層基底面で検出された柱穴SP616(図30)では、柱痕跡内から完形の須恵器杯蓋(156)が口を下にした状態で出土し、飛鳥時代の柱穴と考えられる。杯蓋は飛鳥Iでも新しい時期に属するものであろう。ほかにも、掘形や柱痕跡から飛鳥時代の遺物が

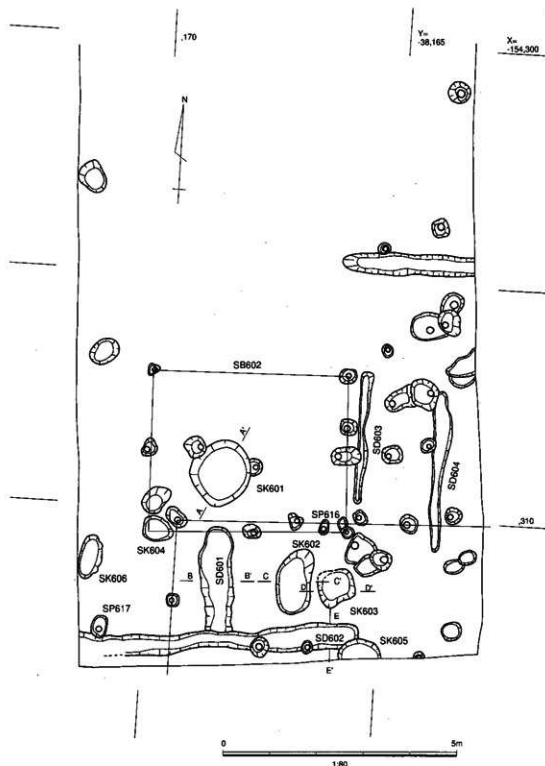


図30 南部遺構平面図

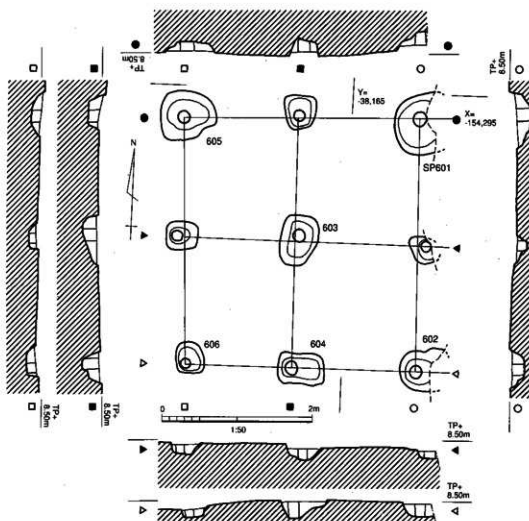


図31 SB601平面図・断面図

出土した遺構がいくつか存在するが、第6A層自体にも飛鳥時代の遺物が多数混入しているため、これらの遺物がただちに遺構の時期を示すものと断定することは困難であり、ほかに飛鳥時代に属すると判断しえた遺構はない。なお、柱穴SP617(図30)では土師器椀(129)が出土し、奈良時代に属する遺構の可能性はある。

南半では柱穴以外の遺構として土塙と溝がある。土塙にはSK601～606(図30)がある。SK601は平面形が円形の土塙で、直径154cm、深さ16cmである。甕と思われる土師器の細片が出土している。SK602は平面形が楕円形の土塙で、長径140cm、短径94cm、深さ22cmである。土師器の細片が出土した。東側に隣接するSK603はやや小型の土塙で、平面形は円形に近く、直径75cm、深さ41cmである。土師器・須恵器の細片が出土した。SK605は調査区の南端にかかり、長径90cm、深さ20cmが確認される。飛鳥時代の土師器の把手(152)が出土した。SK606は長径92cm、幅48cm、深さ18cmで、埋土は埋戻し土である。飛鳥時代の須恵器杯身(162)が出土した。溝にはSD601～604(図30)がある。SD601は長さ2.20mを検出し、幅は最大で70cm、深さは28cmである。南北に延びる溝で、南側はSD602によって破壊され、それより南側では検出されなかった。遺物は土師器甕などの細片が出土している。SD602は長さ約6mを検出し、幅は最大で51cm、深さは17cmである。SD601に直交し、方位はN-85°

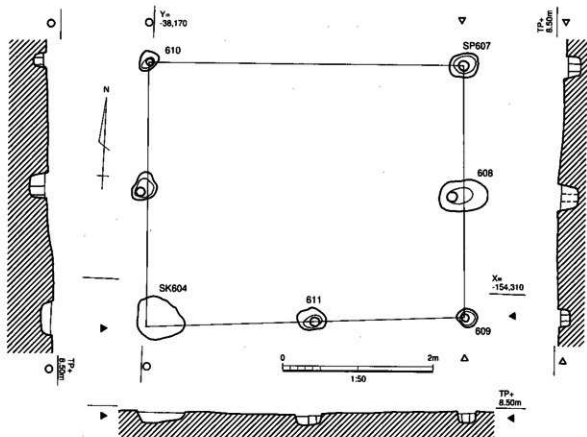


图32 SB602平面图·断面图

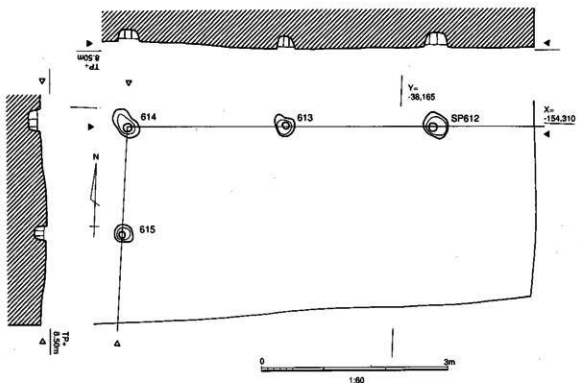


图33 SB603平面图·断面图

—Eである。西側は調査区外に延びている。遺物は土師器・須恵器の細片が出土している。これらの埋土は埋戻し土である。さらに、SB602の東側に隣接してSD603があり、さらにその東側約2mの位置に平行してSD604がある。どちらからも土師器・須恵器の細片が出土した。長さ2.8～3.4m、幅25～40cmで、深さは4cmとごく浅い溝である。ともに南北溝で、SB602とほぼ方位を一にすることから、建物の区画などに係わる溝の可能性もあるが、断定はできない。

一方、調査区の北半では、主として南北方向に延びる並行した溝があり、それらが一部で東西方向に屈曲、枝分かれした状態で見つかった(図35)。切合いが認められることから、異なった時期に掘削された溝があることがわかる。ただし、遺物には時期の特定できない細片が多いうえ、飛鳥時代などの混入遺物も少なくないながら、奈良時代末(平城宮土器Ⅵ)から平安Ⅲ期の遺物が遺構の時期を示すものと思われる。溝の方位は、北からわずかに西に振るものが多い。SD605～607・612～615・617・620・621などである。SD612・614とSD613では切合い関係があり、SD614の方が古く掘削されていたことが知られる。

SD606からは平安Ⅲ期と思われる土師器皿・椀(133)・甕(145・146)・鉢(148)、SD612からは土師器皿の細片、SD613からは土師器椀・高杯・鉢の細片、飛鳥時代の須恵器杯蓋、両黒の黒色土器などの細片、SD614からは土師器椀(135)と土師器細片など、SD615からは土師器・須恵器の細片、SD620からは飛鳥時代の須恵器杯身(161)、内黒の黒色土器椀(143)、SD621からは細片であるが両黒の黒色土器が出土している。

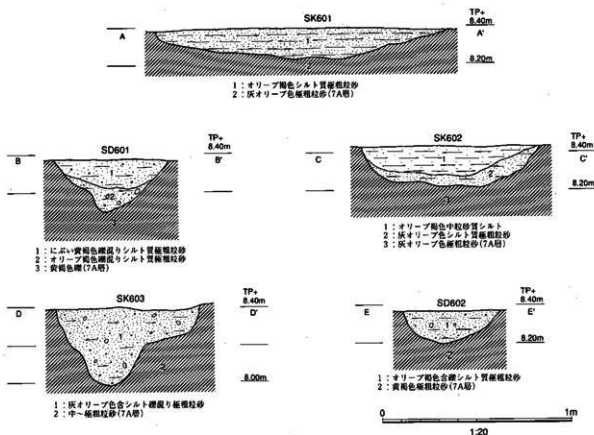


図34 南部溝・土壌断面図

一方、方位をわずかに東に振る溝として、SD610・611・616・618などがある。SD611からは土師器、飛鳥時代の須恵器杯蓋の細片、SD616からは土師器、内黒の黑色土器の細片が出土した。これらのうち、SD616・618は上記のSD613と東西溝で連結しており、切合い関係が認められないことから同時に機能していた遺構と考えられる。したがって、最大6°程度の方位差があるこれらの溝は、一部に切合い関係が認められるものの、さほど大きな時期差を反映しているものではないであろう。

これらを一群としてとらえると、それ以外のより大きく西に振っている溝群が区別される。SD608・609・619は、上記の溝群との切合い関係ではいずれも新しく、北半の溝群ではもっとも新しい一群となる可能性がある。SD608からは土師器の細片が出土した。SD619の南部では西に延びる溝が取り付け、出土した遺物には土師器碗B(139)・杯C(132)・碗(128)・高杯(141)がある。

土坑SK607は、SD611の南部西側にあり、直径63cm、深さ4cmである。埋土の全体に炭化物が充満しているが、出土遺物は土師器の細片のみである。さらに、土器埋納遺構が1基ある(図40)。SD612の南部にあり、それを切って掘込まれた遺構である。平面形は隅丸方形に近く、1辺の長さは約30cmで、埋納した土器よりも一回り大きい程度である。確認できた深さは10cmだが、この遺構は第6A層を掘削している最中に、埋納された土師器甕が正置された状態で検出されはじめ、遺構の掘込み面は第6A層内にあったものと思われるため、推定の深さは25cm以上となろう。甕は平安Ⅲ期古段階ころと考えられ、上記の北半の溝群はこれよりも古くなり、おおむね平安時代の前半ころと考えらえる。

このような溝群の性格は、SD613～615の埋土中にラミナ構造が認められることなどからも、畝の畝間と考えることが妥当であろう(図36)。遺構の分布状況が北半と南半で明瞭に分かれることから、耕作域と居住域とが接する部分を調査したものと考えられる。土器埋納遺構については、通常、完形の土器が単数ないし複数出土する[櫻井久之1993]のに対し、本例のように、底部をあらかじめ打欠いて埋納した例を知らないが、耕作域と居住域の中間付近に位置することにその性格を類推する手があるのかもしれない。

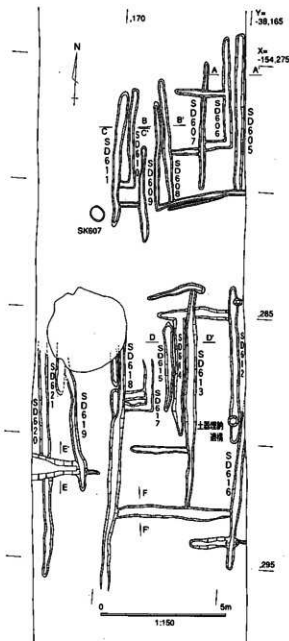


図35 北部遺構平面図

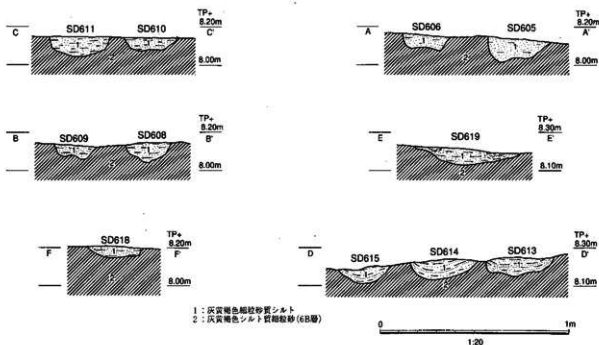


図36 北部清断面図

遺物では、土師器皿・杯・碗・高杯・甕・羽釜・置甕、内黒・両黒の黒色土器碗、須恵器蓋杯・杯・壺・小壺・甕などがある。

土師器

皿には120～125がある。120～122は立上りにナデが1段施され、底部はユビオサエである。平安Ⅱ期におさまるものである。123～125は2段ナデとなり、底部はユビオサエである。125は底部外面の中央側が段をなして膨らんでいる。平安Ⅲ期に属するものであろう。

碗Aには131・135(SD614)がある。口縁部がわずかに内湾する。平安時代前半のものと思われる。

碗Bには134・137・139・140がある。134は立上りが直線的で、平安Ⅱ期に属するものであろう。137は立上りがやや内湾しているが、同時期のものと思われる。139(SD619)・140も平安Ⅱ期であらう。

杯Cには126・127・132がある。126は口縁部が外方に屈曲し、端部内面に面が作られている。底部内面には放射状の暗文が認められる。また、外面には中央部付近に横方向のハケが施されているが、類例を知らない。器形と暗文の特徴からは飛鳥Ⅱに属するものと考えられる。132(SD619)は口縁端部内面に面を作ってわずかに外反させている。127も同様である。奈良時代前半ころのものであろう。

141は高杯で、杯部と脚部との境に明瞭な接合痕が残る。脚は細く、指で螺旋状にナデている。飛鳥時代のものである。

ほかは碗である。128(SD619)は口縁部が垂直に立上がり、端部でわずかに内湾する。底部は平底である。外面にはユビオサエの痕が残る、内面には外方を向く螺旋状の暗文が認められる。平城宮土器Ⅴ～Ⅵのものであろう。129(SP617)の口縁部は垂直に立上がり、口縁部はわずかに外方に曲げている。平城宮土器Ⅱのものである。130(SB602)は平安Ⅰ期で、136は平安Ⅱ期ころのものである。

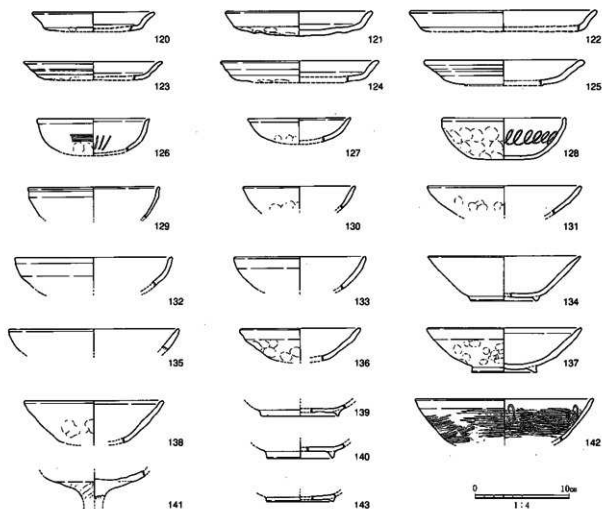


図37 第6A層出土遺物実測図①
土師器：120～141、黒色土器：142・143

あろう。133(SD606)は口縁付近をナデしており、わずかに内傾している。138は口縁付近のナデが明瞭で、内側にやや屈曲してから口縁端部に向って外反している。その下位はユビオサエによる凹凸が顕著である。

144～147・149は甕である。144はやや小型で、外面にハケを施している。145・146(どちらもSD606)は頸部の立上がりが高く、口縁端部に面を作っている。147は肥厚した頸部が鋭く外反し、口縁端部には明瞭な面を作っている。これらは、平安時代前半に属する。149の胎土は精良で、飛鳥時代のものであろう。148(SD606)は鉢である。口縁部が内湾し、端部はやや凹む明瞭な面を作っている。152・153は把手で、153の外面にはハケが施されている。150・151は羽釜である。口縁が外反するものであろう。154は土師質の平瓦で、凸面には縄目、凹面には布目痕が残る。

黒色土器

142・143(SD620)は内黒の黒色土器碗で、142は平安Ⅰ期に属する高台の付かない碗となろう。立上りは直線的で、外面はミガキが施されているが、ケズリの痕跡が残っている。内面にはハケのちミガキが施されている。さらに、内面の4～5箇所程度に暗文による装飾が施されている。143は低い高台が付き、平安Ⅱ期以降に属するものである。

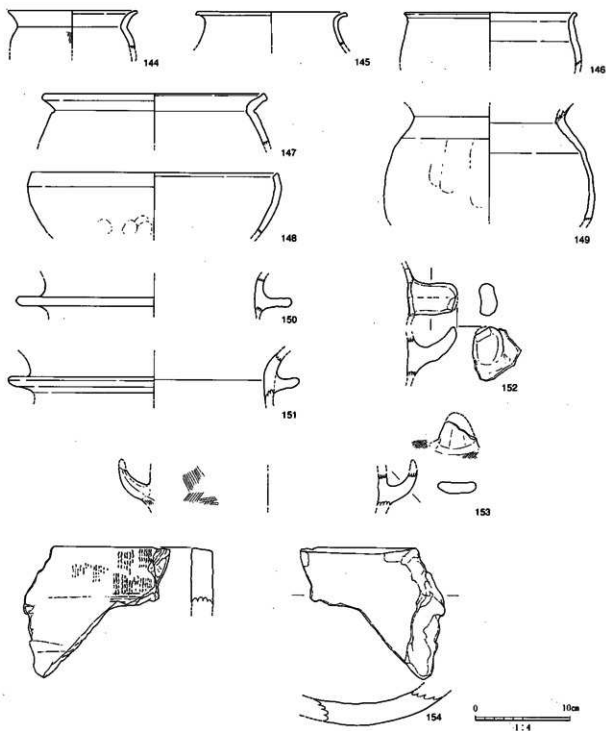


図38 第6A層出土遺物実測図②

土師器：144～153、瓦：154

須恵器

杯には155～166があるが、ほとんどは下位層からの混入である。155・156は杯H蓋で、155は飛鳥Ⅰの古段階、156(SP616)は飛鳥Ⅰの新段階に属する。157・158・161(SD620)は杯Hで飛鳥Ⅰの古段階である。159・160は杯G蓋で飛鳥Ⅱの新段階であろう。162はそれと対になる杯身である。163は飛鳥Ⅳの杯B蓋である。165は奈良時代の杯Bで、164・166は平安時代の杯B蓋と杯Bであろう。

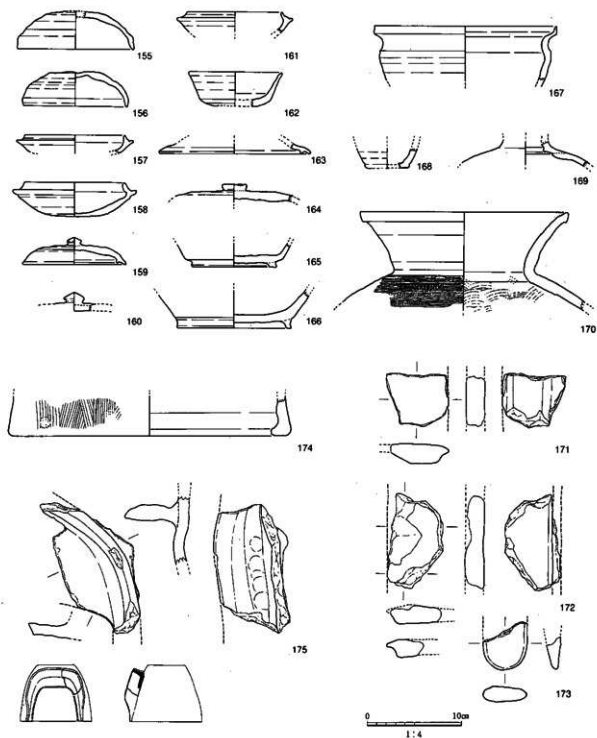


図39 第6A層出土遺物実測図③
須恵器：155～170、土師質甕甔：171～174

167は鉢であるが、讃岐系の器形で、のちのこね鉢につながるものである。頸部が強く内湾し、口縁部の器厚は薄く、端部は上方につまみ上げられている。9世紀代のものと推測される(註1)。

170は須恵器の甕である。口縁部には断面三角形の突帯が巡り、頸部は直線的である。胴部は外面に平行タタキののちカキメが施され、内面は同心円文の当て具痕がナデによって消されている。168は壺Gで、底部は強くナデで作り出したものである。169は壺Lで、内面には頸部と胴部との境に接合痕が残っており、平安I期に属するものと考えられる。

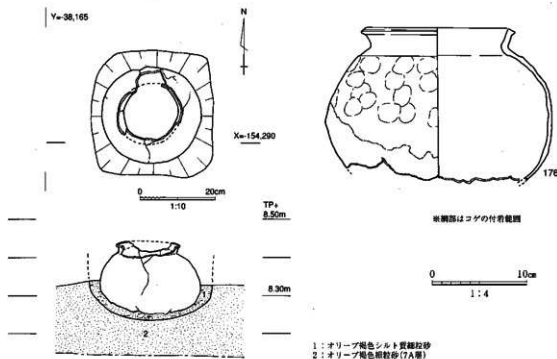


図40 土器埋納遺構平面図・断面図
土師器：176

171～174は曲げ底の置竈である。171・172は竈の窓の付近で内面に作られた垂直に延びる柱の部分で、174はその底部、173は底部に付けられた地中に突き刺して竈を固定する部分の可能性がある。いずれも胎土中に角閃石を多量に含み、生駒西麓産の土である。175は付け底の置竈である。底は竈からやや上方を向いて付けられ、接合部にはユビオサエの痕が明瞭である。底の下部に窓の一部が認められる。

土器埋納遺構は、上記の溝群より新しい遺構で、納められていた土師器の寛176は口径15.0cm、胴部最大径24.0cmである。底部は埋納される以前に打壊されており、現存高は16.2cmである。口縁は端部外方をつまみ上げるようにナデしており、そこから頸部にかけて胴部に比べかなり肥厚している。頸部の屈曲は明瞭で、強いナデによって胴部との境に段が生じている。胴部はやや扁平な球形で、外面はユビオサエ、内面はナデによって調整されている。外面の下半に、二次焼成による焦げが付着している。胴部が球形に近いこと、胴部径に比して口径が小さいことなどから、河内で使用された古代の甕でも終末に近いころと考えられ、平安Ⅲ期古段階ころのものとなろう。上記の北半の溝群はこれよりも古いため、おおむね平安時代前半ころと考えられる。

3) 第5B層の遺構と遺物(図41～43、図版19・33)

本層に帰属する遺構のうち、南部の掘立柱建物・柱穴については、調査時に下面で検出できず、第6A下面検出遺構と同時に調査した。出土遺物の整理・検討によって、いくつかの遺構に本層と同時期の遺物が存在することが明らかとなり、下面検出遺構として記述する(図41)。

SB501は2間以上×2間以上の掘立柱建物である(図42)。北側の柱列は建物の北壁か、あるいは庇に該当する可能性がある。後者のばあい、屋敷地の主屋に相当するような大型の東西建物であった可

能性がある。桁行は5.00m以上、梁行は5.25m以上が検出されていることになる。柱穴は小型で、長径50cm程度の楕円形のものが多い。深さは検出時で30cm弱であるが、上記の理由から、本来は50cm以上となろう。柱痕跡から推定される柱は直径10～15cmである。方位はN-87°-Eである。遺物はSP501～507で土師器・須恵器が出土しているが、ほとんどは細片で、時期決定の資料とならない。しかし、このうちSP502で土師器小皿(177)・瓦器碗片が、SP505で瓦器碗の細片が出土しているため、平安IV期古段階に属する建物であると考えられる。ほかに、建物としては組み合わないが、SP508で土師器小皿(180)が出土している。

土師器

土師器には小皿・皿・台付皿・鉢・甕・羽釜などがある。小皿は177～181で、177(SB501)は口縁の形態が「て」の字形となる土師器の小皿で、器高は低く口径も小さい。180(SP508)は土師器小皿で口縁部が肥厚しており、平安IV期中段階以後に出現する器形である。178・179は「て」の字形の小皿である。181は小皿であるが、立上りの下部をやや強くナデてわずかに外反させており、180と同様の器形となる。これらは平安IV期古～中段階に属するものと思われる。皿182～184は立上りが1段ナデのもので、平安I～III期に属し、混入であろう。皿185は立上りが2段にナデられたものである。平安IV期中～新段階に属するものである。186～189は台付皿である。186の底部内面はほぼ平坦で、口縁部は少しつまみ上げている。底部外面は段をなして膨らみ、台と接合する。187～189は台の部分であるが、直径は小さく6cm前後で、高さは4cm前後ある。

190は鉢で、口縁部がやや内湾し、口縁端部には明瞭な面を作っている。191～193は羽釜である。191は鐏の形態が断面三角形に近く、あまり突出しない。192・193は口縁部が強く外反するものである。194は甕で、頸部を強くナデて口縁部が外反し、口縁端部には明瞭な面が作られている。

瓦器

195～201は小皿である。195は内外面ともにていねいにミガキを施し、I期に属する。196・197・199は内面のミガキが格子状の暗文と化し、II-1～2期に属する。198・201は底部内面の暗文が不

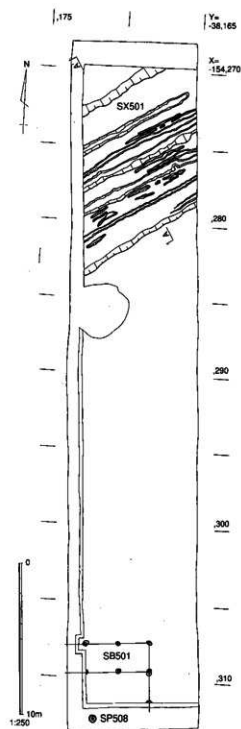


図41 第5層下面検出遺構平面図

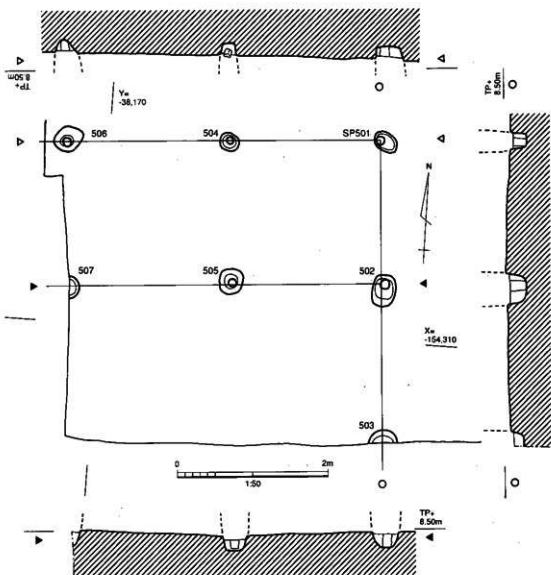


図42 SB501平面図・断面図

明瞭であるが、同時期のものであろう。200は底部の暗文が平行線となっている。やはり、同時期のものであろう。202～210は碗である。207は立上りがなめらかに内湾し、内外面ともにいねいにヘラミガキを施している。また、外面にはケズリの痕が残っている。底部内面のミガキは破片のため全体が不明であるが、おそらく、202のように全面に施すものであったろう。ともにⅠ期の瓦器である。208は口縁部の内面に沈線が施され、大和型の瓦器碗である。内外面ともにミガキがいねいに施されているが、外面にはケズリの痕跡が見られず、Ⅱ－Ⅰ期に属する。203・204・206は内面底部に格子状の暗文を施し、高台の直径も6cm以下と小さいためⅡ－Ⅱ期に属するものと思われる。205・209も同様であろう。210は口径も小さくⅡ－Ⅲ期に属すると考えられる。

白磁

211は小ぶりの玉縁をもち、高台はケズリ出している。これらの第5B層の遺物は、瓦器の出現期から平安時代の末葉にかけてのものである。

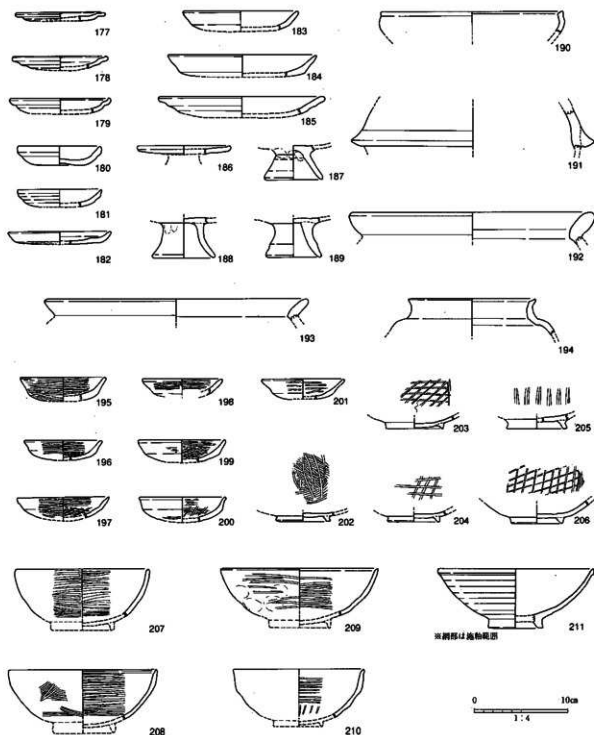


図43 第5B層出土遺物実測図
土師器：177～194、瓦器：195～210、白磁：211

4) 第5A層の遺構と遺物(図41・44・46、図版19・34)

第5B層と同時期の遺物を含むのが本層である。調査区北部でN-55°-Eの方位を境として西北側に40～50cm落込む段差があり、その下面では幅10cm程度の鋤溝が平行する方位で並列していた(SX501)。これらは鋤溝と考えられる耕作溝であり、段差自体が畝作を行った範囲を示している。遺物の同一性から、第5A層は第5B層と同時期に形成されたもので、地層の違いは耕作域と居住域の違いによるものと考えられる。SB501が東西南北に方位を揃えるのに対し、耕作域との境界は北東-南

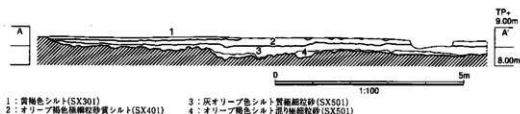


図44 SX301・401・501断面図

西方方向にずれていることが注目される。おそらく、調査区の北側に展開する自然地形の影響によるものであろう。

214・215は「て」の字形の土師器小皿で、次項のSX401出土のものに比べ器高が高く、口縁部の屈曲もはっきりしている。216は土師器皿で立上がりは1段のナデで、底部はユビオサエである。平安Ⅰ～Ⅱ期に属し、混入であらう。217は土師器の羽釜で、外方に屈曲する口縁部形態のものと思われる。これらの遺物は平安時代後期の平安Ⅳ期に属し、11世紀後半から12世紀代の年代が考えられる。ほか、ウマ歯1本が出土し、第7節1)に記述する。

5) 第4層の遺構と遺物(図45・46、図版34)

後述するSX301の上位にSX401が検出されている。南端はSX301と同じ位置にあたり、北東-南西方向に直線状に延びている。北端も調査区内で確認され、同方向に延びている。落込みの深さは約20cmである。212・213は土師器小皿でどちらも口径9cmに満たない。212は器高が1cm足らずで、「て」の字形の小皿の退化したものである。平安Ⅳ期以降であらう。213は13世紀代まで下る可能性がある。

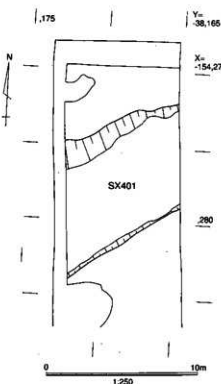


図45 第4層下面検出遺構平面図

6) 小結

調査によって、一帯が洪水で古墳時代後期中葉に埋没した後、飛鳥～平安時代に建物群のならぶ居住域と耕作域とに利用されたことが明らかとなった。粗い砂礫が堆積したため水はけがよく、シュートバーによって形成された微高地の利用方法を示している。(清水)

註)

(1)[片桐孝治1992]による。Ⅱ-②期に相当する器形と考えられるが、胎土の比較は行っていない。

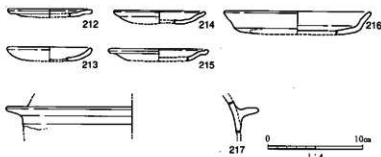


図46 第5A層・第4層出土遺物実測図
すべて土師器、第4層：212・213、第5A層：214～217

第6節 鎌倉時代以降の遺構と遺物

遺構では、SX401とはほぼ同じ位置に、第3D層の下面で落込みSX301が確認された。南端はSX401・501と同位置となる。北端は北東-南西方向に延びているが、西側で南に折れ、南端につながっている。落込みの深さは10cm足らずである。さらに、その北側に北東-南西方向の鋤溝が数条にわたって平行しており、こうした状況はSX501とよく似ている。図化する遺物が少ないが、土師器・須恵器・瓦器の細片が出土している。

ほかに、機械掘削を行う途中でいくつかの遺物が出土した。下位の地層に由来するものが多い。218～221は土師器小皿で、平安時代の後期から末葉に属するものであろう。218皿は「て」の字形の口縁が退化した土師器小皿で、口径が小さく器厚も厚い。227は土師器椀で全体がナデによって仕上げられている。土師器小皿と同時期であろう。222は内黒の黒色土器の底部で、内面には全面にヘラミガキが施されている。畿内第Ⅲ段階後半[森隆1995]に属するものである。223は瓦器小皿で、内外面ともにヘラミガキが施されているが、底部内面は暗文化している。224は瓦器椀の底部で、高台径

圖47 第3層下面檢出遺構平面圖

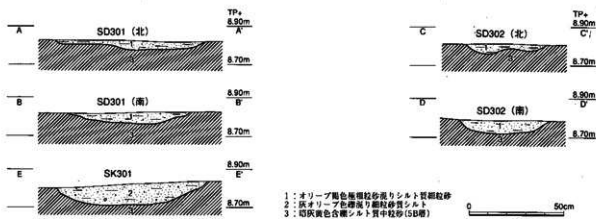


図48 第3層遺構断面図

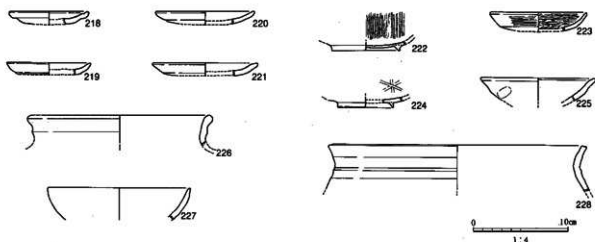


図49 第3層出土文物実測図

土師器：218～221・226～228、瓦器：222～225

は5.9cmとやや大きめであるが、内面は直線の暗文が多方向に施されている。223・224はⅡ-2～3段階ころのものであろう。226は土師器の羽釜の口縁である。上記の瓦器と同時期のものである。228は土師器甕で、口縁は外側に屈曲し、口縁端部は面が作られている。平安時代後期に属するものであろう。第3層の遺物は、下位の地層から混入したと考えられる遺物を除くと、13世紀代の遺物と考えられる。

2) 小結

鎌倉時代になると、調査区内では掘立柱建物がなくなる。付近の調査の進展を待たねばならないが、当該地域での集落構造の変化があったことも考えられる。

(清水)

第7節 動植物遺体の分析

1) 動物遺体の分析(図版35)

動物遺体は表3に示す3点が出土した。資料は作土や洪水層から出土したもので、原位置をとどめたものとは考えにくい。出土層準に基づく時代は古墳時代後期と平安時代である。資料の保存処理・同定・分析は、[久保和士1995]と同様な方法で行った。動物遺体の種類はウマ*Equus caballus* Linnaeusの骨や歯のみであった。

229 作土である第5A層から単独で出土した。左下顎の第2後臼歯M₂で、咬合面と歯根がわずかに欠損する。咬合面のやや下位におけるエナメル質の計測値は、近遠心長L24.9mm・頬舌幅W14.5mmである。歯冠高Hは約45mmで、歯根がやや発達しており、推定年齢は9才くらいである。

230 橋付近の第7A層基底付近から出土した。右下顎骨の破片で、第3前臼歯P₃から第3後臼歯M₃までの5本の臼歯が植立している。下顎骨底は欠損する。表面の遺存状態は良好で、水磨痕はさほど顕著ではない。現存する骨表面には解体痕などは認められない。計測値は表4に示すとおりで、比較資料として本遺跡と森の宮遺跡における既報告分の計測値を掲載した。これによると、本資料は市内出土の古墳時代から奈良時代のウマとしては標準的な大きさであるが、若干小さい。歯根はよく発達し、P₃の歯冠高Hは27.3mmで、推定年齢は12~13才である。

231 橋の内部に入込んだ第7A層から出土した。水磨痕が顕著な、右中足骨の遠位側の破片である。遠位端の最大幅Bdは47mm、最大径Ddは35mmと推測される。これらの値から、[西中川駿・松元光春1991]のI式を用いて推定した最大骨長は25.45cmである。さらに、[林田重幸・山内忠平1957]

表3 動物遺体一覧表

資料番号	層 準	遺 構	時 期	大分類	小分類	部 位	左 右	部 分	備 考
229	5 A層基底	—	平安後期	哺乳類	ウマ	下顎遠端歯	左	M ₂	少欠
230	7 A層	橋	古墳後期	哺乳類	ウマ	下顎骨	右	P ₃ ~M ₃ が植立した体部	
231	7 A層	橋	古墳後期	哺乳類	ウマ	中足骨	右	遠位側	破片

表4 ウマ下顎骨計測値一覧表

資料名	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃	後臼歯列長	備 考
230	26.2×15.9	24.8×15.0	22.6×13.3	23.2×12.4	30.3×12.0	78.3(咬合面73.8)	
84~70次 SK05 (5~6世紀)	(30.0)×(17.0)	(28.0)×16.0		(24.5)×14.5			[久保和士1992]
86~41次 SD01 (6世紀前半)	L28	L27	L26	L24			[久保和士1993]
87~27次 NC6A層 (8世紀)	28.5×17.1	27.3×16.3	24.8×15.3	26.1×13.9	31.8×13.3	86.5(咬合面73.8)	[久保和士1994]
森の宮遺跡 SD701 (7世紀)	25.0×16.9 27.9×17.6	25.0×17.6	22.4×16.5 24.6×16.6	22.3×15.3 25.1×14.6	28.3×13.3 29.4×12.0	73.8 79.2	[久保和士1995]

単位mm。臼歯の計測値は近遠心長L×頬舌幅W。ただし、森の宮遺跡以外は咬合面のエナメル質で計測した。

のⅢ式で体高を推定すると、126.4cmとなった。これはいわゆる中型馬に属する値である。中型馬を代表する馬種には、木曾馬(体高124~142cm)や御崎馬(体高125~140cm、平均132cm)などがあり[林田重幸1974]、本資料はこの中でも小さい部類に相当すると考えられる。しかし、これまでに体高推定を行った長原遺跡出土の古墳時代のウマ遺体では、いずれも本資料と同程度の値が得られており、当時の馬の標準的な大きさと考えてさしつかえないだろう。

最後に、230・231の意義にふれてまとめとしたい。まず、年代は6世紀中葉(TK10型式)が下限で、本遺跡出土の古墳時代のウマ遺体では、もっとも新しいものの一つにあたる。次に、分布においては、遺跡北東部での本格的な報告としてはこれが初例で、実質的な出土量においても、本地区は西地区に比べると少ない。残念ながら、流水によって堆積した砂層に包含されていたことから、出土状況に基づく考察を行うことはできないが、同じように同時期の多量の土器を砂層に供給した集落に由来することが想定され、その性格を考える際の一資料として注目されよう。以上から、本資料は断片的なものではあるが、長原遺跡および周辺遺跡との関連も含めた新たな知見を加える可能性を秘めており、この点において重要なものと考えられる。過去の調査例の検証を踏まえつつ、今後の調査の進展によってあらためて検討を行いたい。

(久保)

2) 構に使用された材の樹種同定

川崎地質株式会社(担当者: 渡辺正巳)

はじめに

本報告は、財団法人大阪市文化財協会からの委託により川崎地質株式会社が行った。対象とした試料は、第7A層内で検出された構造物を構成する材で、その樹種同定の概要を報告する。

また今回の報告に用いた永久プレパラートは、財団法人大阪市文化財協会および川崎地質株式会社微化石分析所に保管されている。

試料について

樹種同定用の試料は、財団法人大阪市文化財協会により採取された10試料である。川崎地質株式会社に搬入後、図50に示すプレパラート作製フローチャートに従い永久プレパラートを作製、樹種同定を行った。樹種同定にあたっては、光学顕微鏡下で4~600倍の倍率で観察し、現生標本および資料(鳥根大学総合理工学部古野研究室蔵)との顕微鏡下での比較を行った。記載にあたっては3断面の顕微鏡写真(図版35~37)を付け、用語などは基本的には[鳥地ほか1985]に従った。

樹種の鑑定と記載

表5に樹種の同定結果を示す。また、以下に各樹種ごとに特徴の記載を示す。

樹種名: コナラ属・コナラ亜属・コナラ節 *Quercus sect. Prinus sp.*

試料番号: 1・9

記載: 大きい円形ないし楕円形の道管が単独で1~3、4列に配列する環孔材である。孔圏外では非常に小さい道管が、単独で放射状ないし火炎状に配列する。小道管は薄壁で、やや角ばっている。道管にはチロースがよく発達し、道管せん孔は単せん孔である。また、孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数のきわめて低い単列放射組織ときわめて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔細胞を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属コナラ亜属コナラ節と同定した。

樹種名: コナラ属・コナラ亜属・クヌギ節 *Quercus sect. Cerris sp.*

試料番号: 2・5・6・7・8

記載: やや大きい円形ないし楕円形の道管が単独で1~数列に配列する環孔材である。孔圏外では径を中庸から徐々に減じた小さい道管が、単独で放射状に配列する。小道管は厚壁で円形である。道管せん孔は単せん孔であり、一部の道管にはチロースが認められる。また、孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数のきわめて低い単列放射組織ときわめて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。道管放射組織壁孔は構状を示

表5 樹種鑑定結果一覧表

試料 番号	樹 種 名		備 考
	和 名	学 名	
1	コナラ節	Quercus sect. Prinus sp.	
2	クヌギ節	Quercus sect. Cerris sp.	
3	ニワトコ属?	Sambucus sp. ?	
4	サクラ属?	Prunus sp. ?	
5	クヌギ節	Quercus sect. Cerris sp.	
6	クヌギ節	Quercus sect. Cerris sp.	
7	クヌギ節	Quercus sect. Cerris sp.	
8	クヌギ節	Quercus sect. Cerris sp.	
9	コナラ節	Quercus sect. Prinus sp.	
10	不明散孔材	unknown diffuse-porous wood	

[処理手順]

[処理内容]

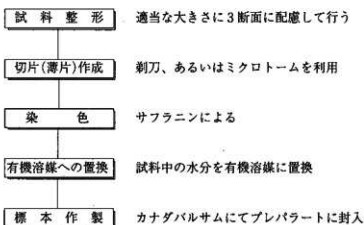


図50 プレパラート作製フローチャート

管が単独ないし2~3個放射方向あるいは斜め方向に接合し、多数分布する。道管せん孔は単せん孔で、着色物質の存在が顕著である。放射組織は単列のものと、きわめて低い3ないし4細胞幅(まれに5~7細胞幅)で縁辺に方形細胞が認められるものがある異性型である。以上の組織上の特徴からサクラ属と推定されるが、断定にはいたらなかった。

樹種名: 不明散孔材 *unknown diffuse-porous wood*

試料番号: 10

記載: 小さい道管が単独ないし2~3個接合して散在状に多数分布する散孔材である。道管は角ばっている。道管せん孔は階段せん孔である。放射組織は1~2(3)細胞幅で、異性I型ないしII型を示し、前者が多い。さらに軸方向柔組織は散射し、ビスフレックが存在している。ガマズミ属(*Viburnum*)、ハイノキ属(*Symplocos*)などの可能性があるが、特定にはいたらなかった。

す。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔組織を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属(クヌギ節)と同定した。

樹種名: ニワトコ属?

Sambucus sp. ?

試料番号: 3

記載: 散孔材で中庸の道管が単独ないし2~5個あるいはそれ以上が放射状、集団状に複合する。道管せん孔は単せん孔で、チロースが非常によく発達している。周囲柔組織が存在している。放射組織はきわめて低い5~10細胞幅の紡錘形を示すものが多く、単列のものもある異性型である。紡錘形放射組織に不完全なさや細胞が認められ、縁辺の方形細胞に結晶の認められるものがある。以上の組織上の特徴からニワトコ属と推定されるが、断定にはいたらなかった。

樹種名: サクラ属? *Prunus sp. ?*

試料番号: 4

記載: 散孔材で、非常に小さい道

第Ⅳ章 長原遺跡北部周辺の古墳時代中・後期の様相 に関する予察

埋没古地形の復元

本書で報告した地点の周辺ではおもな発掘が行われておらず、遺跡北東部における歴史的な変遷についても十分な考察がなされていない。今回の調査では、縄文時代中期から後期にかけて(第18層)と古墳時代後期中葉ころ(第7層)に起った大規模な氾濫性の砂礫層によって周辺域を含めて大きな環境の変化が起ったことが確認できた。後者の場合、調査区の南西1km付近に200基以上が密集する長原古墳群の廃絶とはほぼ同時期に起った現象で、同時期の集落の動向にも少なからず影響を与えたことが予測される。また、長原遺跡に隣接する八尾市竹沢遺跡、亀井遺跡、跡部遺跡、太子堂遺跡、植松遺跡、木の本遺跡、八尾南遺跡でも、それぞれの範囲の一部ではあるが発掘調査が積み重ねられており、各時代の重要な成果をもたらしている。そこで、本章では調査地とその周辺の古墳時代中期から後期にかけての埋没古地形を図51のように復元し、調査地における当該期の遺構の意味について考えたい。図ではおもな調査地点をドットで示し、引用文献は表6にまとめた。

なお、図は長原遺跡標準層序の7B層上面ないし7A層基底面で復元した。ただし、対象とした地域で行われた各調査は、範囲・深度ともに限定されたものであり、図もその制約を受けている。今後、各遺跡での調査の進行につれて補足・修正を行っていきたい。

I 地点(木の本遺跡)

八尾市南木の本2～4丁目が接する付近は木の本遺跡の北部にあたり、八尾市教育委員会と(財)八尾市文化財調査研究会によって発掘調査が行われている。それによると、初期須恵器を中心にやや降る時期までの溝・土壌・井戸?などが多数検出されており、集落域にあたると考えられる(1～4)。標高はおおよそTP+8.0mである。

II 地点(八尾南遺跡北部)

八尾市西木の本付近は八尾南遺跡北部にあたり、八尾市教育委員会と(財)八尾市文化財調査研究会によって発掘調査が行われている。柱穴・溝などが検出され、集落の時期は古墳時代前期と5世紀代後半を中心とすると考えられる(11～14)。量的に少ないながらもMT15～TK10型式の須恵器を伴う柱穴・溝・土壌などの遺構があり、6世紀の前葉ころまで、集落が展開していたと考えられる(12・13)。東に300mほど離れた地点(9)では後期と考えられている水田が拡がっている。水田は砂層に覆われており、後期の中で洪水が起った可能性がある。集落に北接して行われた長原遺跡の発掘調査(10)では遺構が検出されておらず、集落域は八尾市内におさまるものと思われる。こうした集落の標高はおおむねTP+8.0m以上である。

また、南木の本4丁目付近の7・8や、5の調査で古墳時代後期にさかのぼる可能性のある自然流路が検出されている。9で見られた洪水層とつながるものかもしれないが、地層断面図からはより新

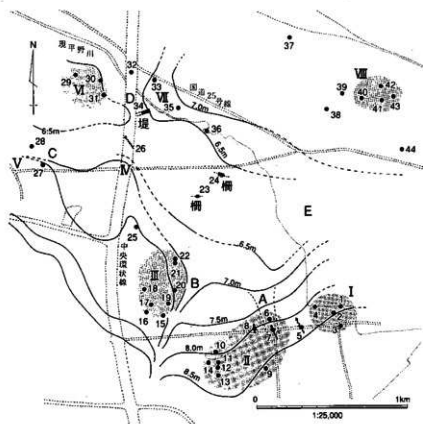


図51 調査地周辺の埋没古地形と古墳時代中・後期の集落(網部が集落推定範囲)

器が多量に含まれていることや、祭祀に関連すると考えられる遺構・遺物の存在も注目される。標高はTP+7.5m付近で、同じ高さのコンターラインを復元すると、北に向って平坦な地形が張り出していると想定され、その北端でも柱穴が見つまっている(25)。また、北東側に向って下がる緩やかな斜面にかけても掘立柱建物・溝・土壌などが集まっている。遺構の分布する範囲はTP+7.0m前後までであろう。この張り出し部は瓜破台地の北東縁辺にあたり、そこにかかなり広範囲な集落が展開しているものと考えられる。

また、Ⅲ地点の東側では、Ⅱ地点との間に浅い谷筋が復元できるが(支谷B)、NG7B層の上面で大規模な氾濫現象が起った痕跡はない。

Ⅳ地点(長原遺跡北東縁部)

平野区長吉戸7丁目の近畿道関連の調査では城山遺跡として長原古墳群北部の一支群が調査された。TP+7.0mのラインはⅢ地点の縁辺から北西方向に延び、これらの古墳群を取り込むようにして西に向っているものと想定される。TP+7.5mのラインとの間は広く、近畿道に沿って平坦な地形が広がっていたようで、Ⅳ地点から200mほど南側では水田とそれに関連する遺構があり、初期須恵器・土師器・韓式系土器などが見つまっている。

Ⅴ地点(長原遺跡北部)

平野区長吉戸2丁目の発掘調査では2基の古墳が見つまっている(27)。その北側で行われた調査では、TP+6.2m付近にNG7Bii層が堆積し、それより上位から2m以上の深さに達する大規模な自然流路が検出されている(28)。流路の方向はおおむね南東から北西である。流路を埋没させた砂礫層

しい時期の可能性も否定できない。現状では、Ⅱ地点の南東部とⅠ地点の間に中～後期の集落遺構が展開している可能性が低いことも勘案して、この付近に支谷Aの存在を仮定しておく。

Ⅲ地点(長原遺跡北東部)

大阪市平野区長吉長原東1～2丁目付近の発掘調査では、一帯に弥生時代中期から古墳時代前期の集落ないし墓域が拡がり、さらに、古墳時代中期の集落遺構が多数見つまっている(15～22)。出土した須恵器は初期須恵器の範疇におさまる。また、韓式系土

表6 関連調査一覧表

地点番号	遺跡名	調査名	引用文献	地点番号	遺跡名	調査名	引用文献
I	1	水の本遺跡	90-176	IV	24	95-57	[本館]
	2	—	—		25	83-1	[大阪市文化財協会1983]
	3	90-4東	[八尾市教育委員会1992a]		26	(城山遺跡) Cトレンチ	[大阪文化財センター1986b]
	4	91-5	[八尾市文化財調査研究会1992a]		27	(城山遺跡) A・Bトレンチ	[大阪文化財センター1986b]
	5	90-4西	[八尾市文化財調査研究会1991]	V	27	(出戸遺跡) 84-3	[大阪市文化財協会1984c]
II	6	八尾南遺跡	第11次調査		28	(出戸遺跡) 85-1	[大阪市文化財協会1985a]
	7	YS89-15	[八尾市文化財調査研究会1989a]		29	竹淵遺跡 第1次調査	[八尾市文化財調査研究会1989b]
	8	第4次調査	[八尾市文化財調査研究会1985b]		30	第2次調査	[八尾市文化財調査研究会1992b]
	9	第7次調査	[八尾市文化財調査研究会1988]		31	第3次調査	[八尾市文化財調査研究会1993b]
	10	(長原遺跡) NG82-26	[大阪市文化財協会1982b]		32	亀井遺跡 亀井Bトレンチ	[大阪文化財センター1983ほか]
	11	YS87-10	[八尾市文化財調査研究会1994a]	VI	33	88-586	[八尾市教育委員会1990]
	12	—	[八尾市教育委員会1983b]		34	亀井ポンプ場	[大阪文化財センター1980b]
	13	YS93-19	[八尾市文化財調査研究会1994b]		—	—	[大阪府教育委員会1994]
	14	第3次調査	[八尾市文化財調査研究会1985a]		35	—	[八尾市文化財調査研究会1989c]
III	15	長原遺跡	92-97		36	平野川改修	[大阪府教育委員会1989]
	16	92-39	[大阪市文化財協会1992d]	VII	37	勝部遺跡 AT93-14	[八尾市文化財調査研究会1994f]
	17	89-86	[大阪市文化財協会1989]		38	(太子堂遺跡) TS82-4	[八尾市文化財調査研究会1993c]
	18	87-67	[大阪市文化財協会1987]		39	AT93-11	[八尾市文化財調査研究会1994c]
	19	95-36	[大阪市文化財協会1995b]		40	AT93-13	[八尾市文化財調査研究会1994e]
	20	84-6	[大阪市文化財協会1984a]		41	94-059	[八尾市教育委員会1996]
	21	84-86	[大阪市文化財協会1984b]		42	AT93-12	[八尾市文化財調査研究会1994d]
	22	15	[大阪市文化財協会1979]		43	(横松遺跡) 90-433	[八尾市教育委員会1992b]
	23	95-77	[大阪市文化財協会1996c]		44	(横松遺跡) 91-626-627	[八尾市教育委員会1993]

には、弥生時代から古墳時代後期前半(TK10型式)までの遺物が多量に含まれており、本書で報告した第7A層の状況と一致する。後述するVI地点との間にはこうした氾濫性の堆積物が運ばれてくる以前にもすでに谷地形が形成されていたものと考えられ、支谷Cとする。

VI地点(竹淵遺跡南東部)

八尾市竹淵東2～4丁目付近で行われた竹淵遺跡の調査では、TP+6.5m以上で古墳時代後期の古墳(MT15型式:30)、掘立柱建物址などの集落遺構(MT15～TK43型式:29)が見つかった。また、30・31で認められた弥生前期の遺物包含層の上部はTP+6.5m付近に達するようである。古墳時代の地表面はさらに高かったことになり、この一帯に微高地を認めることができる。

VII地点(亀井遺跡)

竹淵遺跡と近畿道を挟んで東側に位置する亀井遺跡では、寝屋川南部流域下水道長吉ポンプ場(以下ポンプ場とする)と近畿道関連を中心とする大規模な発掘調査が行われている。34の東ではTP+6.5m弱を作業面とする初期須恵器を伴う方墳が築かれているが、その後、古墳の周濠を埋めるようにして堤が構築されている。堤の方向はほぼ東西方向で、わずかに西で南に振っている。ポンプ場内で西接して行われた[大阪府教育委員会1994]の調査でこの堤の続きが見つかり、総延長は50m以上に達する。基底幅は10m以上で、残存する高さは2m近くである。堤の構築時期は、盛土中からは中期末の須恵器が出土し、また、堤を埋没した砂を多く含む偽礫層([大阪文化財センター1980b]でいう

VI層)にMT15型式の須恵器が含まれることから5世紀末から6世紀初頭の時期が想定されている。堤は弥生時代後期の河川(岡NR3001)上に構築され、竹濲遺跡との間に存在する谷地形(支谷D)がそのころに形成されたものと考えられる。なお、堤の目的は北側に水田域が形成されていることなどから、それらに利用する水量の調節などが考えられる。さらに、亀井遺跡の北部の調査でもTK47型式の須恵器を包含する水田址が見つかっており(32)、古墳時代後期の河川氾濫のため埋没している。氾濫性の砂層からはTK43型式までの遺物が出土し、この河川が亀井遺跡の支谷Dを水源としたものと直ちに判断することはできないが、支谷Cが第7A層と一連の砂礫層で埋積されたのちにも、まだ飛鳥時代の流路(26)が確認されていることなどからも、TK10型式以後に起った大規模な氾濫現象ののち、なお、その上面を削りながら自然流路が形成されていた可能性は十分にありう。

ポンプ場の周囲の古地形は、北200mの33でTP+6.2~6.8mに堆積した弥生時代後期の遺物包含層よりも上位に復元され、また、東200mの35でも同様であるため、より高くなっていくことがわかる。

Ⅷ地点(跡部遺跡東部)

八尾市春日町・東太子・太子堂付近では古墳時代前期以降の遺構が見つかる。また、後期で6世紀代の遺構・遺物包含層が存在し、東側の植松遺跡にかけて拡がっていると推定される(41~43)。NG7B層に対応すると考えられる地層の上部はTP+7.5~8.0m付近で、植松遺跡南部にかけて、この一帯に亀井遺跡から続く微高地を想定することができる。ただし、39でTP+6.7m付近を基底とする砂・シルト層があり、東側の40で検出された古墳時代前期以降の砂層と一連であると考えられる。この砂層は、さらに北西500m付近の調査(37)で検出されたTP+5.9mを基底とする細砂層や[大阪府文化財調査研究センター1996a・b]で検出された河川(註1)などにつながると思われる。その源流は不明であるが、微高地の中にこのような古墳時代の谷筋が形成されていた可能性もある。

亀井遺跡から跡部遺跡にかけて復元される微高地は、平野川水系に由来すると考えられている自然堤防に覆われている。跡部遺跡西部の調査などで明らかのように、自然堤防の上部は平安時代を前後する時期の氾濫性堆積物で構成されているが、跡部遺跡東部から自然堤防を挟んで南接する植松遺跡の調査などでは、弥生時代中期でTP+7.0mを越える高さで遺構が見つかり(44)、ともに本書の調査地点より高く、この微高地の成立が少なくとも弥生時代中期ころにはさかのぼると考えられる。39では、TP+4.3~5.3m付近で厚い粗粒砂層が存在し、弥生中期の遺物包含層の下位にあり、弥生時代前期ころの洪水によるものと思われる。さらに、38では庄内式期以前の砂層がTP+4.6~6.2mに堆積している。こうした氾濫性の堆積物によってこの一帯に自然堤防が形成されていったものであろう。

以上の状況をまとめると、本書調査地の南側には木の本遺跡(I地点)、八尾南遺跡(II地点)が、西側には長原遺跡北東~北部(III・IV・V地点)が拡がる瓜破台地の北東縁辺に形成された扇状地地形が展開している。北側には竹濲遺跡(VI地点)が立脚する微高地と亀井遺跡から跡部遺跡・植松遺跡にかけて延びる自然堤防(VII・VIII地点)が存在し、調査地付近が両者に挟まれた低地となっていることが推定される。そして、低地を囲んでいくつかの支谷が存在している。なお、低地内の埋没古地形は、氾

氾濫前の自然流路の位置や氾濫時の下刻状況などの詳細なデータが不足しており、今後の修正が必要であろう。

氾濫現象

次にこの低地を埋没した氾濫現象について考える。本書調査地(24)では第7A層の上部はTP+8.0 mを越えている。堆積時直後の砂礫層上面は、後世に流失したり削平を受けたりすることになるので、本来はさらに高かったことになる。基底は最深部でTP+5.6 mである。南西200 m付近でもほぼ同様の砂礫層が堆積している(23)。また、南南東400 m付近では基底でTP+6.3 m、上部でTP+7.3 m付近に堆積した砂礫層があり、一連の地層である可能性が高い。こうしたことから氾濫の規模は相当地に大きなものであったと想定される。

氾濫現象と支谷の関係では、東側の支谷C・Dが水流の出口にあたる。一方、南側の支谷A・Bは低地へ流れ込む水流の供給側にあたる。しかし、現在までの調査で、そのどちらにも低地を埋積した第7層を供給した大規模な氾濫現象が確認されていない。また、谷の規模もこれほどの大規模な氾濫の原因となるには小さすぎるきらいがある。そこで、現在では植松遺跡から木の本遺跡に挟まれた間の一帯を第7A層の供給源の候補として掲げておきたい(支谷E)。Ⅷ地点付近には弥生時代以降に自然堤防が発達していくと考えられ、その一部が決壊することによって多量の土砂を含んだ洪水が低地に突入してきたと思われる。本書調査地の砂礫が北250 m付近の36よりも1 mほど高く堆積したことからは、本書調査地よりも東側で洪水時の流心が南東-北西方向に屈曲していた状況が想定され、砂礫の堆積は低地の南西側に顕著であったと考えられる。このように、氾濫性堆積物の上面は、相当に起伏が激しかったものと考えられ、その後の土地利用の状況に大きく影響しているであろう。36ではTP+7.3 m付近に奈良時代に形成された水田が拡がっており、本書調査地で飛鳥時代にはすでに柱穴が作られ居住域になっていたことと対照的である。

また、出口にあたる支谷Cでは全体が砂層で埋没しているが、Dでは上部4 mほどが飛鳥時代に滞水状態で埋没したとされる[大阪府教育委員会1994]。各支谷の中の局所的な差異であるかもしれないが、両方の出口の堆積状況の違いが氾濫現象の収束状況を反映しているとしたら興味深い。

櫓の性格と敷設工法

本書調査地では盛土を伴う櫓(しがらみ)が構築されているが、23でも同一層準で同一構造の櫓が埋没していた。櫓が構築された時点では、若干の砂礫が堆積し流水環境にあったことが知られる。櫓の目的はこうした水流を制御することと考えられるが、周辺にその目的を明らかにするような遺構は未検出である。ただし、ここで注目されるのは上述した亀井遺跡の堤の存在である。この堤は「敷設工法」[工楽善通1995]で築かれ、支谷Dを流れる河川に対してほぼ直行する方向で築かれた大規模なもので、古墳時代中期の土木治水技術を知る好例となっている。堤の目的は断定されていないが、下流側の水田の開発と管理に係わる可能性は大きい。構築時期は古墳時代中期末葉から後期初頭ころにおさまり、本書の櫓よりやや先行すると考えられる。ところが、復元した地形から考えると、支谷Dを完全に塞ぐものではなかったにせよ、ここに堤を築き、水流を遮ることは上流側の低地で氾濫を起しやすくすることにつながる。支谷Cの開口時期は不明であるが、氾濫時にすでに開口していたとして

も、水流の一方の出口を決めることでその危険性は増大したことであろう。低地に作られた櫓と堤が、一帯の開発行為に関連した一連の治水工事とする考えが妥当であるならば、櫓には堤の存在によってせき止められた低地内の水を制御して、低地内をも開発していく目的が考えられないであろうか。

現在のところ、堤を作り、櫓を設けて低地の開発に係わった集団は特定できていない。集団の条件としては、少なくとも古墳時代中期から後期前葉までは存続した集落であることが求められるが、瓜破台地側ではⅠ～Ⅲ地点ともに、5世紀後半代に顕著な遺構が後期に入って乏しくなり、櫓の築造時まで大きな集落が存続していたか断定できない。Ⅳ地点では後期の遺構はあるが集落全体の規模が不明で、また、中期にさかのぼる遺構の存在は不明である。さらに、Ⅳ地点では後期初頭の住居址が見つかっているが、やはり中期にさかのぼる遺構の存在が不明である。

このような状況の中で、敷葉工法の存在が注目される。

敷葉工法は、[工業普通1995]によれば古墳時代から古代にかけて池の堤防や護岸を土で築く際に盛土の工程中に樹木の枝や葉を敷き詰めるもので、7世紀前葉以降の狭山市狭山池北堤や、7世紀後半の太宰府市・大野城市の水城跡でも確認されているという。さらに、亀井遺跡例が日本ではもっとも初期のものと考えられ、その技術的な系譜を大陸に求めようとしている。本書の櫓に用いられた盛土も、この敷葉工法と同一の工法によるものとみてよいであろう。一方、5世紀中葉以降6世紀に入らない時期に構築されたと考えられている久宝寺遺跡の櫓SS5002([大阪文化財センター1987a])は砂を主体とした盛土の表面に横木・縦木をわたして杭で固定したもので、その前後に草敷きを行っている。こうした盛土の表面斜面側を草などで覆う技法は、工業氏の言われるとおり櫓の目つぶしのために行われるものと考えられ、山賀遺跡[大阪文化財センター1983]([山賀]その1)の例のように弥生時代後期にもみられる伝統的な技法である。

工業氏の推測されたように、敷葉工法が山賀遺跡や久宝寺遺跡SS5002のような弥生時代以来の技法と区別される大陸伝来の新技術ならば、低地の開発に渡来集団が関わっていたことの一つの証拠となろう。前述のように木の本遺跡から長原遺跡にかけて、韓国伽耶地域との係わりが指摘される韓式系土器が多量に出土しており(註2)、堤・櫓の築造時に該当する集落の位置は不明であるが、開発集団の性格を探る視点になりうると思われる。

いずれにしても、このように低地を埋め尽くするような大規模な氾濫は、集落の経済基盤に少なからぬ影響を与えたことが想定され、開発集団の特定と低地開発の実態、さらに、氾濫によっていかなる影響を被ったのかについては、今後の調査の進展によって明らかにしていかなければならない課題である。

(清水)

(註)

(1)久宝寺遺跡の竜車操車場の調査では第8・9トレンチで古墳時代前期から中期にかけて存続したと考えられている河川が見つかり、その方向はおおむね南—北から南東—北西である。川岸と想定されている高さ

はTP+5.5mで、川の基底はTP+3.0mよりも深く、未検出である。洪水層によって埋没したのちのの高さはTP+7.0mを越えている。また、洪水は数次にわたり、その間に槽が構築されている状況は、近畿道関連で調査された地点の状況と似かよい、一帯での活発な治水活動をうかがうことができる。砂礫層に包含された遺物は弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器などで、報告書では古墳時代中期に河川の大部分が埋没したとされている。こうした状況からは、亀井遺跡から跡部遺跡東部の間に古墳時代に支谷が存在した可能性は高いと考えられる。なお、この河川の埋没時期が5世紀代におさまるならば、本章で問題とした後期中葉を下限とする氾濫が生じた際には、支谷はその影響を受けない程度に埋没していたと考えられ、その結果、本書調査地を中心とする低地に流水が集中する結果になったとも推測される。

(2)[田中清美1989]による。

引用・参考文献

- 赤塚次郎1990、「考察」：愛知県埋蔵文化財センター編『遼間遺跡』、pp.50-109
- 石野博信・関川尚功1976、奈良県立橿原考古学研究所編『橿向』、p.214
- 瓜生堂遺跡調査会 1971、『瓜生堂遺跡』
- 1980、『愚智遺跡』Ⅰ・Ⅱ
- 大阪市文化財協会 1979、『大阪市下水溝発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査報告書』
- 1980、『瓜破北遺跡』
- 1982a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1982b、『近畿財務局公務員宿舎建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-26)略報』
- 1983、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』
- 1984a、『長吉出戸下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-6)略報』
- 1984b、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』
- 1984c、『出戸西市営住宅第5期建設工事に伴う出戸2丁目所在遺跡発掘調査(DD84-3)略報』
- 1985、『出戸市営住宅建築に伴う出戸2丁目所在遺跡発掘調査(DD85-1)略報』
- 1987、『長吉中学校体育館増築に伴う長原遺跡発掘調査(NG87-67)略報』
- 1989、『長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-86)略報』
- 1992a、『難波宮址の研究』第九
- 1992b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 1992c、『長吉長原東市営住宅(第3期)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG92-97)略報』
- 1992d、『長吉長原東市営住宅(第2期)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG92-39)略報』
- 1994、『大阪市都市整備局による東喜連住宅建設工事に伴う喜連東遺跡発掘調査その1 (KR94-7)略報』
- 1995a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ
- 1995b、『大阪市都市整備局による長吉長原東住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-36)略報』
- 1996a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ
- 1996b、『森の宮遺跡』Ⅱ
- 1996c、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報』
- 大阪府教育委員会 1989、『1988年度 亀井遺跡発掘調査概要-八尾市南亀井町・跡部南の町所在-』
- 1994、『1992・93年度 亀井遺跡発掘調査概要-八尾市南亀井町所在-』
- 1995、『八尾市志紀町西1丁目所在 志紀遺跡発掘調査概要・Ⅳ -志紀流域調節池築造に伴う発掘調査-』
- 大阪文化財センター 1980a、『瓜生堂遺跡』
- 1980b、『亀井・城山遺跡』
- 1981、『巨摩・瓜生堂』
- 1982、『亀井遺跡』

- 1983・1986・1987、『亀井』その1～3
 1983・1984、『友井東』その1～2
 1983・1984・1986、『山賀』その1～6
 1984、『亀井遺跡』II
 1985、『美園』
 1986a、『亀井北』その1～3
 1986b、『城山』その1～3
 1987a、『久宝寺北』その1～3
 1987b、『久宝寺南』その1～2
- 大阪府文化財調査研究センター1996a、『久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第5集
 1996b、『久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う—』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集
- 片桐孝治1992,「讃岐国十瓶山窯製品の流通について」:日本中世土器研究会編『中世土器の基礎研究』Ⅶ, pp.165-201
 亀島重則・阪田育功1984a,「遺跡周辺の地理的・歴史的背景」:大阪文化財センター編『友井東』その1 第Ⅱ章, pp.3-8
 亀島重則・阪田育功1984b,「河内平野開発の過程」:大阪文化財センター編『友井東』その1 第Ⅵ章第3節, pp.185-198
 木原克司1982,「長原遺跡の水田址をめぐる諸問題」:大阪市文化財協会編『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』II 特論1), pp.287-316
- 京嶋寛1990,「水田遺構と古代の長原」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II 第Ⅳ章第5節, pp.294-306
 1991,「群集土壌の性格と意義」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』IV 第Ⅲ章第1節, pp.135-149
 久保和士1992,「動物遺体」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IV, pp.96-98
 1993,「動物遺体」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ, pp.54-56
 1994,「長原6層中から出土したウマの骨」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ, pp.74-78
 1995,「動物遺体の調査結果」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ, pp.233-241
 1996,「動物遺体の調査結果」:大阪市文化財協会編『森の宮遺跡』II, pp.134-174
- 工業普通1995,「古代築堤における「敷業工法」—日本古代の一土木技術に関しての予察—」:『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢』Ⅱ, pp.497-513
- 根井久之1993,「長原遺跡の土器埋納遺構—飛鳥～平安—」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ, pp.268-286
 1996,「なぜ、弥生土器は埋められたのか」:大阪市文化財協会編『篝火』62号, pp.2-3
- 佐藤隆1992,「平安時代における長原遺跡の動向」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』, pp.102-114
 島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司1985,『木材の構造』文永堂, p.276
- 清水和明1992,「ナウマンゾウハンターを求めて」:大阪市文化財協会編『篝火』37号, pp.2-3
 菅榮太郎1995,「石炭資料の型式および製作技法の歴年的検討」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ, pp.367-388
 鈴木秀典1982,「瓦器埴の編年」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』II, pp.278-282
- 宅地開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する研究会編1986,
 『宅地開発事業と埋蔵文化財—宅地開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する手引(暫定版)—』

- 田中清美 1989、「5世紀における摂津・河内の開発と渡来人」：大阪歴史学会編『ヒストリア』第125号、pp.1-25
- 1991、「桑津遺跡と方形周溝墓」：大阪市文化財協会編『葦火』32号、pp.6-7
- 1995、「桑津弥生集落の変遷」：大阪市文化財協会編『葦火』56号、pp.2-3
- 田辺昭三 1966、「出土遺物の検討」：平安学園考古学クラブ編『陶器古墳群Ⅰ』、pp.35-58
- 1981、『須恵器大成』 角川書店
- 1982、「初期須恵器について」：『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』平凡社、pp.417-429
- 趙哲済1991、「長原の水期の狩人」：大阪市文化財協会編『葦火』32号、pp.4-5
- 趙哲済・大阪市石器研究会1994、「長原遺跡における旧石器調査の現状—特に層序と古地理について」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.73-84
- 都出比呂志1982、「畿内第五様式における土器の変革」：『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』平凡社、pp.215-243
- 田島富慈美1993、「有舌尖頭器における割離面の検討—大阪市内の出土例から—」：旧石器文化談話会編『旧石器考古学』47号、pp.61-72
- 寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、pp.41-146
- 永島輝臣嶺1984、「大阪市内・加美遺跡の発掘調査」：『日本考古学協会第50回総会 研究発表要旨』、p.14
- 永島輝臣嶺・田中清美・松尾信裕・藤田幸夫・趙哲済・森毅・積山洋1985、
「大阪市加美遺跡の弥生中期大型墳丘墓について」：『日本考古学協会第51回総会 研究発表要旨』、p.20
- 那須孝洋・梅野博幸1980、「地山以下の沖積層」・「縄紋時代の海成層について」：大阪文化財センター編『亀井・城山』
第Ⅳ章 第3・4節、pp.20-25
- 奈良国立文化財研究所1976、「平城宮発掘報告書」Ⅶ—奈良国立文化財研究所学報—第26冊
- 奈良国立文化財研究所1978、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告書」Ⅱ—奈良国立文化財研究所学報—第31冊
- 西弘海1978、「土器の時期区分と型式変化」：奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ、pp.92-100
- 西中川駿・松元光孝1991、「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」：『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究補助金(一般研究B)研究成果報告書、pp.164-188
- 林田重幸1974、「日本在来馬の研究」：『日本古代文化の探求・馬』社会思想社、pp.217-262
- 林田重幸・山内忠平1957、「馬における骨長より体高の推定法」：鹿児島大学農学部編『鹿児島大学農学部学術報告』6、pp.146-156
- 原秀慎1980、「自然地理的背景」：大阪文化財センター編『亀井・城山』第2章第1節、pp.3-7
- 原口正三・田中琢・田辺正三・佐原真1962、平安学園考古学クラブ編『船橋Ⅱ』
- 広瀬和雄1978、「小島東遺跡」：大阪府教育委員会編『堺町遺跡群発掘調査概要』、pp.1-24
- 文化庁1995、「発掘された日本列島—'95新発見考古速報」 朝日新聞社
- 松本百合子1991、「はじめまして藤山遺跡です」：大阪市文化財協会編『葦火』31号、pp.6-7
- 松本百合子・久保和士1993、「石器作りの家」：大阪市文化財協会編『葦火』45号、pp.4-7
- 南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』8号、pp.2-4
- 森隆1995、「黒色土器」：日本中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp.245-256
- 森の宮遺跡調査団1972、『森の宮遺跡第1・2次発掘調査報告』
- 八尾市教育委員会1983a、「木の本遺跡(南木の本4丁目5〜9番地)」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年

度』、pp.63-108

1983b、「八尾南遺跡(西木の本4丁目11番地)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』、pp.109-126

1990、「亀井遺跡(88-586)の調査」:『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ 八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業』、pp.15-20

1992a、「木の本遺跡(90-176)の調査」:『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告26 平成3年度公共事業』、pp.3-27

1992b、「植松遺跡(90-433)の調査」:『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告26 平成3年度公共事業』、pp.31-34

1993、「植松遺跡(91-626-627)の調査」:『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ 八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業』、pp.26-29

1996、「跡部遺跡(94-059)の調査」:『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告Ⅰ 八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助』、pp.1-2

八尾市文化財調査研究会1985a、「八尾南遺跡(第3次)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 昭和59年度 (財)八尾市文化財調査研究報告6』、pp.17-89

1985b、「八尾南遺跡(第4次)」:『昭和59年度事業概要報告 (財)八尾市文化財調査研究報告7』、pp.13-38

1987、「八尾南遺跡(第6次)」:『昭和61年度事業概要報告 (財)八尾市文化財調査研究報告14』、pp.25-30

1988、「八尾南遺跡(第7次)」:『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度 (財)八尾市文化財調査研究報告16』、pp.34-38

1989a、「八尾南遺跡(第11次)」:『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度 (財)八尾市文化財調査研究報告25』、pp.51-167

1989b、「竹河遺跡(第1次調査)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 (財)八尾市文化財調査研究会報告23』、pp.13-52

1989c、「亀井遺跡-南亀井町4丁目41-1の調査- (財)八尾市文化財調査研究会報告19」

1990、「八尾南遺跡(YS89-16)」:『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度(財)八尾市文化財調査研究報告28』、pp.32-33

1991、「木の本遺跡(YS90-4)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 (財)八尾市文化財調査研究会報告32』、pp.29-36

1992a、「木の本遺跡第5次調査(SK91-5)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(財)八尾市埋蔵文化財調査研究会報告34』、pp.143-158

1992b、「竹河遺跡(TK89-2)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 (財)八尾市文化財調査研究会報告35』、pp.81-93

1993a、「八尾南遺跡(第18次)」:『平成4年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、p.40-42

1993b、「竹河遺跡第3次調査(TK92-3)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 (財)八尾市文化財調査研究会報告39』、pp.179-194

- 1993c、「太子堂遺跡第4次調査(TS92-4)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(財)八尾市文化財調査研究会報告39』、pp.205-213
- 1994a、「八尾南遺跡第10次調査(YS87-10)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(財)八尾市文化財調査研究会報告40』、pp.83-108
- 1994b、「八尾南遺跡第19次調査(YS93-19)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(財)八尾市文化財調査研究会報告43』、pp.101-116
- 1994c、「跡部遺跡第11次調査(AT93-11)」:『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.10-11
- 1994d、「跡部遺跡第12次調査(AT93-12)」:『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.12-14
- 1994e、「跡部遺跡第13次調査(AT93-13)」:『平成5年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.15-16
- 1994f、「跡部遺跡第14次調査(AT93-14)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 (財)八尾市文化財調査研究会報告42』、pp.1-5

八尾南遺跡調査会1981、『八尾南遺跡—大阪市高速電気軌道2号線建設工事に伴う発掘調査報告書—』

吉川周作・那須孝徳・榎野博幸・古谷正和1986、「近畿地方中部に分布する後期更新世から完新世の火山灰層について」:
『地球科学』40-1、pp.18-38

あ と が き

広大な範囲を占めるそれぞれの遺跡に対して我々が調査しえた面積はあまりにも小さい。それだけに、我々は既往の調査・研究成果を十二分に吟味して、常に予測と検証を繰返しながら発掘を進めなければならない。長原遺跡は比較的精細に調査を行ってきた遺跡であるが、本書で報告した周辺はまだ未知の部分の大きい地域である。

本書では、周辺調査の成果をもとにして、狭小な範囲ではあるが古墳時代の古地理を復元した。これを叩き台にして、長原遺跡ひいては河内平野の歴史を解明していきたい。周囲に重要な遺跡が並ぶこの一帯で、今後、継続されるであろう調査とその報告には、そうした意味で大いに期待できよう。

なお、長原遺跡に係わる当協会の発掘調査報告書には『長原遺跡発掘調査報告』と『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』の2つのシリーズがあった。『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』は、両遺跡にまたがって施行中の長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う報告書として従来の『長原遺跡発掘調査報告』と区別した。本書を嚆矢とする新シリーズは、新規に始まった長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書として今後継続して刊行されていくことになる。事業対象地域が長原遺跡の東部に限定されていることから、表題のような名称とした。読者諸賢には紛らわしくなるやも知れないが、ご了解のほどをお願いしたい。

(永島 暉臣愼)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- M MT15 16, 33, 63, 65, 66
- S S字竈 29, 32
- T TK10 16, 25, 28, 33, 60, 63, 65, 66
- TK208 33
- TK23 33
- TK43 65, 66
- TK47 33, 66
- あ 飛鳥Ⅰ 16, 38, 41, 43, 50
- 飛鳥Ⅱ 16, 38, 40, 48, 50
- 飛鳥Ⅲ 16
- 飛鳥Ⅳ 50
- 栗津SZ式土器 8
- い 生駒西墓産 28, 29, 32, 33, 52
- 井戸 10, 63
- う ウマ 34, 56, 59, 60
- え 円板充填法 28
- お 凹基式石蔵 11
- か 刀形木製品 34
- 甕棺 10
- 韓式系土器 10, 33, 64, 68, 69
- き 畿内第Ⅰ様式 8, 16, 17, 23
- 畿内第Ⅱ様式 24
- 畿内第Ⅲ様式 16, 28
- 畿内第Ⅳ様式 24, 28
- 畿内第Ⅴ様式 28
- く クサビ 18, 20
- 櫛描直線文 16, 23, 28
- 管玉 10
- こ 豪族居館 10
- 国府型ナイフ形石器 8
- さ 細部調整 17, 19
- サヌカイト 17
- し 槽(しがらみ) 4, 13, 25, 26, 27, 34, 37, 61, 67~69
- 敷業工法 67, 68
- 車輪文 39
- 重圈文軒丸瓦 10
- 使用痕 19
- 庄内式 10, 29, 32, 33, 66
- す 水田 8, 10, 12, 63, 64, 66, 67
- 鋤溝 55, 57
- せ 製塩土器 34
- 石蔵 8, 11
- 石器集中部 8
- た 竪穴式住居 8, 10
- て 底部輪台技法 28
- ど 動物遺体 34, 59
- 土器埋納遺構 4, 47, 52
- 土壌 4, 10, 16, 21, 23, 42, 44, 47, 57, 63, 64
- 土鍾 34
- と 鋸 10
- な 長原式 8
- は 羽釜 48, 49, 53, 56, 58
- 破綻 10
- 剥片 17~20
- 週間5・6期 29
- ひ 平瓦 49
- ふ 布留式 10, 29, 32
- へ 平安Ⅰ期 48, 49, 51, 53, 56
- 平安Ⅱ期 48, 49, 56
- 平安Ⅲ期 16, 41, 46~48, 52, 53
- 平安Ⅳ期 16, 53, 56
- 平城宮土器Ⅱ 48
- 平城宮土器Ⅲ 48
- 平城宮土器Ⅳ 46, 48
- ほ 方形周溝墓 8, 10, 24
- 掘立柱建物 4, 10, 16, 42, 52, 58, 64, 65
- も 木棺 10
- ゆ 有茎尖頭器 8
- わ 草鞋 36, 37

〈地名・遺跡名など〉

あ	跡部遺跡	24, 63, 66, 69	国府遺跡	5, 8
い	一ヶ塚古墳	10	国府台地	8
う	上町台地	8, 10	古東除川	7
	植松遺跡	63, 66, 67	巨摩庵寺遺跡	8
	瓜生堂遺跡	8	じ 城山遺跡	7, 64
	瓜坂遺跡	8, 10	た 太子堂遺跡	24, 63
	瓜坂北遺跡	10	竹西遺跡	63, 65, 66
	瓜坂台地	3, 5, 8, 64, 66, 68	玉串川	7
お	大阪平野	10	つ 塚ノ本古墳	10
	恵智遺跡	8	と 友井東遺跡	10
か	勝山遺跡	8	な 長瀬川	5, 7, 8
	加美遺跡	10	長原遺跡	1~3, 5, 7, 8, 10, 11, 15, 60, 63, 64, 66, 68
	亀井遺跡	5, 7, 8, 10, 11, 24, 63, 65~69	長原古墳群	10, 63, 64
	河内湖	8, 22	は 羽曳野丘陵	5, 7
	河内湖	10	ひ 平野川	5, 7, 8, 66
	河内台地	5	ふ 船橋遺跡	5, 37
	河内平野	5, 8, 10	古市古墳群	10
き	木の本遺跡	10, 63, 66~68	ま 纏向遺跡	34
	旧東除川	7, 10	も 森の宮遺跡	8, 59
	久宝寺遺跡	8, 10, 68	や 八尾南遺跡	8, 10, 63, 66
	喜連東遺跡	5	山賀遺跡	8, 68
く	桑津遺跡	8	山之内遺跡	8
こ	後期難波宮	10		

〈その他〉

B	BB7火山灰層	15	あ	始良Tn火山灰	8
			へ	平安神宮火山灰層	8

**Archaeological Reports
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume I

**A Report of an Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 1995**

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association

CONTENTS

Foreword	
Explanatory Notes	
Chapter I Background and Progress	1
1. Background of the research	1
2. Progress of the research	3
Chapter II Condition and Description of the Site location	5
1. Location of the site	5
2. Historical development	8
Chapter III Results of Present Research	12
1. Order of Stratigraphy and Remains	12
1) Stratigraphy	12
2) Correlation of remain to the Nagahara site stratigraphical standards	15
3) Stone Remains	17
2. Jomon Period Features and Remains	21
1) Bed 17 features and remains	21
2) Bed 16 remains	22
3. Yayoi Period Features and Remains	23
1) Bed 13 features and remains	23
2) Bed 11 features and remains	23
4. Kofun Period Features and Remains	25
1) Beds 8-10 features and remains	25
2) Bed 7 features and remains	25
5. Asuka to Heian Periods Features and Remains	38
1) Bed 6B remains	38
2) Bed 6A features and remains	41
3) Bed 5B features and remains	52
4) Bed 5A features and remains	55
5) Bed 4 features and remains	56
6. Post Kamakura Period Features and Remains	57
1) Bed 3 features and remains	57
7. Analysis of Plant and Animal Remains	59
1) Analysis of Animal remains	59
2) Identification of timber used in the construction of fences	61
Chapter IV Considerations of the Middle Kofun Period in the northern sector of the Nagahara site	63
References	70
Postscript	
Index	

ENGLISH SUMMARY

Introduction: development and excavation

This report details the achievements of excavations carried out between October 1995 and February 1996, at the Nagahara site, situated in the south-eastern part of Osaka City. The Nagahara, and adjoining Uriwari, sites are the second most researched areas in Osaka City, after the Osaka Castle site. Nagayoshi-Uriwari district, in which the sites are located, is one of the few remaining areas within Osaka in which farm land can still be found. Improvements in the main road and subway services from the City to this area has been followed by rapid residential growth. A rezoning project has been underway since 1981 to accommodate the increasing demand for water and sewerage services. The current site lies within an area being rezoned for the development of the latter.

In addition to the emergency research associated with the rezoning project, numerous other excavations at these sites have been carried out, almost continuously, for more than twenty years, prior to public and private development in the area. In particular, at the Nagahara site, over three hundred excavations have been carried out so far and the total excavated area amounts to over 160,000 square metres, covering 4.5% of the whole site. This large accumulation of field data has clarified that both the Nagahara and Uriwari sites are large complex sites following a slope down to a plain, in which discoveries belonging to between the Upper Palaeolithic and the Early Modern eras, have yielded wide ranging information about settlements and cemeteries in each period.

OCCPA wishes to express its concern over potential misunderstandings arising from the naming of Nagahara site excavation reports. In addition of this title; Eastern Sector of Nagahara site excavation reports, there are two other titles reporting on excavations in the Nagahara area; the Nagahara site, and the Nagahara-Uriwari site Excavation reports. This volume is the first of the new series which will report on excavations within a new development project limited to the eastern part of the Nagahara site. We regret any confusion which may arise as a result of this new title. The research results are summarized below:

Location of the site

Research has clarified that during the Early Jomon Period (c. 7,000 BP) the northern edge of the Uriwari firsau, on which the northern part of the Nagahara site is situated, was the beach shore of the former Kawachi Bay. Later environmental and climatic changes resulted in a vast accumulation of sand, and the bay slowly transformed, firstly into a lagoon, and later into a lake. This body of water continued to diminish, most rapidly at the time of the transition of the Jomon to the Yayoi period and the consequential expansion of land which accompanied this shrinkage, accounts for the accumulation of the numerous features and remains in the Kawachi plain region. Research over this area suggests that the geography of the Kawachi region changed in correspondence to the change in people's activities.

Outline of Research

The lower terrace formation was located 8 m below current ground level. Excavation indicates that at the time when this layer was at ground level, the current research area was situated on the shoulder of a valley (figs 4, 7, 8). A 3 metre layer of sand and gravel covers

this feature and dates to the Middle Jomon Period (ca. 6000-5000 BP). This deposition may have resulted from the retreat of Kawachi Bay and the accompanying development of the river system. Judging from the strata, sedimentation occurred during the Late to Final Jomon periods (5000-3600 BP), additionally, the existence of a marsh in the research area at that time, was clarified. Only a small number of pits and pottery shards were found dating to this period (figs 11, 12), though pottery fragments, ditches and pits were found dating to the Early to Middle Yayoi Period (100 BC - AD 100). No remains or features were found dating from the Early and Middle Kofun Period (4th - 5th centuries), though evidence of wide-spread flooding, which covered the site with sand, was found dating to the former part of the Late Kofun Period (mid-6th century). An irrigation barrier was unearthed from within this deposition, most likely dating to just prior to the flooding and may indicate that the marshy area was being developed at this time (figs 16 - 25). From the Asuka Period (7th century) to the latter half of the Heian Period (12th century), *hottatebashira* style buildings, ditches and pits were constructed (figs 26 - 44), indicating that it was a residential area at this time. Land to the north of the research area was used for farming. From the Medieval Period to the Early Modern Period, the land was continually used for farming (figs 45-49).

Additionally, this season's research again failed to uncover evidence of the Shiroyama Kofun. Although the existence of this Kofun is recorded in a former land registration chart, archaeological confirmation has yet to be found (fig. 6).

Further reading

Osaka City Cultural Properties Association

1978-1992 *Archaeological Reports of the Nagahara sites* Vols. I-VI, Osaka. (In Japanese)

Osaka City Cultural Properties Association

1978-1995 *Archaeological Reports of the Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-VIII, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報告書抄録

ふりがな	ながはらいせきとうぶちくはつかつちようさほうこく1							
書名	長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅰ							
副書名	1995年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	清水和明・京嶋寛・久保和士・高井健司・植木久・岡村勝行・永島輝臣 謹							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-943-6833							
発行年月日	西暦 1998年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしちくたん 長吉六反1丁目	27126	-	34° 36' 30"	135° 35' 02"	NG95-57次 19951002~19960329	400㎡	長吉東部地区 土地区画整理 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長原遺跡	集落	縄文時代	土壌・小穴		なし			
	集落	弥生時代	溝・土壌		弥生土器			
	?	古墳時代	堀（しがらみ）		土師器・須恵器			
	集落	飛鳥時代	柱穴		土師器・須恵器			
	集落	平安時代	掘立柱建物4棟・溝・ 土壌・土器埋納遺構		土師器・須恵器・ 黒色土器		建物は瓦器以前3棟、 瓦器以降1棟	
	田畑 田畑?	鎌倉時代	溝		瓦器			

圖 版



第8～18層堆積状況
(北壁)



第18層堆積状況(南西から)



第17A層上面検出遺構
(北から)



SP1703の埋土断面(南東から)



SK1701検出状況(東から)



SK1701埋土断面(東から)



第11・13層検出遺構
(北から)



SP1301埋土断面(北東から)



第11・13層検出遺構(北から)



SK1101埋土断面(南から)



第8層上面検出状況(南から)



第6B～8層堆積状況(北壁)

柵検出状況(南東から)



杭で固定された縦木(東から)



柵東部検出状況(北から)



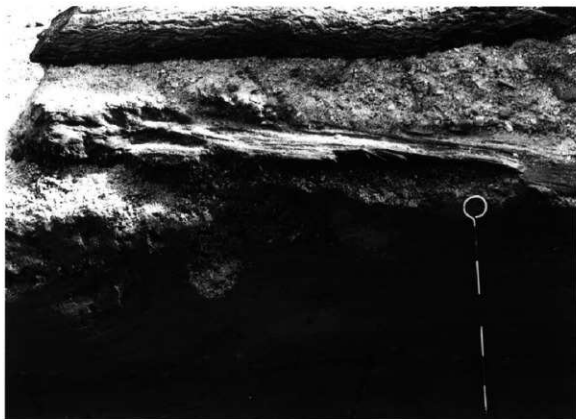
柵中央部検出状況(北東から)



盛土内部の敷物検出状況(北西から)



盛土内部の敷物検出状況(西から)



欄と基底の踏込み痕(西から)



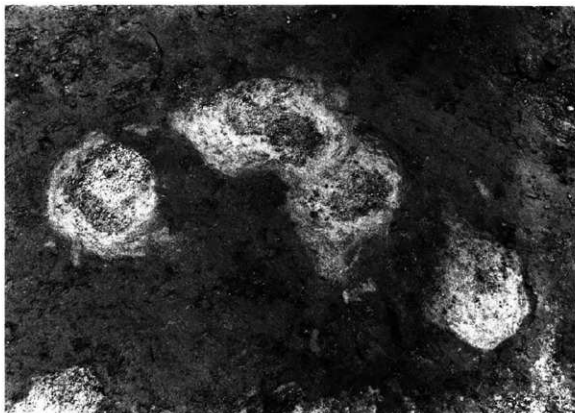
欄東部の盛土・敷物の状況(南から)



柵に流入した刀形木製品(101)出土状況



草鞋状の編物(109)出土状況



柵周辺の踏込み痕検出状況



同上完掘後

第6A層下面検出遺構
(南から)



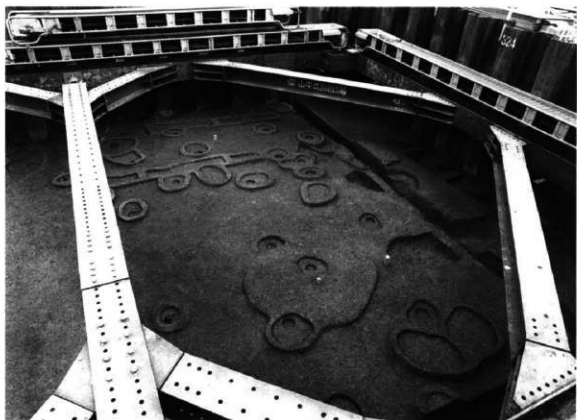
第0～6A層堆積状況(南壁)



土器埋納遺構検出状況(南から)



同上埋土断面(南から)



南部遺構検出状況(北西から)



同上(北東から)

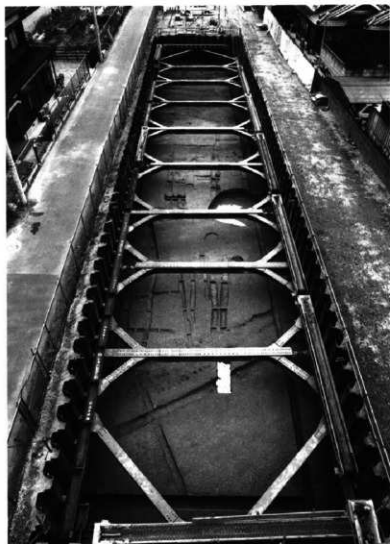


南部遺構掘削状況(南西から)



SB601検出状況(北西から)

第6A層下面検出遺構
（北から）



北部遺構掘削状況（南西から）



溝埋土断面(南から) ※左からSD615・614・613

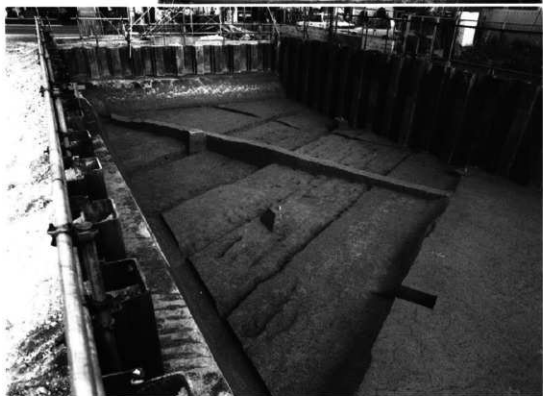


SK607埋土断面(南西から)

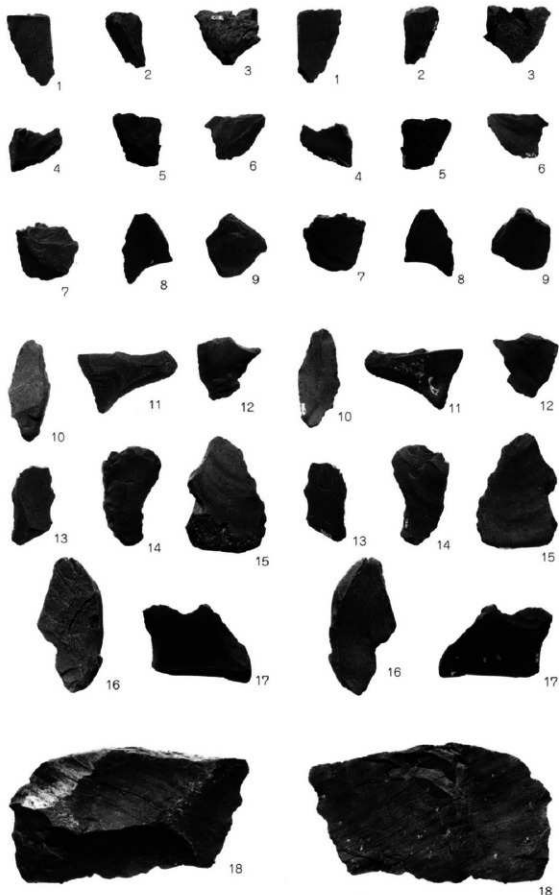
第5層下面検出遺構
(北から)



図版一九 第5層の遺構



SX501掘削状況(南西から)





21



22



23



24



23



25



26



27



28



29



30



31



32



33



36



41



43



34



35



38



37



63



39



40



44



47



45



48



45



49



46



50



51



52



53



54



55



56



57



58



58



42



59



65



61



64



66



62



60



67



68



72



75



76



77



78



79



85



86



69



70



71



80



81



82



73



74



83



84



87



89



92



97



88



93



94



95



96



98



99



100



90



91



108



101



102



103



104



105



107



108



109





121



128



123



134



124



137



125



141



120



127



131



135



122



129



132



126



130



133



138



136



139



140





155



162



156



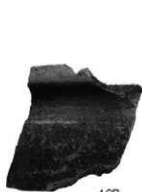
165



168



166



167



170



175



159



160



163



157



161



164



172



171



161



168



174



173



180



187



188



189



177



181



183



190



191



178



182



184



192



194



179



186



185



193



196



197



201



196



197



201



207



209



210



207



209



210



195



198



199



200



208



211



202



205



204



202



205



204



203



206



203



206



216



225



212



214



215



213



217



218



222



224



219



223



226



220



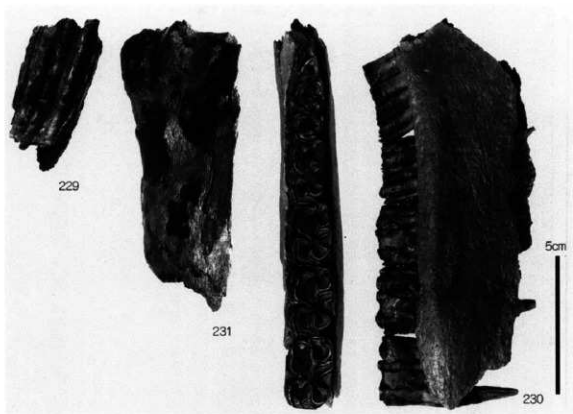
221



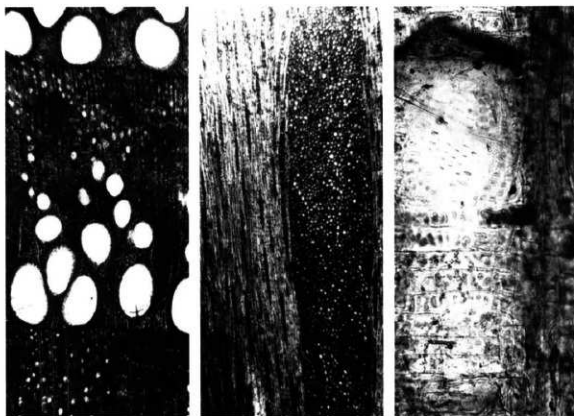
227



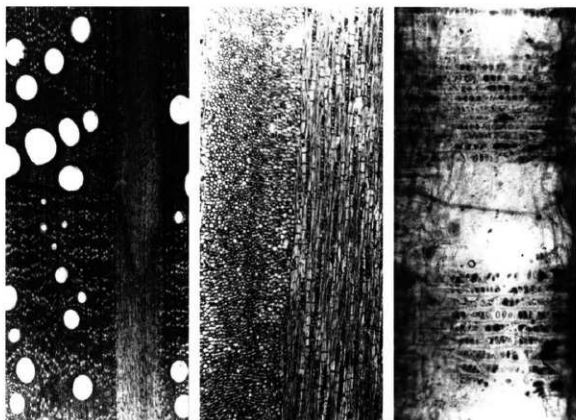
228



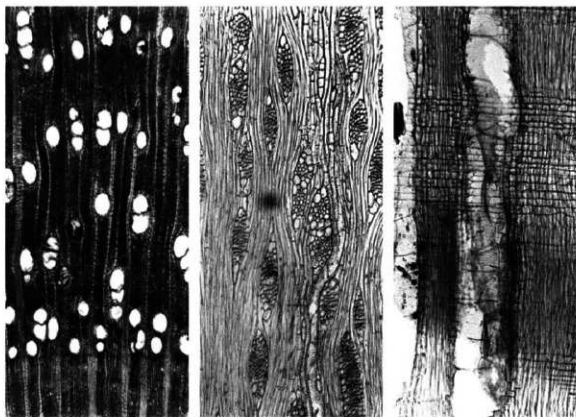
動物遺体(左からウマ臼歯M₂、ウマ中足骨、ウマ下顎骨)



コナラ節(横断面：試料1・接線断面：試料9・放射断面：試料9)



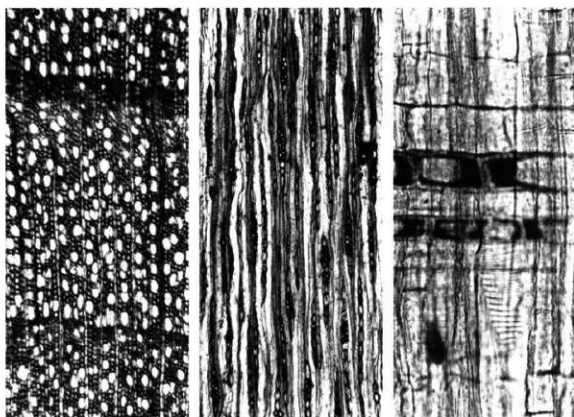
クヌギ節(横断面・接線断面・放射断面:すべて試料2)



ニワトコ属?(横断面・接線断面・放射断面:すべて試料3)



サクラ属? (横断面・接線断面・放射断面：すべて試料4)



不明散孔材 (横断面・接線断面・放射断面：すべて試料10)

大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告 I

ISBN 4-900687-23-5

1998年3月20日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-943-6833 FAX.06-920-2272)

印刷・製本 ナニワ印刷株式会社

〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19

**Archaeological Reports
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of an Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 1995

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of an Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 1995

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association